

『文學評論』

『文學評論』はもと『十八世紀英文學』といふ名前で、明治三十八年九月から明治四十年三月まで、一ヶ年半に亘つて、一週三時間づつ、大學で講義されたものである。もつとも漱石は、この第一編の「序言」を、既に前學年の末、明治三十八年の六月のうちに、講じてゐる。それはこの「序言」の中に、「然し此六月に學年が了へると此九月から急に新しい講義をしなければならん。」だの、「夫れも五年十年と云ふ日子があれば比較的己に満足を與へ得る様な方法で取扱つて見る事も出来るかも知れんが、兎に角夏休が済んで直ぐ始めると云ふ早急な場合に碌な事が書ける者ではない。」だのといふ言葉があるので知れる。思ふに明治三十八年六月の學年末に、自分の『文學論』の講義が思つたよりも早く済み、然も次の講義に移るにはまだ準備が十分整つてゐないし、殊に學年末から新しい講義を始めるのも、新入生にとつて都合の悪い事だらうといふので、繋ぎとして、漱石はこの「序言」で、残りの時間を埋めたものに違ひない。従つて嚴密

に言へば『文學評論』は、明治三十八年の六月から始められてゐるのである。漱石がその前から、ひまひまに、新しい講義の準備をしてゐたに違ひない事は、漱石が明治三十八年三月十一日に明治大學で、『倫敦のアミューズメント』といふ講演(全集別冊)をしてゐる事から、推測する事が出来る。是は、『文學評論』の第二編「十八世紀の狀況一般」の中の第七「娛樂」の中の、熊いちめ・牛いちめ・鬪技・鷄合の光景を、まざまざと眼に見るやうに、浮彫にして見せた講演である。

漱石の序によると、漱石は「此式で十八世紀の末浪漫的反動の起る所迄行く積り」だつたのだといふ。スキフトを論じる條下で漱石は、スキフトとスターンとは何所か似た所を持つて居る、それを比較して論じる事は「作物の系統上多少の参考になる」事ではあるが、然しそれは「寧ろスターンを評する時機が来る迄取つて置」く方が可いと思ふから、此所では觸れない事にするとも、言つてゐる。十八世紀の末までは兎も角、少くともスターンの批評に關する腹案は、既に當時漱石の頭の中で、相當具體的に出來上がつてゐたのではなかつたかと思はれる。然し、明治四十年三月、朝日新聞入社とともに、漱石は大學をやめる事になつたので、そのスターンに關する漱石の意見さへ、我我は聽く事が出來なくなつてしまつたのである。もつとも漱石は、明治三十年三月の『江湖文學』で、スターンの『トリストラム、シヤンデー』を論じ、スターンに對する

自分の意見の一端を述べてゐる。また明治二十六年の三月から六月へかけての『哲學雜誌』で發表された漱石の『英國詩人の天地山川に對する觀念』は、クーバーやウォーヅワースをも取り扱つてゐるが、そのクーバーやウォーヅワースこそ、それまでの典型主義に對して、「十八世紀の末浪漫的反動」の火蓋を切つたと言はれてゐる人人である。同時に漱石が、明治三十二年四月の『ホトトギス』に寄せた『英國の文人と新聞雜誌』は、簡單ではあるが、新聞・雜誌との關係の方面から、十八世紀から十九世紀へかけての、英國の文人を取り扱つたものであつた。その意味で漱石は十八世紀の英文學に就いて、大體觸れべきものには觸れてゐると見る事も出来なくはない。それにしても漱石が「此式で」十八世紀の末「浪漫的反動の起る所迄」の英國文學者の代表的な人人を品評する事が出来なかつたといふ事は、單に英國文學の研究者のみならず、一般文學の研究者にとつて、遺憾極まる事であつた。

漱石は「序言」の中で、自分の十八世紀英文學を取り扱ふ態度が、決して理想的な態度でない事を、はつきり斷つた。自分のやうな日本人で、然も十八世紀英文學を専門に研究したと言ふほどの勉強も積んでゐない者が、五年・十年——せめて二三年の準備をするのならまだしも、夏休みを間に一つ置くだけで、すぐ講義を始めようといふのだから、この講義が不完全極まるものである事は、初めから分り切つてゐる。是は自分にとつて甚だ不愉快な事である。然しそれも事情

已むを得ないと、漱石は言つてゐる。勿論漱石は、假令そればかりを専門にはやらなかつたまでも、是までの内に、随分みつもり十八世紀の英文學を研究してゐるのである。明日から講義をしちと言はれても、恐らく人並の講義をするには困らない下地は出来てゐるし、準備でも相當の準備は出来てゐた筈である。然し漱石の理想は大きかつた。その理想の大いさに比べれば、自分の現在しようとしてゐる事は、自分の一度讀んだものを讀み直ほすのが精一杯くらゐの、その日暮しの仕事に過ぎない。是は漱石にとつて、自分を「太に不愉快」にする以外の、何ものでもあり得ない。——漱石が十八世紀英文學の理想的な取り扱ひ方として考へてゐたものの形が、果してどういふものであつたかは、竟に今日からは知る由もない。然し漱石が『文學論』第五編「集合的F」に於いて、殊にその第五章「原則の應用」の三、第六章「原則の應用」の四などに於いて概論してゐる所のものから想像すると、漱石は或は、出来れば、もつとこの仕事に集中して、作家の時代や作家の生活を更に精到に研究し、時代や生活が作家の作品に作用し、作家の作品が時代や生活に作用し、作品を特殊な色合に染め出すとともに、時代や生活を特殊な色合に染め出して行く所、一口に言へば時代と生活と作品との交互作用が、世界と作家と作品とをどう動かして行くかといふ事を、精到に具體的に把握する事によつて、人間精神の變化と發展との跡を探り、その精神史に於ける文學者の役割がどういふ所にあるかを、明らかにして見たかつたのではな

つたかとも思はれる。然し漱石には、それが出来なかつた。漱石には、そんな事をしてゐる、餘裕がなかつた。餘裕はあつても、それを漱石は、その方へ向ける事を欲しなかつた。『文學論』の場合と違つて、漱石が是から『文學評論』を講じ出さうとする時は、既に『猫』を第一・第二・第三・第四・第五と書き続け、別に『倫敦塔』を書き、『カーライル博物館』を書き、『幻影の盾』を書き、『琴のそら音』を書き、漱石の創作活動が澎湃として漲り出した、丁度その潮先に當つてゐたからである。

漱石は第一編の「序言」だけで前學年を閉ぢ、夏休のうちに次學年の爲の新しい講義を用意して置かうとした。然し漱石の氣持はなかなかその方へ動いて行かなかつた。明治三十八年八月十一日中川芳太郎に宛てて漱石は、「皆川は歸省、傳四は大磯へ避暑寅彦も歸省。僕のうちへくる定連は大分減つたので少々日の長い様な氣がする。ところが來年の講義が氣にかゝつて義太夫の文句ぢやないが食ものんどへ通るまいと思ふ程でもないが實際大學がいやになつて仕舞つた。」と書いてゐる。それでも漱石はこの夏休は、一所懸命集中して講義の準備をしたと見えて、七月二十六日に『一夜』を脱稿して『中央公論』にやつた外は、なんにも書かなかつた。その上漱石は、八月三日以來、それまで毎日のやうに書いてゐた手紙を、八月十一日以後九月十一日までに、たつた二本しか書いてゐない。もつとも是は、漱石の所へそれだけ手紙が來なかつたせゐるもあつた

のかも知れないし、漱石がその間にかいた手紙で、散逸してしまつたものもあるのかも知れない。従つて是を一概に、漱石が講義に集中してゐた證據とする譯にも行かないには違ひないが、同じ年の九月十二日野村傳四に宛てて、「傳四先生。僕は今週休んで來週から開講と致す積りだから此旨を一寸聽講の諸君子に報知してくれ玉へ。むだ足をさせるのも氣の毒と思ふ。」と漱石が書いてゐるのは、講義のノートにまだ一往の段落がつかないから、それまで休講する氣になつた事を意味するものである事は、明白である。

元來漱石は、主として夏休に凡そ一年分の講義の腹案を作つてしまひ、教場ではそれをたよりに講義し、不斷の時間は、多く自分自身の爲の、讀書と思索とに費す習慣を持つてゐたやうである。然し漱石が創作に従事し出してから、漱石は、自分の講義の腹案を作るのみならず、それをすつかりノートに書き下ろし、教場ではただそれを読む事にして、不斷の時間が連続して、自身の爲に自由に使へる用意をした。従つて『文學評論』の讀者は、漱石が大學で講じた講義と殆んど同じもの（勿論漱石は後に『文學評論』の文章を訂正もしたが）を読んでゐると言つて可いのであるが、然しそれだけに漱石の勞力は多く、またそれだけに漱石が是に費さなければならなかつた時間も多かつた。恐らく漱石は、この年の八月から九月の初めへかけては、あらゆる精力と時間を擧げて、この仕事に専念したものに相違ない。漱石は九月に入つてから『猫』第六

を書いてゐるが、然し是が脱稿したのは、九月二十六日の事であつた。九月十七日、高濱虚子宛の手紙の中には、「小生も今月末迄には猫のつゞきをかく積りに候」とある。然もその同じ手紙には、「毎日來客無意味に打過候。考へると己はこんな事をして死ぬ筈ではないと思ひ出し候。元來學校三軒懸持ちの、多數の來客接待の、自由に修學の、文學的述作の、と色々やるのはちと無理の至かと被考候。小生は生涯のうちに自分で満足の出来る作品が二三篇でも出来ればあとはどうでもよいと云ふ寡慾な男に候處。それをやるには牛肉も食はなければならず玉子も飲まなければならずと云ふ始末からして遂々心にもなき商買（買）に本性を忘れるといふ顛末に立ち至り候。何とも残念の至に候。（とは滑稽ですかね）とにかくやめたきは教師、やりたきは創作。創作さへ出来れば夫丈で天に對しても人に對しても義理は立つと存候。自己に對しては無論の事に候。」ともあるのである。

漱石の創作欲は段段旺盛を極めて行つた。『猫』第六に次いで『菫露行』が書かれる。『趣味の遺傳』が書かれる。『猫』第七・第八・第九・第十が書かれる。『坊つちやん』が書かれる。かうして次ぎから次ぎへと作品が生れるにつれて、漱石は講義の準備の爲に時間をとられるのが、愈苦痛になつて來たらしい。明治三十九年四月十一日、野間眞綱宛の手紙には、「小生も是から又多忙にとりかゝる。講義をかくのがいやでたまらない。」とあり、同じ日の夜の鈴木三重吉宛の

手紙には、「僕多忙でこまる。昨日から講義をかきかけたら半ページ出來た。講義を書くより千鳥をよむ方が面白い。」とある。それでも漱石は、夏休までの講義のノートは作り上げたと思えて、七月の半過までは、講義を書く事の不愉快に關する手紙は、少くとも『書簡集』には出てゐない。その間に漱石は、卒業論文を読み、口頭試験を施行し、高等學校の答案調べを済し、七月三日に至つて、やつとのうのうした氣持になつてゐる。それから七月十七日に『猫』第十一を脱稿してゐる。然もその翌日、七月十八日小宮豊隆宛の手紙の中には、「來月は講義をかゝなければならぬ。講義を作るのは死ぬよりいやだそれを考へると大學は辭職仕りたい。」とあり、越えて八月二十八日、同じ小宮豊隆宛の手紙には、「實は講義を一ページも書いてゐない。然し而して十月一日發行の中央公論にかく約束がある進退に窮する譯であつて見れば講義は容易には始まりさうにもない。まづ以て十五日以後二十（日）以内と見當をつけて御出京可然候。」とあり、八月三十一日高濱虚子宛の手紙にも、「もう九月になる講義は一頁もかいてない。中央公論は何をかいたものやら時間がないさうだ。是で小供の病氣が（原）ねるれば僕は何も出來ない。中央公論には飛んだ不義理が出来る」とある。『中央公論』の小説といふのは、言ふまでもなく、『二百十日』の事である。是は九月九日に書き上げられた。然も漱石はその前月、八月九日に『草枕』を書き上げてゐる。かうして講義を書く事の苦痛と作品を書く事の悦樂とが漱石の頭の中で入り亂れて、愈深刻に漱石

を苦しめるのである。——それでも漱石は、押し切つて、講義のノートを書いた。

然しかういふ中で書かれた講義のノートが、それほど長い講義に堪へる分量に達する筈がない。既に學期半過の十一月三十日に、漱石は片上伸に宛てて、「是から大學の講義が切れたから今年分を少々かき夫からホト、ギスの約束を果すうちに今年の文章事業は出来なくなる事と存じます。ホト、ギスの方も漸の事で十二月二十日〔迄〕待つて貰ひました。夫から學校の試験をして文學論の校正をして大晦日迄働く積りであります。」と書いてゐる。

このやうな心持の下に、このやうに急がしい思ひをして、とぎれとぎれに準備された漱石の講義が、漱石に満足の出来る講義であり得なかつた事は、言ふまでもない事である。漱石が手紙の中で、講義の事に觸れる度に、口癖のやうに、或は講義を書くのは死ぬより厭だと言ひ、或は大學を辭職したいと言つてゐるのは、勿論その束縛の爲に、自分の好きな時に好きな事をする事が出来ない窮屈から發してゐるのには違ひないが、同時にその事は漱石の、自分が自分の義務を十分に遂行してゐない、心の疚しさから來てゐる事も、亦疑ひを容れない。——然し、漱石が自分の仕事の結果に満足してゐるゐないに拘はらず、漱石のこの『文學評論』が、漱石でなければ、外の誰にも眞似をする事の出来ない、ユニークな講義であつたといふ事は、公平に考へて、誰でも認めざるを得ない事實であると思ふ。

「序言」を見ても分かるやうに、漱石は此所で、自分の、日本人としての立場を、夏目漱石としての立場を、嚴守した。然もその日本人としての夏目漱石が、傲慢に膨れもせず、卑屈にいちけもせず、男らしい白紙の状態で、直接に作品と接觸し、其所から得た印象を精到に解剖した上で、それらのものに價值的等級を附けて見せたものが、この『文學評論』である。漱石はロンドンに於て『文學論』を考へ続ける事によつて、日本人には日本人としての獨特な立場があり、その立場に忠實である事は、英國人が英國人としての立場に忠實であり、獨逸人が獨逸人としての立場に忠實であると同じく正常な事であるといふ事、然も人は、あらゆる點に於いて、自己に忠實であるといふ事によつてのみ、その國の文化、ひいては世界の文化の進展に積極的に参加する事を可能にされるものであるといふ事を、はつきり認識する事が出來た。同時に漱石は『文學論』を考へ続ける事によつて、文學に於いて、何が美しく何が醜く、何が尊重すべきで何が指彈すべきであるかを、はつきり認識する事が出來た。それを『文學論』に於けるよりは、更に具體的に示さうとしたのが、『文學評論』である。『文學評論』は、言はば、漱石の『文學論』の臨床講義であつた。『文學論』では抽象して説かれた事が、此所では、生きて動いてゐるものの中から、撮み上げて來て論じられる。

勿論ある見方からすれば、漱石のこの『文學評論』は、十八世紀の英文學史としては、望むべ

き多くのものを持つてゐるとも、言ふ事が出来るだらうと思ふ。例へば十八世紀文學史家として有名な、獨逸のヘルマン・ヘットネルは、その劃期的な名著の第一巻として、十八世紀の英文學を取り扱つてゐるが、ヘットネルのやうに、十八世紀をニュートンの科學上の大發見を以つて始まる、全歐羅巴的な文化史的な一時代と見て、その時代の特徴を織り上げる著しい彩絲の一つとして、英吉利・佛蘭西・獨逸の文學を大きな關聯の下に眺めるといふ方法も、確かに一つの良方法であつたには違ひない。漱石は第二編の「十八世紀の狀況一般」で、實に要領よく壓搾して、また實にプラスチックに生ると、十八世紀の英國の哲學・政治・藝術・珈琲店・酒肆・俱樂部・倫敦・倫敦の住民・娛樂・文學者の地位・倫敦以外の地方の狀況などを敘述して、上乘の歴史小説かなぞのやうに、人を十八世紀の英國に連れ込み、それと當時の文學とを反襯させつつ評論の歩を進めて行きはしたが、然し漱石は、時代と作品との交互作用をある程度で打ち切つて、深入りせず、主として作品そのものの中に深入りして、そこから汲みとられ得る、あらゆるものを汲みとらうとした。従つて此所では時代は描かれてはゐても、それは言はば、寫樂のかいた役者の似顔繪が、雲母の背景の上に浮き上がつて見えるやうに、文學を浮き上がらせる爲だけの、時代の描寫にしかなつてゐない傾向があるのである。

是は漱石が、自分の創作に急がしく、假令さういふ事をやりたいと思つてゐたとしても、それ

を丹念に研究する暇が、漱石になかつたからであつたに違ひないと思はれる。その上漱石は、時代と文學とを交渉させて、その交互作用によつて時の文化が、一つの流れとして動いて行くといふ見方が、精到に科學的な精神で裏打されてゐない限り、ともすると放恣になり獨斷的になり不自然になり無理押しつけになつて、單なる主觀的な宣言になり勝な點を、好まなかつた。のみならず漱石は、作家の生活や、作家の生活環境からのみ、作家の作品の特徴の一切を説明し悉さうとする考へ方にも、あまり好意を持つてゐなかつた。作家の出現が一回的であると同じやうに、作家の作品も一回的のものである。作家の生活、生活環境のみならず、作家自身の中の、心理的にさまざま微妙な複雑なものが寄り集つて、一人の作家の一つの作品を形成する。一つの作品の秘密は、その作品そのものの中にあつて、その作品の周圍にあるのではない。同様に、一人の作家の秘密は、その作家その人の中にあつて、その周圍にあるのではない。作家の生活・生活環境だけをいくら精細に研究しても、その作家の作品の秘密は、それだけでは決して明らかめ得られないものではないといふのが、漱石の意見であつたらしい。勿論是が末流・模倣の作家に當て籍るものでない事は、言ふまでもない。末流・模倣の作家など、自分の中にも作品の中にも秘密など持つてゐる筈がないのである。然し例へば漱石が、スキフトの作品をスキフトの時代やスキフトの生活と對照させながら、かういふ時代が必しもスキフトのやうな人間を生むとは考へられない

し、かういふスキフトの生活が亦必しもスキフトのやうな作品を生むとは考へられないといふ事を、特に強調してゐる事に照し合せて見ても、漱石が作家と作品とに關して、漱石獨特の考へ方をしてゐたといふ事は、十分想像され得るだらうと思ふ。

もつとも是は或は、漱石のこの時代に對する洞察や、もしくはスキフトの生活に對する認識が、不十分であつた事を意味するものかも知れない。然し漱石は、漱石の意見として、さういふ方面からの、一つの作品の祕密を闡明する事の可能を、十分認める事が出来ないのである。それを認める爲には、漱石は自分自身、あまりに藝術家でありすぎた。また、自分自身の個性をあまりに尊重しすぎた。漱石から言へば、藝術作品は時代によつて、藝術家の生活によつて、ある程度規定されるには違ひないが、然しある程度を超えると、その藝術家は、自分の個性に従つて、自分の藝術を、自由に展開し、自由に表現する事が出来るといふのである。

従つて漱石にとつて特に此所で問題となつたのは、作家の作品そのものであつた。勿論さうする方が、漱石にとつて、あまり時間をとられないで済む事であつたから、不得已漱石はさうしたのかも知れない。然し作品そのものに直接に觸れて、是ほど價值あるものを把握したものが、日本は無論の事、西洋の文學史家、もしくは文學批評家の中に、どれだけあり得るかを考へて見る時、我我は、漱石があれだけの急がしい思ひを重ねてゐる中で、然もあれだけ講義を書くのが厭

だ厭だと言つてゐる中で、是ほど立破な仕事を残してくれた事を、寧ろ感謝すべきではなかつたかと思ふ。殊に、是がとぎれとぎれの時間に、とぎれとぎれ書かれたものであるにも拘はらず、(勿論漱石は後に全體に眼を通し、全體として筆を入れたとは言へ)、全體の構成の上から言つても、表現の密度の上から言つても、少しもむらがなく、初めから終りまで、一氣に書き下ろしてましたやうに、整然と纏つた感じを興へるのは、漱石の頭の使ひ分方が旨く、漱石の頭の集中させ方が巧みである事から來てゐるには相違ないが、まさに驚嘆に値ひすると言つて可い。その意味では、藝術的な作品である。然も此所で取り扱はれたアチソンでもスチールでも、スキフトでもポーブでも、乃至はデフォーでも、實にはつきりと我我の眼の前に、藝術家としての、その本質的な姿を現はし、漱石の評価する如くに評價されるのが、極めて當然であるかのやうに、漱石の意のままに起居動作する。是は漱石が、自分の此所で取り扱つてゐる作家を、自分の傀儡にしてゐるといふ事を意味しない。傀儡にしてゐるとすれば、これらの作家は、漱石からすべてその灸所を攫まれてゐるが故に、寝かすも起すも、一切漱石の自由になるといふ事に過ぎない。漱石は、自分が無心に相手から受とつたものを、深切に検討し、その結果を我我の前に列べて見せるだけである。それは漱石にとつてツルナーなるが故に、我我も亦それをツルナーに、素直に受け容れる。これらの作家も亦、ツルナーに素直に彼等の本質的な姿を、我我の目の前に露呈する。

例へば、西洋の評家は、大抵誰でも、『ロビンソン・クルーソー』の描寫が寫實的に精到な事を賞揚して、驚嘆すべき技巧だと言つてゐる。然し漱石はデフォーの事を、汽車や電車のある世の中に、何所までも自分の二本脚であるで行かうとする、車夫のやうな作家だと言つてゐる。是は驚くべき宣言である。然しその理由を聞いて見れば、なるほどデフォーは車夫に違ひないのである。殊に漱石のやうに、漢詩文の簡潔で遒勁な表現と俳句の寡黙で幽玄な表現に親しみを持つてゐる作家から言へば、内面的な變化を持たず、加速度的に發展する事のない結構を、無神経にひた押しにのろろ書いて行くデフォーの書き方は、冗漫で蕪雜で退屈で、とても我慢が出来ないに違ひないのである。漱石はそれを、正直に、且つ大膽に、表白する。漱石はまたポーブの『サッフオーよりファオンに寄す』や『アベラアドに送れるエロイザの消息』などを例にひいて、ポーブの中にも非常に情熱的な、ロマンティックなものが動いてゐた事に注意する。それにも拘はず、ポーブが、その方面へは自分の才を伸ばさずに、反つて天下の潮流に棹さして、別に自分の詩境を開拓してゐるのは、恐らくポーブが時勢から壓迫されたせゐであるに違ひないと言つてゐる。ポーブが人工的な詩人で、章句に磨きはかかつてゐても、冷たい教訓的な警句計り並べてゐたやうな事は一般に言はれてゐても、ポーブのこの點を指摘したものは、恐らく外にないに違ひない。殊にポーブ及びポーブの一派が古典の中に使はれた名前や文句などを難有さうに使つ

てゐる點で、後の人人から、自分の感情を無視して、ギリシヤ・ローマの作家の眞似だけをして暮す、その意味で人工の極を悉した人間のやうに言はれてゐるのに對して、漱石が是を、藝者が最良の役者の紋をつけて喜んでゐるのに比し、それが人眞似をして冠をつける猿のやうなものである事、人間心理の機微に觸れた適切な解釋で、ポーブ並にポーブ一派に對する、是ほど可い手向はないに違ひないと思はれる。然も是は單にポーブ及びポーブ一派に對する救ひの手であるのみならず、佛蘭西から獨逸へかけて、ある期間の間文壇を風靡した、ココの詩風に對する救ひの手でもあつたのである。

基督教徒の國では、スキフトの『桶物語』は、上乘の諷刺として通用してゐるやうである。然し漱石は此所でも決して、さういふ評判に雷同しない。漱石は飽くまで自分の立場に踏み止まつて、それが一般人間的なものを取り扱つてゐるのでない所以を、比喩的で主として人の知力にのみ訴へようとする傾向を持つてゐる所以を、事實に並行させようとする爲に無理な不自然な所が方方に出て來る所以を、一一例證し、自分は是をそれほど高く買ふ事は出来ない、斷言する。然も漱石は、その爲め『桶物語』の「警句の豊富にして勁拔なる點に於て、容易に他人の追隨を許さない奇な作物である」事を見落さない。のみならず、漱石は、特に此所に著しく現はれてゐる、スキフトの用語の卑猥である事に就いて、アチソンが用語をなるべく綺麗に濟まさうとして

ゐるのに比較し、それには「何だか女性的な厭味がある。」が、スキフトの方は野鄙は野鄙でも、「野鄙な事を忌憚なく平氣で傲然として敍べて居る所が男性的である。」とさへも言つてゐるのである。——例をあげてゐれば、きりがない。要約すれば、漱石が此所で言つてゐる事は、すべて漱石にとつてツルーな事であり、然もそれが私のない、明鏡のやうな漱石の心に映つたツルーな事である故に、漱石にユニークな意見となり、従つて亦、獨創に充ちた意見となつてゐるのである。漱石は「序言」の中でも、その他の所でも、自分はこの書の中で何の誇るべき獨創の見を持つてゐないと言つてゐるが、然しこの書は、歐羅巴の文學史家の前に出しても、決してひけをとる事のない、卓見と洞察と獨創とに富んだ文學史であつた。もし日本の文學研究書の中で、外國語に翻譯する價值あるものを求めるとすれば、さしづめこの『文學評論』など、最も適切なものの一つであると思ふ。

然し『文學評論』は、後にいみじくも『文學評論』と改題されたやうに、十八世紀の英文學史であるといふよりも、より多く、十八世紀の英文學史に現はれた目ぼしい作品を對象とする、漱石の「文學評論」であつた。「序言」の中の文學批評の方法論的考察、趣味の普遍性と個別性との説、その普遍性から來る自然の暗合の辯、もしくはアヂソンの條下のキットとヒューモアとの論、アヂソンの世の中に對する不満足とスキフトの世の中に對する不満足との比較、もしくはス

キフトの條下の滑稽と諷刺との區別、作家の傳記と作品との關係、『ガリヴァー旅行記』の解剖、もしくはボープの條下の自然論と超自然論、文學に於ける個人的なるものの意義、もしくはデフォアの條下の結構論と描寫論、——漱石は「四家ともに各態度を易へて多少の變化を試みて見た。」と言つてゐるが、それぞれ條下でそれそれ問題にされた項目は、すべて『文學論』的な問題であり、然も漱石の『文學論』では、或は全然觸れられなかつたものか、觸れられてゐても、觸れられなかつたか、もしくは別方面からしか觸れられなかつたものが、此所で幾つもの例證を從へて、巨細に觸れ悉されるのである。その爲めこの『文學評論』は、材料は十八世紀の英文學ではあつても、内容は寧ろ十八世紀の英文學史である事から擺脫して、もつと一般的な、「文學論」的なものの中に踏み込んでゐるのである。漱石がその序の中で、「此講義の中に評論した作者は、皆當代の大家であるけれども、或は其一人／＼に費やした頁の數があまり多過ぎはせぬかとの難もあるだらうと思ふ。然し自分の主意は單に是等の諸家を論ずるのでなくて、是等の諸家を通じて、余の文學上の卑見を述べる積なのだから其邊は讀者に斷つて置きたい。」と言つてゐるのも、所詮漱石が此所で意圖したものを、はつきり言明してゐるに外ならない。

初め漱石に乞うて、『文學評論』のノートの淨書を引き受けた者は、瀧田栲陰であつた。さうしてその出版を引き受けた者は、金尾文淵堂であつた。然るに明治四十年五月二十九日瀧田栲陰宛

の手紙で、漱石が「御手紙拜見實は昨日金尾が来て十八世紀文學出版の禮を云ふて瀧田君が野上さんと一所にやりたいと云ひますがどうでせうといふから夫もよからうと云ふたら立派なものが出来ますかと聞いたから夫は受合へない。自分のものは自分がやるより外にうまく出来る筈がない。ことに二人や三人でやつては却つていけまいと云ふた。夫から可成は一人でやるがいゝだらうと附加した。すると金尾の云ふには瀧田君はとても一人では出来すまいと云ふた。僕答へて瀧田君は文章は達者だが専門が法律家だからあの講義のうちのある所は面倒かも知れないと答へた。それでは外に人はありませんかときいたから、人はいくらでもあるが、瀧田君が持つて歸つたものだから、まあ瀧田君に相談して見たらよからう、瀧田が進んでやるのが面倒ならば森田にでも頼んだらやつてくれるだらうと云ふた。話は夫れぎり分れた。金尾はもう出版する積りで廣告杯の事迄云ふて歸つた。／＼僕は君が十八世紀文學を書き直すに就てどの位の興味を有して居るか知らぬ。又それを家計上のたすけにする必要あつての事とも知らぬ。夫故以上の如き返事をして置いた。君と金尾の間の面白くない事も全く知らなかつた。金尾は其事に就て一言も云はなかつた。／＼右の譯である以上はたとひ金尾から十八世紀を出すにしても君がやらなくては少し君として面白くない事になるだらう。金尾からもし君の所へ相談に來たら夏目さんと相談した上返事をするると云つて歸し玉へ。……」と言つてゐるやうに、瀧田と金尾とは仲違ひをしてゐたので、

問題が面倒になつた。それでも明治四十年七月二十日野間眞綱宛の手紙には、「十八世紀文學の講義を金尾で出したいといふから承知した。森田、瀧田兩君が書き直してくれる筈。此年は無暗に書物ばかりこしらへる。」と書いてある。然し同じ年の七月二十六日鈴木三重吉宛の手紙の中には、「十八世紀文學は金尾をやめて春陽堂にした。」とある。是は恐らく瀧田と金尾との仲違ひの結果、雙方の話合が圓滑に進行しなかつた爲だらうと思ふ。然も瀧田樗陰は、一人でやるのが心細かつたと見えて、既にこの時相棒に森田草平を頼んでゐる。

然し事實は、この淨書の仕事の大部分は、森田草平の手によつて行はれたと言つて可かつた。明治四十一年二月四日漱石が樗陰に宛てて、「拜復文學評論につき御申譯承知致候徹夜にては恐れ入候適當の所にて御まごめ願上候」と書いてゐる所をもつて見ると、樗陰もこの仕事が捗らない事を氣にして、徹夜までしたもののやうであるが、然し樗陰はもともと法科の出ではあるし、當時『中央公論』の編輯に屬して原稿取りに駆け廻り廻つてゐた際ではあるし、殊に今度は『文學論』とは違つて、一切の引用文を翻譯する方針が立てられてゐた爲に、この仕事は、樗陰には荷の勝ち過ぎた仕事となつて、漱石には大した手助けにはならなかつた。森田の翻譯した方は、直すのに割に手がかからなかつたが、どうも瀧田のには困つた、と漱石が言つてゐた事を、私は今でも記憶してゐる。

この原稿の淨書がいつごろ出来上がったか、精確な所は分からない。然し漱石は、明治四十一年は、十月五日までは、『三四郎』を書く事に忙殺されてゐた筈である。假令原稿がそれ以前に出来上がつてゐたとしても、漱石は、十月六日以後でなければ、校閲の筆をとる事が出来なかつたに違ひない。然るに明治四十一年十一月二十三日鈴木三重吉宛の手紙には、「御手紙拜見仰の如く文學評論で大弱りの状態しかもくだらぬ努力故つくづくいやに成候此分にては當分成田行も駄目に候。」とあり、明治四十二年一月発行の『趣味』に掲載された『文壇の趨勢』の中には、「向後日本の文壇はどう變化するか抔といふ大問題は中々分りにくい。況んや二三日前途『文學評論』の訂正をしてゐて、頭が痺れた様に疲れてゐるから、早速に分別も浮びません。」とあり、『文學評論』の自序には、「去年の暮書肆の催促を受けて、漸く訂正に従事し出してから約一ヶ月の間は専心此講義にばかり掛つてゐた。」とあるのだから、恐らくこの仕事は、十一月の初め比から十二月の初め比へかけて、成し遂げられたものだらうと想像される。漱石が、創作活動に従事する事を以つて自分の天職と信じ、所謂「學理的閑文字」に時間を潰す事を、「くだらぬ努力」とし、「つくづくいやに成」つたと感じてゐた點では、『文學評論』の訂正も亦、『文學論』の場合と同じではあつたが、然し今度漱石が訂正に費した時間は、『文學論』の場合と違つて、遙かに少なかつた。是は一つは漱石の境遇が變つて、「専心此講義にばかり掛つてゐる事が出来た爲でもあつた。」

たが、然し他の大きな理由は、漱石のこの講義のノートが、ただ原稿紙に淨書しきへすれば可いほど、ちゃんとした漱石の文章に書かれてゐた爲でもあつたと思はれる。それでも漱石は、「全部の訂正を終つた上」で「約半分程は書き直した」と言つてゐる。「くだらぬ努力」で「つくづくいやに成」つたと言ひながら、ともかく一往は自分の得心の行くまで、手を入れなくては氣の濟まないのが、漱石である。然しさうしてさへもなほ漱石は、「余の意に満たぬ所は澤山ある。」と言ふのである。

漱石は、恐らく『文學論』の誤植に懲りたのであらう、『猫』の下篇以後一切の校正を人任せにしてゐた漱石は、自分自身この『文學評論』の校正に當つた。校正は既に年内から出始めた事と想像されるが、然しそれがいつ濟んだものかは、はつきり分らない。ただ明治四十二年三月三日皆川正禧宛の手紙に、漱石が「此一週間程少々心地が閑適で生命が延びつゝある。それに春風が何よりの藥だ。鶯が時々鳴く、あれは好いものだ。西洋人は知らないものだ。文學評論が一週間位すると出来る。上げるから學生に紹介して呉れ玉へ。」と書いてゐる所から想像すると、二月二十日前後には、校正ももうすつかり片づいてゐたものらしい。漱石は片方で『永日小品』を書きつつ、片方で『文學評論』の校正を見て行つた譯である。

日記によれば、三月十日に春陽堂は『文學評論』の奥附千枚の檢印を、漱石の所にもらひに行

つてゐる。その奥附には、「明治四十二年三月十三日印刷明治四十二年三月十六日發行」と印刷してある。然し春陽堂は豫想外に注文が來たので泡を喰つたものか、それとも初版の製本部數を少くしたものか、初版全部を本屋の方へ廻してしまつて、やつと再版本を漱石の所へ届けた。それは四月三日の事である。即日漱石は一部を大塚保治に贈り、それに手紙を添へた。——「拜啓かねて大學在職中にやつた講義ののこりものを又出版したから御覽に入れる。もう是で大學に縁のあるものはなくなつた。大學は君の周旋で這入つた處だから夫が緣故で出來た著書は皆君が間接に書かした様なものだから記念の爲め一部机右に御備へ置を願ひたい。中は讀んでも讀まなくてもいゝが可相成は讀んでくれる方がいゝ。さうして批評をしてくれゝば猶結構である 艸々」

漱石は『文學論』に次いで『文藝の哲學的基礎』と『創作家の態度』とを講演し、その筆記を訂正して、一つは新聞に一つは雑誌に發表した。然し漱石はこの『文學評論』の訂正以後、全然かういふ『文學論』的なもの、もしくは『文學評論』的なものに、筆を染めなかつた。漱石は後に、明治四十四年の夏、頼まれて方方講演をしてゐるいたが、然しその中に文藝論はあつても、それは『文藝と道德』といふやうなもので、文藝を寧ろその倫理的方面から論じたものであつた。晩年漱石が、無私の態度で書かれた作品が最も尊重すべき作品であるといふやうな考へを懷くやうになつてから、漱石はその立場から「文學論」を纏めて、何所かで講義して見たいやうな口吻

を洩してゐたが、それは漱石の死によつて、到頭實現されなかつた。修善寺大患以後漱石の作風は、次第に大轉回を遂げてゐる。晩年の漱石の「文學論」が、漱石の修善寺大患以前の『文學論』や『文學評論』とは、可也違つたものになつてゐたに違ひない事は、十分想像され得る所である。然しそれがどういふ内容を持つ筈のものであつたかは、徒らに揣摩臆測を逞しうする以外、今となつては、明らかにする方法もない。(一一・九・一八)

「評論・雜篇」

此所で取扱はれる「評論・雜篇」とは、主として漱石の小評論と講演と他人の著書の爲に書いた序文との謂ひである。それは最後の序文の一群を除いて、大半東京朝日新聞に掲載された（序文でも、『鶏頭』の序と『煤煙』の序と『新日本畫譜』の序とは、一度東京朝日に掲載された）。『文藝の哲學的基礎』のやうな、可也理論的な、さうして可也長い講演でさへ、明治四十年五月四日から六月四日まで、二十七回に亘つて、東京朝日に掲載された。——もつとも是は、漱石入社直後の事ではあり、講演の初めに漱石と社との間に、それを掲載するといふ約束もあつた事ではあり、社の方から言へば、是で漱石の入社を廣く長く天下に廣告する意味もあつて、東京朝日は、新聞としてこの破天荒事を、敢てしたものではなかつたのかと思ふ。その後漱石は朝日の爲に幾度も講演にひつぱり出されはしたが、然しその講演の筆記は、『文藝の哲學的基礎』と同じやうに、漱石がそれをすつかり書き改めてしまつても、決して新聞に掲載される事がなかつた。

「評論」のうち、最初の『作物の批評』と『寫生文』とは、讀賣新聞に掲載された。是は漱石が朝日に入社する以前の事である。その上漱石は、朝日に入社する前年、即ち明治三十九年の十一月に、讀賣新聞から入社を勧誘を受けてゐる。その前にも讀賣新聞は、漱石の『文學論』の序を、殆んど一面全部を割いて、月曜附録に掲載してゐる。さういふ好意が漱石に、讀賣新聞の爲に引き続き筆を執らせる、因縁をつくつたものに相違ない。さうしてこの『作物の批評』と『寫生文』とは、漱石が『猫』その他の小説を書き出して以來の、初めての論文であつた。『作家の態度』は、漱石が、明治四十一年二月十五日神田の青年會館に於いて、東京朝日主催の講演會で講演したものの筆記を、更に書き直したものである。これは同じ年の四月の『ホトドギス』に掲載された。『田山花袋君に答ふ』・『コンラツドの描きたる自然に就て』・『明治座の所感を虚子君に問れて』・『虚子君へ』・『夢の如し』は、國民新聞に掲載された。是は當時『ホトドギス』の高濱虚子が、國民俳壇の選者をする傍ら、島田青峯と野上白川とを使つて、國民文學欄の編輯を擔任してゐたからである。『太陽雜誌募集名家投票に就て』は、明治四十二年六月十五日發行の『太陽』臨時増刊『新進二十五名家』に掲載された。是が何故に『新進二十五名家』に掲載されるやうになつたかは、漱石自身が、本文の中で委しく述べてゐる。『「額の男」を読む』は、大阪朝日に掲載された。是は長谷川如是閑の『額の男』が、大阪朝日に連載された小説であつたから

である。

東京朝日では、明治四十二年十一月二十五日から、漱石主宰の下に、文藝欄を設ける事になった。森田草平がその下働きを勤め、小宮豊隆がそれをすけた。『日英博覧會の美術品』以下『學者と名譽』に至るまでの小評論は、すべてその文藝欄の爲に書かれたものである。漱石は編輯者の立場として、四百字、四枚程度の、一回讀切の原稿を歓迎した。さうしてそれは、長くても、三回以上に伸びる事を許さなかつた。漱石自身も亦この原則を遵奉して、自分の原稿を、決して三回以上に互らせなかつた。その上漱石は、主宰者としての自分が、屢紙面に顔を出す事を遠慮した。是は文藝欄を設ける事にした社の希望に添ふものではなかつたのかも知れないが、然し漱石は寧ろ、なるべくいろいろな人の、さうして特に若い人の原稿が、萬遍なく載つて、紙面に變化と生彩とが出る事を計つた。それにも拘はらず『文藝とヒロイツク』以下『イズムの功過』まで、漱石の原稿が毎日のやうに掲載されたのは、漱石の檢閲を通過する事が出来なかつたある原稿を、外に原稿がないといふ理由で、森田草平が無理に印刷に廻してしまつた爲に、漱石を怒らせたからである。當時胃潰瘍の疑ひで胃腸病院に入院してゐた漱石は、外に原稿がないなんていふのなら、俺一人で一週間で二週間で書き續けて見せると言つて、是らの原稿を矢繼早に書いて、社に届けた。

東京朝日の文藝欄は、明治四十四年十月二十四日に、廢止する事に決定された。漱石がどうしてこの事に同意したかは、『書簡集』の中の、明治四十四年十月二十五日小宮豊隆宛の漱石の書簡に詳しい。然も文藝欄の廢止とともに、漱石の評論も、朝日で發表される事が少なくなつた。大正元年の『文展と藝術』、大正三年の『素人と黒人』、大正五年の『點頭錄』——長さの點では相當長いものではあるが、漱石はその後、たつた三つしか書いてゐない。是は、池邊三山が東京朝日の主筆をやめた爲もあるに違ひないし、その後絶えず胃潰瘍の爲に悩まされなければならなかつた爲もあるには違ひないが、一方からいふと、漱石はその後寧ろ書をかき畫をかく事に興味を持ち、論文の形で自分自身を表現する興味が、可也薄らいで行つた爲もあるらしい。

もつとも修善寺の大患以後でも漱石は、大阪の朝日新聞の請に應じて、大患後滿一ヶ年の、明治四十四年八月には、明石だの和歌山だの堺だの大阪だので、講演した。その講演の筆記を更に書き直したものが、『道樂と職業』・『現代日本の開化』・『中味と形式』・『文藝と道徳』である。是は『朝日講演集』の名の下に、その講演會の時の外の講演と一緒に、朝日新聞社から出版された。その他漱石は、大正二年十二月十二日に第一高等學校に於いて、『模倣と獨立』といふ題で講演した。大正三年一月十七日には東京高等工業學校に於いて、是は題なしで、講演した。(是らの講演の筆記に、漱石は筆を入れてゐない。従つて是らの筆記は『別冊』に收められる。) 然し同じ

年の十一月二十五日午後三時からの、學習院での講演は、漱石によつて書き直された上で、學習

院の『輔仁會雜誌』に掲載された。是が『私の個人主義』である。然も漱石は、第一高等學校の講演でも、また學習院の講演でも、その初めに、近頃の自分の頭の働き方が、かういふ所へ來て組織立つた話をするのに適しないやうな働き方になつてゐるから、講演らしい講演が出來なくてお氣の毒だといふ意味の事を、いつでも斷つた。是は前にも述べたやうに、當時漱石の頭が、書をかき畫をかい「鬱散」する事の方に、より多く向けられてゐたからである。『文展と藝術』や『素人と黒人』の或部分や『模倣と獨立』の或部分や『津田青楓君の畫』などは、主としてさういふ方面に向いてゐた自分の頭に順應しつつ、其所から漱石が縋み出して來た理論的なものだといふ事も出來るであらう。もつとも『津田青楓君の畫』は、漱石が津田青楓から頼まれて、青楓畫會の引札の爲に書いたものである。是は後に『美術新報』に掲載された。

「雜篇」には是まで、序文の一群以外は、『入社之辭』と『元日』と『余と萬年筆』とだけしか收められてゐなかつた。『余と萬年筆』は、丸善の内田魯庵に頼まれて、丸善から發行した『萬年筆の印象』の爲に書かれたものである。『入社之辭』と『元日』とが、朝日新聞の爲に書かれたものであることは、言ふまでもない。同じ朝日新聞に載せられた『虞美人草』の豫告と『三四郎』の豫告と『それから』の豫告と『行人續稿に就て』とが、今度『別冊』から此所に移された。

その他の増加は、すべて新發見の資料である。その中で特に注釋を必要とするものは、『明治天皇奉悼之辭』だらうと思ふ。是は大正元年八月發行の『法學協會雜誌』に掲載されたものである。

當時『法學協會雜誌』の編輯委員は、法學博士山田三良であつた。山田三良の夫人繁子は、作品上の指導を乞ふ爲に、その前から漱石の門に出入してゐた。従つて夫人を通じて山田三良は、漱石と知り合ひになつた。殊に漱石の家と山田三良の家とは、町名は違ふが、目と鼻との間にあつた。それだから山田三良は、恐らく奉悼の辭を、漱石の所に頼みに行つたものに違ひない。漱石はそれを引受けて、頼まれた翌日とかに、山田三良の所にこの原稿を持つて行つた。その時漱石は、自分は響きだけがあつて意味のない、従つて西洋の言葉には翻譯の出來ない文字を一つも使はなかつた。さうして率直に誠實に、奉悼の意を表現したのだと、言つたのださうである。諸新聞のかういふ機會に用ひる言葉使ひを、「極度に仰山過ぎて見ともなく又讀みづらく」感じてゐた漱石が、簡素に眞實に奉悼の誠を致さうとした點に、いかにも漱石の漱石らしさが躍如としてゐるといふべきであるが、是は當時奉悼文中の名文として喧傳され、一體あれは誰が書いたのだと、人人の間に頻に問題にされたさうである。漱石が明治天皇を欽慕しまつてゐた事は、『心』の中の先生の言葉からでも想像する事が出來る。明治とともに生れ明治とともに育つて來た漱石は、その明治を代表しその明治を象徴してゐるやうな明治天皇の崩御を、丁度『心』の先生のや

らに、衷心から悼みまつたものに相違ない。それでなければ漱石は、いくら山田三良の請だからと言つて、自分に無關係な『法學協會雜誌』に、その編輯委員を代表して奉悼文を書くといふやうな空しい事は、決してしなかつた筈である。事實また漱石は、明治四十五年七月二十五日橋口貢宛の手紙の中で、「聖上御重患にて上下心を傷め居候今朝の様子にては又々心元なきやに被察洵に御氣の毒に存候」と書いてゐる。大正元年八月八日森圓月宛の手紙の中では、「明治のなくなつたのは御同様何だか心細く候」と書いてゐる。

元來漱石は藝術家であるとともに思想家であつた。是は言ふまでもない事である。然しこの事は往往にして、人人から見落される。藝術家としての——精確に言へば、小説家としての漱石が、多くの場合前景に引き出されて、思想家としての漱石が、兎角後景に押しやられるからである。勿論是は、一面から言へば、漱石の藝術の勝利を物語るものであり、漱石が、思想家としてではなく、藝術家として生きなければならなかつた必然を物語るものであつたには違ひない。然し事實は、思想家としての漱石を、その全範圍に於いて確と把握してゐるのでない限り、藝術家としての漱石の、眞正の高さもしくは深さは、容易に把握され得ないと言つて可いのである。漱石の藝術は、漱石の生活の中から咲き出た、華であつた。然も漱石の思想は、同じく漱石の生活を地

盤として成長し、漱石の生活を整理し指導し規定しつつ、漱石の人格を形成する。漱石の藝術が漱石の生活の中から、恰もこの華として咲き出でなければならなかつたのは、漱石の人格が——従つて漱石の思想が、それを要求したからである。一人の藝術家が、人生に於いて、自分の人格に觸れて來たものを、何等かの意味で感覺的なものを通して表現したものが藝術である以上、その藝術家の思想が、その藝術家が人生に於いて、何を、如何に味ふかを決定するものである事は、言ふまでもない。然も思想家とは、その思想に、抽象と論理とによつて秩序を與へ、それを表現し、もしくはそれを根據として、社會百般の現象の、善惡、美醜、正邪、曲直に關する判斷を、端的に表現する者である。その思想家としての漱石を、殆んど全面的に示すものが、此所に一括された「評論」であつた。

勿論漱石は、例へばドイツの哲學者の多くのやうに、自分の思想を抽象と論理との枠にかけて引き伸ばし、それを、全世界を包攝するに足るやうな、大きな體系に織り上げ、仕立て上げる事に、少しも興味を持つてゐなかつた。「僕のはいつでも自分の心理現象の解剖であります。僕にはそれが一番力強い説明です。若しそこに不完全なものがあればそれは心理現象そのものの複雑から來るので方法のわるい點からくるとは考へられません。」（大正三年一月十三日畔柳芥舟宛の書簡）と言つてゐるやうに、漱石は抽象と論理とによつて自分の思想に秩序と體裁とを與へたと

は言つても、その思想は決して、自分が経験する事の出来ない世界にまで、踏み込んで行く事がなかつた。漱石の思想の中では、「神」とか「無限」とか、「死後の生」とか「地球の意識」とかいふやうな、空想する事は出来ても、竟に経験する事が出来ないやうな世界は、重要な役割を演じる事がないのである。漱石にとつては、自分の心理現象が、言はば自分の全世界であつた。漱石には、解剖しても解剖しても、其所には尙解剖しきれないものが、複雑で細緻で不可思議で神祕で、到底手におへないと思はれるやうなものが、あとからあとからと、續續出て來るのである。漱石には、その究明と検討と整理と指導とが、全生涯を費しても、なほ片づけ切れないほどの、大事業であつた。従つて漱石には、その大事業を疎かにして、「神」とか「無限」とか、「死後の生」とか「地球の意識」とか、さういふ、自分とは直接に關係のない、餘所餘所しいものに、構つてゐる暇がなかつたのである。勿論それだけに漱石の思想は、經驗的であり、實證的であり、もしくは實踐的であり、多くの哲學の「幽玄」であるのに比べて、遙に「平め」であると言はれ得るのかも知れない。然しそれだけに又漱石の思想は、漱石の生活もしくは人格と、寸分の隙間なしに抱き合つてゐる思想なのである。漱石から漱石の思想を奪ふといふ事は、漱石の生活を、漱石の人格を奪ふといふ事に外ならなかつた。漱石は自分の思想を護り通す爲には、自分の生命を賭して、相手と戦ふ事も、敢て辭しなかつた。——例は卑近に失するかも知れないが、例へば

博士問題である。漱石の博士問題に關しては、當時さまざまに批評されてゐたが、然し漱石の思想から言へば、漱石が博士を辭退するのは、當然すぎるほど當然の事であつた。その事は、此所に收められた『博士問題とマードック先生と余』や『博士問題の成行』などに就いて見ても、明白である。其所で漱石は「余の博士を辭退したのは徹頭徹尾主義の問題である。」と言つてゐる。當時の當局が、當局の體面を傷つけない範圍で、結局漱石の主義を貫徹させるやうな取計らひをしたから、あれで納まつたが、然し漱石の意志が、その後少しでも枉げられるやうな事があつたら、漱石は恐らくそれに對して、猛然と對抗したに違ひない。その事は、大正三年十一月十二日菅虎雄宛の書簡及び同年同月九日竝に同月十二日岡田正之宛の書簡などによつても、十分想像され得る所である。

勿論漱石のこの主義は、單に博士問題に限つて、發揮されたものではなかつた。明治四十二年五月、即ち博士問題が持ち上がる凡そ二年前、漱石は、雑誌『太陽』が募集した名家投票に、文藝家の第一位に當選した時、博文館からくれる事になつてゐた、金盃を辭退した。さうしてその『太陽』に、自分が何故に是を辭退するか理由を發表した。また博士問題の持ち上がった明治四十四年には、五月に『文藝委員は何をするか』を書き、七月には『學者と名譽』を書いた。すべて是らのものは、特定の専門で、特定の人に、特定の榮譽を與へる爲に、その人だけが特に偉く

なつて、外には偉い人が一人もゐないやうな誤解を世間に流布し勝ちな、不公平な、私を伴ひ易い組織・制度に關する、漱石の不滿を述べたものである。——漱石は、自分本位の生活といふ事を、個人の自由と獨立といふ事を強調する。然し人が自分本位に生活し、個人の自由と獨立とを享有するといふ事は、漱石にとつて、その人が、他人の自分本位の生活を侵害し、他人の個人の自由と獨立とを犠牲にするといふ事を意味しない。反對にそれは、人人がその所にゐて、それぞれの義務を履行し限界を守りつつ、自分本位に生活し、自分の自由と獨立とを享有するといふ事である。名家投票や、博士授受や、文藝委員の仕事や、學士院賞の授受は、假令その間に若干の相違はあるとしても、必ず外の人の自由と獨立とを何等かの點で犠牲にする事によつて、特定の人に榮譽が與へられるといふ意味で、共通の弊害を持つてゐる。社會に於いて、少しでもさういふ弊害を取り除き、各人平等に、公平に、個人の自由と獨立とを保有しつつ、各人自分本位に生活し得るといふ事が、漱石の念願だつたのである。

漱石の自分本位の生活、並びに漱石の個人の自由と獨立との意味は、漱石の明石に於ける講演『道樂と職業』の中でも説かれ、また漱石の『文學論』の自序でも觸れられ、その他いろんな所でいろいろに述べられてゐるが、然しそれは漱石の學習院に於ける講演、『私の個人主義』を精讀するに如くはないと思はれる。此所で漱石は自分が、どうして自分のいふ個人主義者になつた

か、また自分の個人主義とは一體どういふものであるかを、委曲を悉して説明する。——

「僕のはいつでも自分の心理現象の解剖であります」と言つてゐるやうに、漱石はいつでも、自己の問題から出發する。従つて漱石は此所でも先づ、自分が英文學を専攻する者でありながら、どうしても英文學の妙所に味到する事が出來ず、不安と憂鬱との間に、十年近くうじうじしてゐなければならなかつた事を告白する。自分が好いと思ふ所を、英國の學者は好いと思はない。英國の學者が傑作だと稱するものを、自分は傑作だと信じる事が出來ない。然も常識から言へば、鑑賞の權威は向うにあつて、此方にはない筈である。漱石は他人の説を頼りに、その好いとする所を自分も好いと思はうと努力して見るが、いくら努力して見ても、その氣になる事が出來ない。納得する事が出來ない。この矛盾が、他人と自分との間のこの矛盾が、どう解決のしやうもない點に、漱石は、いつまでも不安と憂鬱との間に、その日その日を不愉快に過して行かなければならなかつたのである。——この事は、深切に自己の内面を反省し、子細にそれを點檢し得る人である限り、換言すれば、無知と無反省と輕佻とをもつて、何にでもすぐ附和雷同する人でない限り、大きく言へば外國の文化と日本の文化との相違の問題に於いて、小さく言へば他人の考へ方と自分の考へ方との相違の問題に於いて、誰でも一度は必ず出會ふ、さうして根本的に考へて見なければならぬ、大問題である。是は、單に一文藝の評價のみに關係する問題ではない。一人

の人間が、その生活に於いて、全生活に對して、どういふ態度を把持すべきであるかの、人間一生を貫く大問題である。漱石はロンドンに留學して、この大問題を解決しなければならぬ、ぎりぎりの所に押し詰められた。

さうして漱石に最後に出て來た結論は、自分は竟に自分である、といふ事であつた。自分が自分で納得の出來ない事は、いくら人から口を酸くして説かれた所で、それは決して自分のものになる事がない。冷暖は自ら嘗めて知るより道がない。他人の舌をまつてそれを知らうとする前に、自分は自分の舌で嘗めてそれを知るべきである。——其所に初めて漱石の、自分本位の世界の樹立が始まつた。さうして漱石は、文藝に於いて、何故に自分と他人との評價が是ほど違ひ得るか、それは民族・時代・流行・年齢・個人の相違から來るには違ひないが、その相違は元來どういふ所にあるか、然もさういふ相違を超えて、更に根本的な所で文藝が、共通して人を動かす所のものを持つてゐるとすれば、それは一體何であるかを、根本的に、客觀的に、科學的に闡明しようとして努力し出した。是が漱石の『文學論』の、成立過程である。不幸にしてその『文學論』は、その後漱石の歸朝以來の俗事と漱石に沸きたぎつて來た創作欲との爲に、言はば足代を組んだままの形で残される事になつてしまつたが、然し漱石がその時樹立した自分本位の世界は、是が一文藝の評價に關する問題ではないだけに、爾後の漱石の一生を支配して渝はらなかつた。さうして

是が漱石の個人主義の根幹を形成するのである。

人が一旦自分の中に、自分本位の世界を樹立する以上、その人が、假令他人から笑はれても何でも、自分の感じる事、考へる事、信じる事を、正直に他人の前に披瀝し得るだけの、勇氣を持つ事を必要とする事は、言ふまでもない。といふ事は同時にその人が、自己にツルーであり、又ツルーであり得る爲に十分自己に通じてゐる必要があるといふ事を意味する。それは、自分で自分を正しく認識する事の必要である。然も人は、自分で自分を正しく認識する以上、その人は必ず謙遜となり、従つて精進を促がされ、一人前の「人間」として恥づかしからぬだけの、正しい判断と高い見識との獲得へと押し出される。従つて人が、眞正に自分本位であり得る爲には——例へば、内に省みれば必ず空腹を感じてゐる癖に、他人から甘やかされ、自ら自らを偽つて、自分本位らしく振舞つてゐるのは、馬鹿殿様の自分本位である、眞正の自分本位ではない——自分本位であり得るに足るだけの、重い義務を背負はされる。それは、自分に對する義務と他人に對する義務とである。自分に對する義務が、不斷に自己に對してツルーである事と、ツルーであり得る爲に不斷に内省を怠らない事と、同時に正しい判断と高い見識との獲得に、不斷に精進する事である事は、言ふまでもない。他人に對する義務とは、他人の立場に對する十分な思ひ遣りを持つ事である。自分が自分本位である事を欲するが如くに、他人も又自分本位である事を欲する

に違ひない。その意味で他人の自分本位を尊重し、如何なる場合にも、それを傷つけまいとする事である。自分が自分で自分の廻りに境界線を引いて、その中で自分の自由と獨立とを確保しようとする以上、その境界線を踏み越えて、他人の領域を侵す事は、眞正の自分本位の生活に於いては、赦すべからざる越權に外ならないからである。

この事は、然し、言ひ易くして行ひ難い事であつた。殊に人が、他人と自分とを比較して、自分の方が判断に於いてより正しく、見識に於いてより高い事を信じる場合、自分の意見を相手に強ひる事なしに、相手が自分に自然に感化される時期を待たうと覺悟するなどといふ事は、「人間」としての十分な鍛錬を豫想しない限り、普通の人には、到底不可能の事であつた。自分で自分の自分本位の世界を樹立した漱石も亦、痛切にこの困難を嘗める。漱石は『鑑賞の統一と獨立』の中で、自分が嘗て自分本位の世界を樹立した事を述べた上で、「各自の舌は他の奪ひがたき獨立した感覺を各自に鳴らす自由を有つてゐるに相違ない。けれども各自は遂に各自勝手に終るべきものであらうか。己れの文藝が己れだけの文藝で遂に天下のものとなり得ぬであらうか。それでは情ない、心細い。散り／＼ばら／＼である。何とかして各自の舌の底に一味の連絡をつけたい。さうして少しでも統一の感を得て落ち付きたい。……余は此暗示を今確的に客觀的に指摘する程頭の燒點が整はないのを憾みとする。さうして此矛盾を理路を辿つて調和する力のないのを残念

に思ふ。けれども一方に於て個人の趣味の獨立を説く余は、近來一方に於てどうしても此統一感を驅逐する事が出来なくなつたのである。」と言つた。是は漱石の自分本位の上に與へられた、一つの大きな試練であつた。自分本位の世界を樹立した漱石は、他人の立場に對する思ひ遣りの爲に、他人の自分本位を尊重し、他人の自由と獨立とを尊重する。然しその爲め漱石は、自分で苦しまなければならぬのである。自分の方がより正しく、自分の方がより高いと、自分に信じられるにも拘らず、自分が相手に強ひて、相手をして自分の信じる如くに信じしめようとする事は、自分を人間以上の存在であると思像するのでない限り、他人の自分本位に對する、侵害である。他人の自分本位を侵害して省みないならば、自分にも自分の自分本位を樹立する事は許されない筈でなければならぬ。——此所に漱石の苦しみの根本があつた。

『鑑賞の統一と獨立』は、明治四十三年七月二十一日に發表されたものである。同じ七月三十一日と八月一日との『好悪と優劣』に於いても、漱石はこの問題について考へ續ける。然も大正三年の『私の個人主義』で、漱石がこの事に就いて言つたことは、この主義が「黨派心がなくつて理非がある主義」だから、「我は我の行くべき道を勝手に行く丈で、さうして是と同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばら／＼にならなければならぬ、従つて「其裏面には人に知られない淋しさも潜んでゐる」のだといふ事であつた。深切な

反省と高邁な見識とを持つてゐた漱石は、此所で「道理」に支配されて生きる事の少ない人間の世界に、人人が「道理」によつて統一される事を希望しつつ、竟にこの「淋しさ」に堪へ通して、艱難極まりなき自分の「個人主義」の道のあるき通さうとする覺悟を、若い人人の前に宣言するのである。

自分の生活に自分本位の世界を樹立し、個人の自由と獨立とを尊重する漱石が、文藝の世界に於いて、あらゆる個性を尊重し、その個性にとつてツル―なものをツル―に表現した作品である限り、いかなる種類の作品であつても、それに敬意を持つ事を忘れなかつたといふ事は、當然の事である。漱石が作品を批評する標準は、にせ物か本物か、内から出たものか外からの借り物かではあつても、(例へば『艇長の遺書と中佐の詩』など)ナチュラリズムかロマンティズムか、シムボリズムかリアリズムかにあるのではなかつた。従つてそれが、一つの型によつてあらゆる作品を評價し、好悪はともかく、それによつて優劣の差別をつけようとする、固陋偏狭な批評家の態度を擯斥する意見となつて現はれるのは、是亦極めて當然の事であつた。漱石は既に明治三十八年五月の『新潮』に於ける『批評家の立場』と題する談話に於いて、齋藤信策が坪内逍遙の『新曲浦島』を批評した態度が、一つの型によつて、それとは違つた型のものを評價しようとする弊に墮してゐる事を、指摘したが、明治四十一年一月一日の『作物の批評』に於いても、作物批

評の標準は、作物の性質によつて、それぞれ違はなければならぬ事を論じてゐる。同じ年の一月二十日の『寫生文』は、その『作物の批評』の理論を適用して、當時『ホトトギス』派の人人によつて唱道されてゐた寫生文の本質、もしくは寫生文の見方を説いたものである。明治四十一年十二月、高濱虚子の『鷄頭』の爲に書かれた序文も亦、その『作物の批評』の理論の適用であつた。當時の文壇に於いて頻に問題にされたのみならず、竟にはそれが漱石の作品の特徴である。とまで刻印を打たれた「低徊趣味」といふ名前は、此所で虚子の寫生文の特徴を道破する爲に、イブセンなどの作品に現はれた「推移趣味」に對立するものとして、漱石によつて初めて命名された名前である。無論漱石は、是を、自分の作品の山の上に押し立てる、旗印としようなどは、夢にも思つてゐなかつた。漱石が自分の中に「低徊趣味」を持つてゐた事は争はれない。又それだからこそあれだけ適切な解剖が可能であつたには違ひないが、然しその事とそれを自分の旗印としようとするといふ事とは、全然關係のない問題である。

明治四十三年七月二十三日の『イズムの功過』も亦、この部類に入れて考へて可いであらう。多様で、複雑で、動いて已まない人生を、一つのイズムで、然も西洋から借り入れたイズムで統一しようとする事の、無理と不自然とが、此所では論じられる。明治四十四年八月の堺に於ける講演、『中味と形式』に於いて取り扱はれてゐる問題も亦、詮じつめれば、形式は中味の爲に存在

するが、中味は形式の爲に存在しない、従つて、形式に拘泥して中味をその形式で無理に押へつけようとする者は、變化してやまない流動する人生を、狭い、動かない、凝滞したものにしよととする者に過ぎないといふ事に歸着する。明治四十年四月、美術學校に於ける講演『文藝の哲學的基礎』も、この立場から見れば、文藝の題材とすべきものは無限であり多様である、そのうちから眞一つだけを取り出して來て、それが文藝であるといふのは勝手であるとしても、それ以外に文藝はないといふのみならず、その眞を重んじるの餘り、それと同等の權利を持つてゐる管の善・美・壯・その他の理想を蹂躪して憚らないといふに至つては、竟に許し難いといふ主意を取り扱つたものである。

明治三十九年・四十年・四十一年へかけて、日本の文壇では、自然主義の運動が盛んであつた。勿論この自然主義の提唱には、時代の趨勢に促がされた、歴史的な必然性もあつたには違ひない。然しそれと同時に此所には、無知と無反省とによる、ジャーナリスティックな文壇政策が働いてゐた事も争はれない。人人は特殊な新聞・雑誌をその宣傳機關として、盛んに黨同異伐に耽り、必要以上に他を貶し、必要以上に弱小者を脅かした。例へば泉鏡花などは、何所へ行つても原稿が買つてもらへない。買ふといふ約束のあつた所でも、鏡花の原稿を買ふやうなら、俺達は一切お前の所には原稿を書いてやらないぞと、編輯者が恐喝された爲に、その約束を破棄してしまひ

さへしたといふ。その爲め文壇は狹隘となり、調子が低くなり、理非が混亂せ、曲直が顛倒し、上下を擧つて歸趨する所を知らない、無政府状態に陥つた。勿論この間に立つて、漱石は悠悠と、自分のあるべき道を行つた。然し漱石にとつて、理論上自分も亦其所に所屬してゐる管の文壇が、それほど亂脈になり、それほど野蠻になつてゐるといふ事は、到底黙止してゐるに忍びない事であつた。従つて漱石が、自分本位の立場から、個人の自由と獨立とを尊重するといふ立場から、文壇が灰色の二色に塗り潰される事を欲しなかつたとともに、横暴を極め放埒を極める自然派の人人の無知と無反省とに、はつきりしたアンティテーゼを置いて、自然主義のみが文藝ではないといふ事、もしくは自然主義とは元來如何なるものであるかといふ事、特に自然主義の「自然」とはいかに解釋すべき言葉であるかといふ事を、根本的に解決しようとしたといふ事は、當然の事であつたと言つて可い。『文藝の哲學的基礎』もその一つである。『作家の態度』もその一つである。明治四十四年六月十八日長野の教育會で、多少違つた形で講演され、次いで六月二十八日の東京帝國大學美學會で講演され、更に大阪の公會堂で講演された『文藝と道徳』もその一つである。『作物の批評』も、『寫生文』も、『鶏頭』の序も、明治四十一年十一月七日の『田山花袋君に答ふ』も、明治四十三年二月一日の『客觀描寫と印象描寫』も、同じ年の七月十九日の『文藝とヒロイツク』も、『イズムの功過』も、亦その餘響であつたといふ事が出来る。

然し『文藝の哲學的基礎』や『創作家の態度』や『文藝と道德』を見ても分かるやうに、漱石が試みた、自然主義と自分自身との對決は、丁度『文學論』の成立過程の場合のやうに、十分眞面目で、且つ十分根本的であつた。勿論漱石にとつて、日本の文壇で問題となつた自然主義——換言すれば、明治文學史上に於ける自然主義は、言はば齒するに足りないものであつたに違ひなかつた。然し、その自然主義の粉本となつた、十九世紀後半のヨーロッパの文壇を風靡した自然主義は、藝術家としての漱石にとつても、また思想家としての漱石にとつても、それを自分自身の内部に體驗しつつ、その特質を探り、自分の中にあるものとなし、もしくは自分の中に採り入れて然るべきものと然るべからざるものとを、はつきり辨別する必要がある主義であつた事は、言ふまでもない事であつた。漱石は、文壇の流行とは離れて、自分自身獨立に、その考察の中に深入りする。さうして漱石は、『文藝の哲學的基礎』に於けるよりも『創作家の態度』に於いて、また『創作家の態度』に於けるよりも『文藝と道德』に於いて、次第に深く、自然主義の本質に穿貫して行くのである。

例へば漱石は『文藝の哲學的基礎』に於いては、モーパッサンの頸飾の話のやうなものを、眞が善を侵す場合の一例として、その存在理由を許容しない。然し『創作家の態度』に於いては、ゴロンクルの『ラ・フォースタン』の結末に寫し出された眞を、それが普通の意味から言へば十

分不人情な事であつたにも拘はらず、新しい眞を描き出したものとして、許容する。然も漱石は『文藝と道德』に於いて、ロマンティックな道德とナチュラリスティックな道德と——文藝上の流派を思想的な人生觀上の問題に移して、ある意味ではロマンティックな道德よりもナチュラリスティックな道德の方が、進歩した道德であるといふ事を、説いてゐるのである。同時に文藝に於いても、ロマンティシズムの作品とナチュラリスムの作品との相違を、ロマンティシズムの作品は「人の氣を引立てるやうな感激性の分子に富んでゐるには違ないが、どうも現世現在を飛び離れてゐるの憾みを免かれない。妄りに理想界の出來事を點綴したやうな傾があるかも知れない。よし其理想が實現出來るにしても之を未來に待たなければならぬ譯であるから、書いてある事自身は道義心の飽滿悅樂を買ふに十分であるとするも、其の實己には切實の感を與へ悪いものである。之れに反して自然主義の文藝には、如何に倫理上の弱點が書いてあつても、其弱點は即ち作者讀者共通の弱點である場合が多いので、必竟するに自分を離れたものでないといふ意味から、汚い事でも何でも切實に感ずるのは吾人の親しく經驗する所であります。……元來自分と同じやうな弱點が作物の中に書いてあつて、己と同じやうな人物が其所に現はれて居るとすれば、其弱點を有する人間に對する同情の念は自然起るべき筈であります。又自分も何時斯う云ふ過失を犯さぬとも限らぬと云ふ寂寞の感も同時に之に伴ふでせう。己惚の面を剝ぎ取つて眞直な腰を低く

するのは寧ろさう云ふ文學の影響と言はなければなりません。若し自然派の作物でありながら斯ういふ健全な目的を達することが出来なければ、夫こそ作物自身が悪いのであると云はなければならぬ。」と言つてゐるのである。

是は少くとも、當時の文壇で提唱された、自然主義ではなかつた。同時に是は亦、フローベールやモーパッサンやゾラによつて唱道された、自然主義でもなかつた。是は、さういふ自然主義と共通するものをも持つてゐるが、然し是は、寧ろさういふ自然主義の中から、自分の榮養になるものを十分吸ひ取つて出来た、さうして自然といふ言葉に獨特の意味を盛つた、新しい自然主義である。この自然主義の背後には、熾烈な道義心が燃えてゐる。高遠な理想が輝いてゐる。高慢で、輕薄で、遜る事を知らない人間に、遜る事を教へる意味での、現實の暴露が豫想されてゐる。この自然主義は單に人間を畜生の域に引き下げる爲にのみ、「己惚の面を剝ぎ取」るのではない。反對に、人間を神的なものに引き上げる爲に、「己惚の面を剝ぎ取」るのである。——さうしてこの自然主義こそは、漱石が『彼岸過迄』以後、絶えず遵奉して渝はらなかつた自然主義であつたのに外ならなかつた。然しこの自然主義こそは、既に明治四十一年の『坑夫』に於いて、その萌芽を示してゐる所のものである。ただに『坑夫』のみではない。淡白と正直とを鼓吹し、「己惚の面を剝ぎ取つて眞直な腰を低く」しようとする試みは、既に『猫』に於いて、その第一回の初め

から試みられてゐる事なのである。

自然主義の自然は元來、天地山川の自然から來る。天地山川の自然が、人間に對して公平無私である如くに、人は人間に對して、公平無私でありたいと念願する。それは他人に對する場合のみではない。自分自身單獨の行住坐臥に於いても、自然が自然である如くに、自然であり、私から解放されたいといふのが、漱石の自然主義である。『三四郎』の中の廣田先生は、「人格上の言葉に翻譯する事の出来ない輩には、自然が毫も人格上の感化を與へてゐない」と言つてゐる。人間が自然を師とするとは、要するに、自然を人格に翻譯して受け取り、それを自分の人格の上に深切に作用させるといふ事である。漱石は嘗て自分の弟子に「吾師自然」といふ額を書いて與へた事があつた。然も自然をわが師とするといふ事は、それを高い、廣い、深い、もしくは正直で、淡白で、陰日向がなくて、穩かで、靜かで、人間に及び難い、人間以上の人格として受け取るといふ事である。従つて漱石にとつて、自然主義の自然とは、例へば性慾生活を取り扱ふのも、人間の自然を描くのであるといふ意味での自然ではなくて、性慾生活を營む爲に人間が私だらけなものになるとすれば、その私をはつきり認識して、出來得る限りその私を乗り超え、それと一つのものになりたいと庶幾せしめる意味での、自然であつた。この意味での自然が、漱石に既に早くから問題になつてゐた事は、漱石が二十三年に書いた、『木屑録』が證明する。漱石

が二十七の年に書いた『英國詩人の天地山川に對する觀念』も亦、十八世紀の末から十九世紀の初めにかけてイギリスに現はれた自然主義——自然を對象として、それに對する自分の態度を、さまざまに歌ひ上げた、自然主義——の詩人達の、自然に對する態度の、獨特な検討を發表したものであつた。

勿論自然に對するかういふ考へ方、特に自然を師として、私を去る修業をしようとするやうな考へ方は、純粹に東洋風の考へ方——禪と茶と俳諧との傳統を多分に血脈の中に漲らしてゐる、日本風の考へ方であると言つていいであらう。漱石といへども、その點で自分が純粹な日本人であつたと言はれる事を、恐らく決して否定しなかつたに違ひない。事實また漱石が、自分は日本人であるとともに夏目漱石であるといふ事の、はつきりした認識の上に立つてゐたればこそ、『文學論』のやうな著述を、十年計畫の下に、思ひ立つたのだとも、言へるのである。然し自分は日本人であるといふ事、さうして自分は夏目漱石であるといふ事の、はつきりした認識は、とかくさうであり勝ちのやうに、漱石を、「鎖國攘夷」の思想に導かないで、言ひ得べくんば「開國利夷」の思想に導いた。西洋の文化の尊敬すべき點と擯斥すべき點と、自分の榮養に資すべきものと資すべからざるものと、並びにそれとの關聯に於いて、日本の文化の尊敬すべき點と擯斥すべき點と、日本人の中の發展せしむべきものと發展せしむべからざるものと、さういふ點をはつき

り把握して、とるべきはとり捨て、伸ばすべきは伸ばし摘むべきは摘んで、日本を世界的な文化勢力にまで高めたいと願つた者が漱石なのである。その意味で漱石は、愛國者であつた。漱石ほど西洋文化の恩恵に浴してゐる者は少ない。然し漱石ほど西洋文化にかぶれる事なかつた者も少ない。漱石の持つてゐるものをあれほどの高さに磨き上げたものは、日本の文化ではなくて、西洋の文化である。然も漱石をあれほどの高さに磨き上げさせたものは、日本人としての、夏目漱石の天稟である。

然し漱石は愛國者なるが故に——西洋の文化の長所と弱點とがはつきり分かり、日本の文化の長所と弱點とがはつきり分かつてゐる愛國者なるが故に——眞面目に日本の爲に憂へた。殊に漱石は、明治維新以來急激に西洋文明を輸入した日本が、西洋のそれと歩調を合せようとして、借著の重荷に喘ぎながら、血眼で駆けずり廻つてゐるのを見て、日本の未來の爲に寒心せざるを得なかつた。それは『猫』の中でも『虞美人草』の中でも『三四郎』の中でも『それから』の中でも、その他方方で觸れられてゐるが、特にそれだけを取り出して問題にしたものは、明治四十四年八月十五日の、和歌山に於ける講演『現代日本の開化』である。

其所でも漱石は、日本の將來に關して、極めて悲觀的な結論に達した。漱石は、現代日本人のやつてゐる事は、内發的でない。外發的である。日本人の現状からいふと、日本人の文化は「機

械的に變化を餘儀なくされる爲にたゞ上皮を滑つて行き、又滑るまいと思つて踏張る爲に神経衰弱になる」と言つた。然も自分はそれに對する對策で、是ぞといふ名案を持ち合せてゐないと言つた。「只出来るだけ神経衰弱に罹らない程度に於て、内發的に變化して行くが好からうといふやうな體裁の好いことを言ふより外に仕方がない。」と言つた。——然しこの「内發的に變化して行く」といふ言葉は、漱石の懷抱する思想から見ても、又漱石自身の、現在西洋文化の恩惠を最も多く蒙つて育つて來た二人としての、體驗から考へても、可也重大な示唆であつたやうに思はれる。それは第一に日本人が、漱石の意味での自分本位の立場に、確と自分の足場を据ゑて、自分自身の内面の要求を反省しつつ、舶來の刺激を批評して受けとり、自分自身の生命を、自然に大きく育てて行く必要がある事を、指示してゐるからである。その點でこの對策は、前日明石で講演された『道樂と職業』とに關聯する。又その翌翌日の堺での講演『中味と形式』とも關聯する。又後年の『私の個人主義』とも關聯する。漱石が文壇に於ける自然主義の提唱にアンティテーゼを置いたのも、一つは、丸呑みの西洋かぶれに現はれた、さうして足元を踏み固める事を忘れてお祭騒ぎに目の眩んだ、日本人の無反省と輕薄とを、日本の未來の爲に憎んだからである。更に、多少の誇張を敢てして言へば、この對策は、漱石が、自分の作品全部の形に於いて、日本人の前に提供してゐるとも言ふ事が出来るのである。

漱石は『現代日本の開化』以後、日本文化の現在もしくは將來といふやうな、一般的問題を、暫くの間、取り扱はなかつた。是はさういふ問題に興味がなくなつたからといふよりも、一つには漱石にとつて、もつと焦眉の問題が出て來て、その爲めさういふ事を考へて見る、餘裕がなかつたからであると思はれる。既に漱石は大阪の公會堂で講演をしたすぐあとで、胃潰瘍再發の爲に倒れ、其所で入院しなければならなかつたのみならず、屢繰り返したやうに、その後は殆んど毎年のやうに、この病氣の爲に、一月か二月かは、病床に横たはつてゐなければならなかつた。死は常に漱石の目の前にあつた。従つて漱石は何よりも先づ、自分が死ぬといふ事を常に念頭に置き、死と自分との對決に、全力を擧げて取りかからなければならなかつた。その間には漱石は、自分の義務としての、年一回百回内外の、小説を書かなければならなかつた。その上漱石は、明治四十五年以來、病後の衰弱した身體に、丁度適切な「創作」活動として、ぼつりぼつりと畫をかいたり書をかいたりし始めた。その事は、漱石を次第に牽きつけて行つた。死の問題によつてもしくは私の問題によつて、絶えず陰鬱なまた重鬱な世界に閉ぢ籠められなければならなかつた。漱石は、畫をかき書を書く事によつて、纔にその不快から救はれた。——かうして漱石の前には、日本の文化の現在と將來といふやうな問題を取り上げる、機會と餘裕とは、當分現はれる事がなかつたのである。

然し大正五年になつて、それは、竟に漱石の前に現はれたやうに見えた。大正三年七月にヨーロッパ大戦の火蓋が切られ、大正四年一年を經過しても、尙その結果がどうなるのか、まるで見通しもつかないやうな状態になつたからである。是は日本の問題ではなく、世界の問題であり、ある意味では、世界を根本から變化させるやうな大問題であつた。さうして漱石は、それを中心として起伏するさまざまの問題に、熱心な考察の眼を向けなければならなかつたからである。勿論漱石は、根本的な意味では、「元來事の起りが宗教にも道義にも乃至一般人類に共通な深い根柢を有した思想なり感情なり欲求なりに動かされたものでない以上、何方が勝つた所で、善が榮えるといふ譯でもなし、又何方が負けたにした所で、眞が勢を失ふといふ事にもならず、美が輝を減ずるといふ羽目にも陥る危険はない」と信じてゐた。然し「もう少し低い見地に立つて、もつと手近な所を眺め」て、漱石はこの戦争が、政治上、經濟上、思想上、その他あらゆる方面にあらゆる影響を及ぼすべき事を覺悟してゐた。殊に漱石の問題になつたのは、ドイツの軍國主義である。もしくは、相互に交戦してゐる國國の國家主義である。漱石はこの戦争を、その方面を中心として觀察した。其所へ朝日新聞から漱石に、大正五年の元日から、暫らくの間連續する讀物を要求して來た。その要求に應じて現はれたものが、漱石の『點頭錄』である。

然しその『點頭錄』は、『また正月が來た。』といふ序曲を以つて始まり、『軍國主義』四回、『ト

ライチケ』四回、合計九回、それも元日に一回出て、十日・十二日・十三日・十四日と四回續き、それから十七日、十九日・二十日・二十一日と又四回續いただけで、中絶されてしまつた。是は「リヨマチで腕が痛みますつゞけて机に廻る事が出来ません」(大正四年十二月二十五日、山本松之助宛の書簡)だの、「左の肩より腕へかけて鈍痛はげしく」(兎に角醫者の手に合はず困り入候現に原稿などをかくのが非常の苦痛と努力に候」(大正五年一月十九日、松山忠二郎宛の書簡)だのと漱石が言つてゐるやうに、漱石は腕が痛んで、思ふやうに原稿を書く事が出来なかつたからである。もつとも是が糖尿病から來る痛みで、リヨマチから來るので、なかつた事は、後になつてから分かつたが、然し漱石はその痛みに堪へかね、且は中村是公の勸誘もあつて、到頭原稿を書く事は一時斷念し、一月二十八日に、湯河原へ轉地しなければならなかつた。其所から歸つて來て、二月十八日に漱石は山本松之助宛に、「私はリヨマチで轉地を致しまして二十日ばかり留守にしました一昨十六日晚歸りました點頭錄をずる／＼べつたりにして濟みません 轉地中に稿をつぐつまりでありました所先方に知つた人があつて一所にのらくらして居たものだからつい御無沙汰を致しました 歸つてからあとをどうしたものだらうかと考へてゐます」と書いた。漱石は何か氣ぬけがしたやうな心持になつてゐたらしいが、然し社の方から書けと言はれれば、書き續ける積りであつたには違ひない。然し山本松之助からは、恐らくもう書かなくても可いと、返事し

て寄越したものであらう。『點頭録』はそれきり掲載されなかつた。さうして我我は、『軍國主義』と『トライチケ』とだけで、それと關聯した、ヨーロッパ大戦を機縁とする、諸種の問題に關する、漱石の意見を、竟に聴く事が出来なくなつたのである。

勿論漱石が『點頭録』で、『軍國主義』と『トライチケ』とに就いて書いたあとで、なほ是に關聯する問題を、果して取り扱はうとしてゐたものであるかどうかは、疑問であつたと言つて可いであらう。然し『日記及斷片』の中の、或は『點頭録』の爲の心覚えではなかつたかと想像される部分を見ると、其所には「○軍國主義論、軍國主義ハ方便、目的ニアラズ故に時勢遅れなり」といふのがあるかと思ふと、その隣には「獨乙の「力」の考と佛蘭西の「力」の考」といふのがある。八行とんで「○トライチケ」といふのがあるかと思ふと、二行とんで「○老人雜話。佛蘭西ノ捕虜物語」といふのがある。その隣には「○アナトールフランスの」といふのがあるかと思ふと、又その隣には「○歐洲戰爭・宗教、社會主義、經濟、人道、皆國家主義に勝つ能はず」といふのがある。是は漱石が『點頭録』の中に、みんな書く氣であつたかどうか不明であり、よし又書いたとしても、それをどう書いたかは問題であるには違ひないが、然し漱石がヨーロッパの大戦に、思想的に興味を持つた事は確實であり、然も『點頭録』を始めたものが『軍國主義』であり『トライチケ』であつた以上、是に續くものが、主として是らのものと關聯した、さうし

てヨーロッパの大戦から得られた、漱石の思想的考察であつたに違ひないと想像する事は、それほど突飛な想像ではなかつた筈である。その想像が私に、『點頭録』が、漱石の當初に考へてゐたやうに、十分書き悉されないうちに、尻切れになつてしまつた事を、切に遺憾に感ぜしめる。暫く振りで見られた思想家としての漱石の「顔」が、見えたかと思ふとすぐひつこんでしまはなければならなかつた事が、遺憾なのである。然も、大正五年といふ年が、漱石をして小説『明暗』を未完成のままに残さしめたのみならず、正月早々に『點頭録』をも未完成のままに残さしめてゐる事が、更に遺憾なのである。

序文の一群に關しては、特に言ふべき事もない。ただ一つ言つて置きたい事は、既に前にも述べたやうに、漱石の自分本位は、他人の自分本位に對する十分な思ひ遣りを條件としてゐるが、その漱石の他人の自分本位に對する十分な思ひ遣りが、此所で、極めて鮮明に現はれてゐるといふ事である。漱石は、自分本位である事を失ふ事なしに、實に丁寧他人の世界の中に遣入り、其所から實に精到に、他人の世界の美しさを攫み出して來てゐる。是は『鷓頭』の序、『煤煙』第一卷の序、『明治維新三大政治家』の序、『土』の序、『唐草表紙』の序などを讀んだ人には、恐らく誰にでもすぐ氣のつく事だらうと思ふ。「卒業論文をよんで居ると頭腦が論文的になつて仕舞には自分も何か英語で論文でも書いて見たくなります。決して猫や狸の事は考へられません。僕

は何でも人の眞似がしたくなる男と見える。泥棒と三日居れば必ず泥棒になります」(明治三十九年五月十九日、高濱虚子宛の書簡)と漱石は言つてゐる。漱石の特徴は、どういふ他人の心持にも、十分になつて見る事が出来るといふ點にある。換言すれば、どういふ他人の心持にも、十分なつて見る事が出来るほど、漱石の中には、いろんな心持があつたといふ點にある。従つて漱石の自分本位は、もしくは漱石の個人主義は、普通所謂自分本位、もしくは普通所謂個人主義とは、全然違つた内容を持つてゐるのである。是は更に改めて、説明する事を要しない。

(一・二・一〇)

「詩歌俳句及初期の文章」

決定版の「詩歌俳句及初期の文章」には、是までのどの全集にもなかつたものが、可也多く附け加へられてゐる。漱石の學生時代の作文の、現在發見されてゐるものの全部、漱石の翻譯の、是まで知られてゐなかつたもの二篇、漱石が第五高等學校教授時代、同校開校記念日に、教員總代として朗讀した祝辭、並に漱石の俳句を季題別にしたものと漱石の印譜となどが、それである。俳句の補遺は百二十句に及んでゐる。勿論季題別と印譜とは、漱石によつて創作されたものではないが、漱石の書畫の偽物が坊間に横行する今日、漱石の印譜が一般に行き互つてゐる事も必要であるに違ひないし、漱石の俳句を簡単に檢索したり、漱石が俳句でどの季節のどの事物を最も好んで詠んでゐるかといふやうな事を、手つ取り早く知らうとする上に、漱石の俳句が季題別にされる事も必要であるに違ひないと、考へられたからである。季題別の仕事は、松根東洋城がその任に當つた。

たものうちの幾つかを、此所に掲載したものに違ひない。漱石はこの年七月第一高等中學校を卒業して大學に這入るのではあるが、然し此所には、第一高等中學校生徒と書かれてゐる。

翻譯のうち『催眠術』は『哲學會雜誌』に、『詩伯テニソン』は、同誌の改題後漱石が編輯員をしてゐた『哲學雜誌』に、掲載されたものである。二つながら署名がなく、従つて嚴密に言へば、是が漱石の筆になつたといふ事の、確證は上がつてゐない。然し『催眠術』の方は藤代禎輔の示唆により、『詩伯テニソン』の方は狩野亨吉の同意により、ともに小宮豊隆によつて漱石のものと推定されて、此所に加へられた。解説つきの『方丈記』英譯は、是まで全集の別冊の中に置かれてゐたものである。是は明治二十四年十二月八日の日附を持つてゐる。是には當時の文科大學教師ジェームス・メイン・ディクソンが朱を入れ、激稱の評語を書いてゐるが、ディクソンは是を基礎として、明治二十五年二月十日の『日本アジア協會』の例會で、"Chomei and Wordsworth: A Literary Parallel"の題下に講演を試み、且つこの『方丈記』英譯に多少の手を入れたいもの朗讀してゐる。さうして是は "A Description of My Hut" と改題されて、ディクソンの名前で、明治二十六年の『日本アジア協會會報』に、講演とともに掲載され、その初めにディクソンは、この翻譯の原稿・解説・並に翻譯の細部の説明に關しては、文科大學英文科學生夏目金之助君の、價值ある助力に俟つ所甚大であつたと書いた。恐らく漱石はディクソンから頼ま

事實を言へば、漱石の學生時代の作文の殆んど全部と、漱石の第五高等學校時代の祝辭とは、既に全集初版編輯の當初に發見されてゐたものである。然し是は、漱石が自發的に創造したものでない上に、さういふものまでも全集に入れるのはどうかといふ意見もあつて、當時は發表されなかつた。然し決定版の全集では、どんな斷簡零墨でも、出來得る限り網羅し悉さうとする、方針が採用された。のみならずこの種の文章でも、後年の漱石との關聯に於いて眺められる場合、發表されて然るべき十分の價值を持つてゐるのである。従つて此所では、是まで發見されてゐる一切のものが、採録された。そのうち『正成論』は、漱石十二歳の時の作である。是は島崎柳塙の所藏にかかり、半紙半截二つ折十四枚綴の廻覽雜誌に書かれてゐるが、當時島崎柳塙が是を主幹してゐたものと見え、其所に掲載されたすべての文章には、柳塙自身の筆で一一圈點が打たれ、批評が書かれ、甲・乙・丙・丁の評價が與へられてゐる。第一高等中學校時代の作文『故人到』は、『故人來』と改題されて、當時小杉樞郎が編輯する『大八洲學會雜誌』の、明治二十三年三月號に掲載されたものである。"Japan and England in the Sixteenth Century" は、明治二十三年七月九日發行の『みゆーぜあむ』から採録された。是は同じやうな題目で、外に正岡子規始め、いろいろな人の文章が列んでゐる所から推測すると、當時第一高等中學校の教師をしてゐたジェームス・マードックが、この雜誌の編輯員に列してゐた關係上、自分の生徒に課題して作らせ

れて、是を翻譯し、是を解説したものに違ひない。

評論のうち『老子の哲學』と『中學改良策』とは、漱石が大學在學中、一つは東洋哲學の論文として、明治二十五年六月十一日に、他は教育學の論文として、明治二十五年十二月に書き上げたものである。漱石の、大學二年と三年との時の事であつた。是よりさき、明治二十五年七月、漱石は藤代禎輔・松本文三郎・立花銑三郎・大島義脩などとともに、選まれて『哲學雜誌』の編輯員となつてゐる。漱石が『哲學雜誌』に、明治二十五年十月に『文壇に於ける平等主義の代表者「ウオルト、ホイットマン」 Walt Whitman の詩について』を書き、明治二十六年三月・四月・五月・六月に『英國詩人の天地山川に對する觀念』を書き、また、『詩伯テニソン』を翻譯したのは、この爲である。

明治二十六年七月に、漱石は大學を卒業した。然し漱石は大學を卒業するとともに、何も書かなくなつた。是は漱石の談話の中に、「卒業したときには、是でも學士かと思ふ様な馬鹿が出来上つた。それでも點數がよかつたので、人は存外信用してくれた。自分も世間へ對しては多少得意であつた。たゞ自分が自分に對すると甚だ氣の毒であつた。」（『處女作追懷談』）とあるやうに、自分自身に對する漱石の、幻滅から來たものででもあつた。そのうち漱石は、松山に赴任した。

是は明治二十八年四月の事である。然し翌明治二十九年四月には、漱石は、既に熊本の第五高等學校にひつばられてゐる。明治三十年二月九日稿の『トリストラム、シャンデー』は、田岡嶺雲・白河鯉洋・笹川臨風などがやつてゐた、『江湖文學』の爲に書かれたものである。臨風によれば、臨風は漱石の『英國詩人の天地山川に對する觀念』を読んで感服し、こんなに旨い文章が書けるのに、どうしてその後一向なんにも書かないのだらうと思つてゐたのだといふが、恐らくかういふ氣持が『江湖文學』の外の同人の間にも動いてゐて、それで田岡嶺雲は、わざわざ熊本まで、漱石の寄書を求めたものだらうと思ふ。

その後漱石は『ホトトギス』に『不言之言』を書き、『英國の文人と新聞雜誌』を書き、『小説「エイルケン」の批評』を書いた。其所には漱石の、英文學に對する造詣の深切と研鑽の不斷と、漱石自身の見識の高邁と犀利とを窺はしめるに十分なものが表現されてゐるにも拘はらず、漱石は一向、自ら進んで、自分の研究の結果を、公けにしようとしなかつた。然も明治三十三年の九月には、漱石は官命によつて、英國留學の途に上るのである。かうして漱石は、愈々文壇もしくは學壇と疎遠になつた。然し事實は漱石は、その間に次第に英文學に深入りし、深入りするとともに、日本人と英國人、もしくは日本と西洋との根本的な相違から來る、見方・感じ方・考へ方の矛盾に苦しみ、それを解決しもしくは調停する方法が発見されない限り、安閑とものを書いてゐ

るやうな氣に、到底なる事が出来なかつたのである。漱石にとつて、自分の専門の事で、自分の研究と名づけて恥ぢないものを發表し得る爲には、まづその問題を片づける必要があつた。漱石は英國に留學して、竟に意を決して、挺身その事に當らうとする。さうして出来上つたものが、漱石の『文學論』である。——この経過の巨細は、『文學論』の漱石の自序に精しい。漱石の『文學論』は、寧ろ他人の爲ではなく、自分自身の爲に著はされたものである。漱石は、『文學論』の著述を思ひ立ち、それに打ち込み、其所に出て來得るあらゆる問題を考へ通す事によつて、初めて自分の研究の結果を、西洋人から獨立して、自由に發表する事が出来るやうになつた。その獨立と自由とが、漱石をして、歸朝後大學に於いて、『英文學形式論』を講ぜしめ、『文學論』を講ぜしめ、『文學評論』を講ぜしめ、シェークスピアを講ぜしめるのである。明治三十七年正月の『帝國文學』に載つた『マクベスの幽霊に就て』は、その漱石が、心の獨立と自由との下に、英國のシェークスピア研究の専門家達を向うに廻して、堂堂と一家の見識を披瀝した、最初の文章であつた。

『木屑録』の序によると、漱石は子供の時分、唐宋の詩文を愛讀し、それに刺激されて文章をつくり、私に文章に自信を持ち、古の作者といへども決して到り難いものではないと考へ、文章

をもつて身を立てる事を志したのださうである。従つて漱石は、何所かへ遊覽登臨に出かける度に、それを文章につくり、想を養ひ文を鍊る事に勤めてゐたが、二三年たつてその時書いたものを讀んで見ると、まづたく讀むに堪へないもの計りである。決して到り難いものではないと考へてゐた古の作者には、その足許にさへもよりつけさうに思はれない。是は古人は、萬卷の書を讀むとともに萬里の遊をなしてゐるからである。然るに自分は、遊覽登臨とは言つても、所詮身父母の郷を出でる事がなく、足都門を越える事がない。大文章を得る爲には、どうしても大旅行すべきである事に氣がついたが、然しそれを果す事もしないうちに、時勢が變り、自分は「蟹行の書を挾んで郷校に上る」やうになつてしまつた。自分には文章などを書いてゐるひまがなく、昔讀んだものも昔書いたものも、みんな高閣に束ねられ、顧みられる事もなくなつたのださうであるが、この「蟹行の書を挾んで郷校に上る」といふのが、漱石が明治十六年、十七の年、二松學舎から轉じて成立學舎に入學した事をもつて始まるのだとすれば、漱石は少くとも十二三の比から、文章をもつて身を立てる意氣込みを、自分自身の中に藏してゐたと見做して可いであらう。然も漱石によれば、漱石は「蟹行の書」を手にするとともに、暫くその方の欲望を押へて、英語の習得に、その全精力を傾倒しようとするのである。然し漱石は、明治二十二年の正月、正岡子規と相知るに及んで、今まで押へられてゐたものが、再び刺激され、それが次第に熱して來

る事を、感じなければならなかつた。子規は當時小説家となる大望を懐き、満身創作欲の塊まりでもあるかのやうに、日日筆を執つて、何かを書いて計り暮してゐたのであるが、偶明治二十一年の夏、二月月あまりを向島で暮して得た感興を、いろんな形式で表現しようとし、明治二十二年五月一日それを完成して、友人の間の廻覧に供した。是が所謂『七艸集』である。『七艸集』は「蘭之卷」・「萩之卷」・「女郎花の卷」・「芒のまき」・「薺のまき」・「葛の卷」・「罹麥の卷」の七卷から成り立ち、其所ではそれぞれ漢文・漢詩・和歌・俳句・論曲・論文・擬古文小説と——當時凡そ考へ得られる、あらゆる文藝形式を用ひて、さまざまの事が物語られた。漱石の『七艸集評』は、漱石のその『七艸集』の讀後感を、『七艸集』の卷末に書き誌したものである。是は、漱石が相當の年輩になつて以後、學校で課せられる作文以外、自發的に、然も他人が是を見るといふ事の豫想の下に書かれた、最初のものではなかつたかと思ふ。

ただ此所で漱石が「薺篇」・「葛篇」・「罹麥篇」——即ち子規の論曲まがひの文章と論文と擬古文小説とだけを取り出して批評しながら、他の漢文・漢詩・和歌・俳句に及ばなかつたのは、どういふ理由から來てゐるのが、よくは分からない。或は漱石は、漢文・漢詩の方面では、私かに子規を興みし易しと感じ、それでこの批評も漢文で書き、更にその終に七言絶句を九首添へたものではないかと想像されなくもないが、然しあながちさうでもないやうである。最後に「刈萱之らうと思ふ。

漱石は、明治二十二年五月二十五日にこの批評をかき、翌日は是を持つて本郷眞砂町常盤會寄宿舎に子規を訪うて、手渡しした。然もその翌日子規に宛てて、「……其砌り妄評を加へ御返呈申上候七草集定めて迂生歸宅後御讀了の事と存じ候右に付き後に胸に手をあて善く／＼勘考仕れば前後の分別もなく無茶苦茶に六ツカ敷漢字を行列したるは流石の某も例のツ／＼しきに似ず少しく赤面の體に御座候何事も不作法者と御堪忍遊ばせと御詫の序でに願上げまするは批評の後付したる二十八字の九絶に御座候是は餘り大人氣なく小兒の手習と一般にて只々紅燈綠酒の文字を書き散らしたる而已に候得ば斯ル者を見事の尊著にくつつけ置かん事七草集の耻辱且つは人目を愧づる小生の心底憐れと覺し給ひ一遍の御回向ならで一刀兩斷に切り棄て、屑籠の淨土に送らせ玉へ生れつきの不具者に候得ば扁鵲の妙術も一人前には治し難きは無論の儀と存じ候得ば生きて人目に曝しますより殺した方が親の慈悲かと存候去り乍ら凡夫の淺ましき萬一貴君の配劑に

る事を、感じなければならなかつた。子規は當時小説家となる大望を懐き、満身創作欲の塊まりでもあるかのやうに、日日筆を執つて、何かを書いて計り暮してゐたのであるが、偶明治二十一年の夏、二月月あまりを向島で暮して得た感興を、いろんな形式で表現しようとし、明治二十二年五月一日それを完成して、友人の間の廻覧に供した。是が所謂『七艸集』である。『七艸集』は「蘭之卷」・「萩之卷」・「女郎花の卷」・「芒のまき」・「薺のまき」・「葛の卷」・「罹麥の卷」の七卷から成り立ち、其所ではそれぞれ漢文・漢詩・和歌・俳句・論曲・論文・擬古文小説と——當時凡そ考へ得られる、あらゆる文藝形式を用ひて、さまざまの事が物語られた。漱石の『七艸集評』は、漱石のその『七艸集』の讀後感を、『七艸集』の卷末に書き誌したものである。是は、漱石が相當の年輩になつて以後、學校で課せられる作文以外、自發的に、然も他人が是を見るといふ事の豫想の下に書かれた、最初のものではなかつたかと思ふ。

ただ此所で漱石が「薺篇」・「葛篇」・「罹麥篇」——即ち子規の論曲まがひの文章と論文と擬古文小説とだけを取り出して批評しながら、他の漢文・漢詩・和歌・俳句に及ばなかつたのは、どういふ理由から來てゐるのが、よくは分からない。或は漱石は、漢文・漢詩の方面では、私かに子規を興みし易しと感じ、それでこの批評も漢文で書き、更にその終に七言絶句を九首添へたものではないかと想像されなくもないが、然しあながちさうでもないやうである。最後に「刈萱之

て生來の癡疾も頓治の見込なきやと夫ばかり心配仕居候焼野(の)きゞす夜の鶴不具な子程(可)愛ゆきは矢張り親の慾目に御座候必ず凡夫と御さげしみなき様願上候」と書いた。純粹で内氣で反省的な漱石が、子規の『七艸集』を讀んで刺激を受け、言はば熱に浮かされてその卷末に書きつけたものを、いかに羞恥と困惑とをもつて思ひ返してゐるか、此所で我我はそれを、眼に見るやうに感じとる事が出来るやうである。然も是は、是が漱石の最初の経験だからといふのみではないのである。この純粹と内氣と反省とを、漱石は、いつまでも失ふ事がなかつた。漱石は大正三年七月七日北島英一に宛てて、「私は今も小説を書いてゐますが自分の書いたものは私生兒のやうな氣がします。自分には可愛いけれども人中へ出すのはいやに候。」と書いてゐる。

今一つこの批評で注意を要する事は、この批評の最後に書かれてゐる「辱知 漱石妄批」である。子規宛の同じ手紙の追白に漱石が、「七草集には流石の某も實名を曝すは恐レビデガスと少しく通がりて當座の間に合せに漱石となんしたり顔に認め侍り後にて考ふれば漱石とは書かで漱石と書きし様に覺へ候此段御含みの上御正し被下度先は其爲め口上左様」と書いてゐるやうに、是が漱石の、漱石といふ雅號を用ひた、最初の文獻であつた。従つて神經質に推定するとすれば、漱石の雅號は、明治二十二年五月二十五日をもつて用ひられ始めたと言つて可いのである。然も漱石と子規とが交を結んだのは、この年の正月であり、子規が血を吐いて、自ら子規と號した

のも、この年の五月十日の夜以來の事であつた。明治二十二年といふ年は、漱石にとつても、また子規にとつても、因縁の深い、忘れる事の出来ない年だつたに違ひない。

漱石といふ雅號が「枕流漱石」といふ熟語から來て、意地つ張りを意味するものである事は、説明するまでもない。同じ年の九月九日に書かれた『木屑録』の表紙には、『漱石頭夫』と署名されてゐる。卷末の『自嘲書木屑録後』の詩の中には、「白眼甘期與世疎。狂愚亦懶買嘉譽。爲護時輩背時勢。欲罵古人讀古書」といふ句がある。明治二十八年五月二十六日に子規に與へた詩の中には、「才子群中只守拙。小人團裏獨持頑」といふ句がある。漱石は、純粹で、内氣で、反省的であつたには違ひないが、然し漱石はそれとともに、意地つ張りであつた。寧ろ漱石は、純粹で、内氣で、反省的なるが故に、意地つ張りであつたと言つた方が可いかも知れない。その意地つ張りである事を、言はば氣を負つて標榜しようとした貌になつてゐるのが、漱石といふ雅號である。漱石は後年、漱石といふのは厭な雅號だと言つてゐたが、後年の漱石には、恐らくその氣を負つた所が、氣に入らなかつたのであらう。然し漱石は、この年つけた雅號を、子規と同じやうに、死ぬまで用ひ續けた。

漱石が、再びその漱石の名を用ひて書いたものは、『木屑録』である。さうして是は、その序に

もあるやうに、明治二十二年八月七日から八月三十日に互つて、漱石が房總の地に遊んだ時の紀行である。是が子規に示され、子規が驚嘆し、君は英語だけしか出来ない人間だと思つてわたのに、こんな立破な漢文が書ける、君のやうな人は、眞に千萬年に一人だと言つて激賞した事は、複製『木屑録』解説の讀者には、既に周知の事實であらうと思ふ。漱石は是を、恐らく子規に示す爲のみに、書いた。然も是を機として漱石は、一層子規との交誼を深め、漱石と子規との、漢詩や俳句の獻酬は一層頻繁となり、子規が俳句に頓悟して、明治の俳句の革新事業に著手するに及んで、漱石はその助言に聽きつつ、當時の俳句の作者として、鬱然たる大家になつてしまふのである。

漱石の俳句は、文獻的には、明治二十二年五月十三日、血を吐いた子規を慰める爲の、手紙の末に書き記した二句をもつて、嚆矢とする。然し是は「歸るふと泣かずか笑へ時鳥」だの「聞かふとて誰も待たぬに時鳥」だのといふやうな、それによつて言はうとした漱石の心持は十分汲む事は出来ても、その言ひ方は、床屋俳諧の域を出る事のない、月並に過ぎなかつた。かういふのが、明治二十三年・二十四年・二十五年と續く。勿論その中には「東風吹くや山一ばいの雲の影」といふやうな、雄大な自然を歌つたものもあれば、「雀來て障子にうごく花の影」だの「柿の葉や

一つ一つに月の影」だの「涼しさや晝寐の貌に青松葉」だのといふやうな、繊細な感受を示すものもないではないが、然しかういふのは、寧ろ偶然に出来たもので、その灸所が漱石に會得されて生れたものではなかつたと見るのが、正しい解釋だらうと思ふ。

もつともこの時分は、子規自身からがまだ灸所を會得して居らず、平氣で月並を作り、當時の舊派の宗匠と同じやうな眼で、芭蕉を敬ひ『七部集』を禮讀してゐた時期であつた。何も知らない漱石が、月並をならべて子規に送り、子規がそれを月並に添削して返してゐる事は、少しも不思議ではない。子規は既に明治二十五年の比に蕪村を發見し、明治二十六年の五月には「實地吟詠」といふ事を人に勸めてゐるやうではあるが、然し子規が、ほんとに芭蕉を捨てて、蕪村に移り、それによつて自分自身を舊套から脱却させようとしたのは、明治二十六年十一月から明治二十七年一月へかけて書かれた、『芭蕉雜談』を機とするのではないかと思ふ。それから次第に子規の、蕪村の高揚が始まつた。それとともに子規の俳句も亦、舊態を改めて、清新なものになつた。思ふに子規にとつて、自分自身を新しくし、従つて日本の俳壇を新しくする爲には、自分自身の中の舊派の血を征服し、自分自身の周圍に横行してゐる舊派の俳句を征服する必要がある、それを征服する爲には、どうしても一度、舊派の眼で汚された、芭蕉を否定し、そんな汚染のくつついてゐない蕪村をかつぎ出し、實感を唱道し、寫生を鼓吹する必要があつたのに違ひない。然も

子規の飛躍は同時に、漱石の飛躍であつた。明治二十七年に来て漱石の俳句は、子規の俳句と同じやうに、見違へるほど新鮮なものになつた。「烏帽子着て渡る禰宜あり春の川」「風に乗つて輕くのし行く燕かな」「菜の花の中に小川のうねりかな」——それはすべて寫生風・繪畫風・蕪村風の俳句である。

漱石は、明治二十四年八月三日子規に宛てて、「小子俳道發心につき草々の御教訓情人の玉章よりも嬉しく熟讀仕候天稟庸愚のそれがし物になるやらならぬやら覺束なき儀には存候得共性來かゝる道は下手の横好とやらに候得ば向後驥尾に附して精々勉強可仕〔候〕間何卒御鞭撻被下度候」と言つてゐる。明治二十八年五月二十六日の手紙にも、「小子近頃俳門に入らんと存候御閑暇の節は御高示を仰ぎ度候」と書いてある。然し事實は漱石は、俳句を作る事に、あまり熱心ではなかつた。作つても一年に、多くてたかだか、三十句くらゐなものであつた。漱石が本氣に俳句を作り出したのは、明治二十八年四月に松山に赴任したあと、滿洲で病を獲て歸つて來た子規が、須磨の療養院から松山に歸省し、八月二十七日の比、漱石の下宿に乗り込んで行つた以後の事である。漱石は後年その時の事を追懐して、「なんでも僕が松山に居た時分、子規は支那から歸つて來て僕のところへ遣つて來た。自分のうちへ行くのかと思つたら、自分のうちへも行かず親族のうちへも行かず、此處に居るのだといふ。僕が承知もしないうちに、當人一人で極めて居る。御承

知の通り僕は上野の裏座敷を借りて居たので、二階と下、合せて四間あつた。……僕は二階に居る、大將は下に居る。其うち松山中の俳句を遣る門下生が集まつて來る。僕が學校から歸つて見ると、毎日のやうに多勢來て居る。僕は本を讀む事もどうすることも出來ん。尤も當時はあまり本を讀む方でもなかつたが、兎に角自分の時間といふものが無いのだから、止むを得ず俳句を作つた。」(談話『正岡子規』)と言つてゐるが、漱石が勉強の邪魔をされて迷惑したといふ事も事實には違ひないが、それとともに漱石が、熱心に俳句を作つた事も亦、事實だつたに違ひない。今まで幾度も熱しかけては流れてしまつた漱石の句作の機縁が、この時になつて初めて熱したのである。

その年の十月十九日子規が東京に立つて行つたあとでも、漱石の俳句に對する熱意は續いた。のみならずそれは、漱石の中で、日日その熱度を高めて行つた。漱石にとつて俳句は、唯一の表現機關となつた。それだけに漱石は俳句の上で、群を抜いて進歩して行つた。子規が『明治二十九年の俳句界』の中で、「漱石は明治二十八年始めて俳句を作る。始めて作る時より既に意匠に於て句法に於て特色を見はせり。其意匠極めて斬新なる者、奇想天外より來りし者多し。……「漱石亦滑稽思想を有す。……「然れども漱石亦一方に偏する者に非ず。滑稽を以て唯一の趣向と爲し、奇警人を驚かすを以て高しとするが如き者と日を同うして語るべきにあらず。其句雄健なる

明治三十三年九月八日、漱石は官命によつて海外留學の途に就いた。明治三十三年の漱石の句數は激減してゐるが、それが海外留學によつて、一層少くなつて行つた事は、蓋し已むを得ない。それでも漱石は、明治三十四年には、ギクトリア女皇の葬儀を見物して、幾つか句を作つたりしてゐる。十一月には、ロンドン在留の日本人の句會にも、二度ばかり出席してゐる。明治三十五年の九月には、子規が死んだ。その報知は、もうすぐ（十二月五日）立つて日本に歸らうとしてゐる漱石の手許へ届いた。十二月一日高濱虛子に宛てて、漱石は「子規追悼の句何かと案じ煩ひ候へども、かく筒袖姿にてビステキのみ食ひ居候者には容易に俳想なるもの出現仕らず、昨夜ストーヴの傍にて左の駄句を得申候。得たると申すよりは寧ろ無理やりに得さしめたる次第に候へば、只申譯の爲め御笑草として御覽に入候。近頃の如く半ば西洋人にて半日本人にては甚だ妙ちきりんなものに候」と言つて、追悼の句五句を送つた。さうして明治三十六年一月二十三日、漱石は日本に歸つて來た。

子規が残した『ホトトギス』の同人は、歸朝した漱石に勸めて、俳句を作らしめた。然し、既に洋行以前から俳句に對する熱意を失ひつつあつた漱石は、勿論俳句に一所懸命になる事が出来なかつた。殊に漱石は當時、明治三十六年七月三日菅虎雄宛の手紙の中に、「發句ナンカ下火極マルマルデ作ル氣ニナラン然シ退宿^原凌ギニ時々ヤル是ハ得意ノ餘ニ出ルノデハナイ一時ノ鬱散ト云

ものは何處迄も雄健に、眞面目なるものは何處迄も眞面目なり。……」などと言つて、激賞してゐる所を見ても、その一般を知る事が出来る。それでも漱石は自分の作つた俳句を、相當の數になると、必ずひとまとめにして、大抵は巻紙に書き上げ、是を子規の所へ送つて、批評を乞うた。『正岡子規へ送りたる句稿』の名の下に、それそれ一括されてゐる俳句は、漱石がその都度子規の所へ郵送した、その句稿である。是は明治三十二年まで續いてゐるが、子規はすべてこれらの句稿に眼を通し、添削し、丸だの二重丸だの點だのを打つて、一一漱石の許へ送り返した。採録された俳句の形は、子規の添削した形に従つてある。その際原形は、本文に左注された。

子規は、漱石のみならず、諸方から送つて來る句稿だの、運座の時の句だの、十句集などの句だの中から、自分が優秀であると認めたものを、一一手許の帳面に書きとめ、必要に応じてその中から、或は海南新聞、或は日本新聞といふ風に、自分の主宰する俳壇の原稿を作つてゐたものらしい。その帳面が即ち『承露盤』である。『正岡家所藏『承露盤』の中より』と題した一群の俳句は、『句稿』に洩れて『承露盤』の中だけに登録されてゐる漱石の俳句を、拾ひ上げたものである。従つて『承露盤』にも『句稿』にもある句は、『句稿』の分だけが採用されてゐる事は、言ふまでもない。『句稿』にも『承露盤』にも洩れてゐて、なほ新聞・雜誌に掲載された句は、その新聞・雜誌から直接に拾ひ上げられた。

石の他の藝術と同じやうに、漱石の俳句に大轉回を與へた。修善寺大患以後、漱石の俳句は、俄然としてその光輝を増し、芭蕉の所謂「誠」を吐露する句となるのである。然もその「誠」は「執濃い油繪」のやうな「誠」ではなくて、「一筆がきの朝顔」のやうな「誠」であつた。「別るゝや夢一筋の天の川」・「秋の江に打ち込む杭の響かな」・「骨の上に春滴るや粥の味」・「肩に来て人懐かしや赤蜻蛉」——かういふ句の味は、古典にない、古典の味である。

元來漱石は、「執濃い油繪」のやうな「誠」と「一筆がきの朝顔」のやうな「誠」と、二つの「誠」を自分自身の中に持つてゐた。修善寺の大患を機として、漱石は、寧ろ「執濃い油繪」のやうな「誠」を吐露しつつ作つて行く俳句によつて調節し、その自分の中で劇しい對照をなすものを、徐徐に一つのものに綜合して行かうとし始める。漱石が修善寺大患以後、年年小説を書く合間合間に、書をかき畫をかき漢詩をつくつて行つた事も、同じ意欲から來たものである。殊に漱石が、最後の『明暗』の執筆に際して、午前中『明暗』を一回分書いては、午後に七言律を一首づつ、日課のやうにして作り、小説をかく事によつて俗化した頭を洗ひ淨めるのだと言つてゐたといふ事實は、最もよく道般の消息を明らかにする。小説を書いて自分の頭の俗了する事が、それほど不愉快な事であるならば、漱石は、さういふ小説を書かないが可いのである。然し漱石の中の「執濃い油繪」の

フ資格サ」とあるやうに、俳句のやうな器では、到底盛り切れないものを自分の中に感じ、それを表現する手段を目つけるのにいらいらしてゐた際である。漱石は、一面、何かデスベレートな、不承無精な心持でしか、俳句を作る事が出来なかつた。「愚かければ獨りすゞしくおはします」・「無人島の天子とならば涼しかろ」・「能もなき教師とならんあら涼し」——當時の漱石の俳句の中で人を撃つ句は、その尖鋭しい諷諭の鋒銚をもつて、俳句の枠を突破しようとするやうな句である。間もなく漱石は『猫』を初めとして、いろいろ小説を書き出した。俳句は自然漱石から顧みられなくなつてしまつた。それでも明治三十九年・四十年・四十一年・四十二年と、漱石が多少でも句作してゐるのは、主として松根東洋城のせゐであつた。例へば、明治四十年の『手帳の中より』の句の中の、蓮十三句だの、清水十八句だの、鹿十八句だの、高濱虚子に代つて、當時國民新聞の俳壇を擔當してゐた松根東洋城が、その國民俳壇の爲に漱石に作らせたものである。

然し小説を書き出してからの漱石の俳句は、寧ろ氣魄の充ち充ちてゐない、餘技のやうな句が多く、技巧の勝つた、その點で學ぶべきものを持つてゐないではないが、然し句の底に磅礫たるものが動いてゐて、それが人に迫つて來るといふやうな句は、極めて少ないやうである。是は、さういふものを漱石は、悉く小説の形で表現してしまつて、俳句では、ほんの軽い心持をしか表現しようとしなかつたせゐであるのかも知れない。然し明治四十三年八月の修善寺の大患は、漱

「誠」は、『明暗』のやうな小説によつて自分自身を表現するものでなければ、満足する事が出来なかつた。従つて漱石は必然に、『明暗』のやうなものを書かなければならなかつた。然も漱石の中の「一筆がき」の「誠」は、それを不愉快な事だと感じないではゐられないのである。それだからこの「誠」は、漱石を驅つて、七言律の世界に向はしめるのである。——かうして漱石は、二つのものに、思ふさま自分自身を發揮させつつ、それが自分自身を十分に發揮し了るのを待つて、それらのものを第三の世界に棄揚しようとするのである。

漢詩に於いて漱石は、俳句に於ける子規のやうに、自分に助言し、自分を指導してくれる人を持たなかつた。もし漱石に助言し、漱石を指導するものがあつたとすれば、それは唐宋の大家以外の何者でもなかつた。明治二十二年から明治三十年へかけての漢詩は、大抵子規に示されたもの計りである。然し子規は是に對して、俳句に於けるやうには、特殊な影響を與へる事がなかつた。明治三十一年から明治三十二年に互つて漱石は、長尾雨山の批評を乞うてゐる。然し是も、明治三十二年四月の『古別離』と『失題』とをもつて、終つてゐるやうである。翌明治三十三年の無題三首は、恐らく漱石が、海外留學生として出發しようとする時の感懷を、詠じたものであるに違ひない。それぎり漢詩の世界は、漱石の頭の中から姿を消した。

それが再び漱石の頭の中に影を落し始めたのは、丁度十年を隔てた、明治四十三年七月三十一日の事である。漱石は胃潰瘍の疑ひがあるといふので胃腸病院に通つてゐたが、竟に入院と決し、六月十六日入院した。七月三十一日といふのは、一ヶ月半の病院生活の後、もう可いといふので、退院を許された日である。漱石は日記に、「一昨日森園月の置いて行つた扇に何か書いてくれと頼まれてゐるので詩でも書かうと思つて、考へた。沈吟して五言一首を得た。／來宿山中寺、更加老衲衣、寂然禪夢底、窓外白雲歸。／十年來詩を作つた事は殆んどない。自分でも奇な感じをした。扇へ書いた。」と書いてゐる。然もこの、十年を隔てて忽然として漱石の前に姿を現はし、漱石をして「自分でも奇な感じがした」と言はしめた、漢詩の世界は、事實は決して、偶然に現はれたものではなかつた。少くともその結果から言へば、漱石にとつて必然のものであつた。八月六日漱石が修善寺に轉地し、其所で數回に互つて吐血し、生死の境をさ迷つて後、病後の數ヶ月に於いて、漢詩は、俳句とともに、漱石にとつて、なくてはならない表現機關になつたからである。のみならず漱石は、爾後毎年のやうに胃潰瘍に見舞はれ、過激な運動を禁じられ、且つ病後の頭腦には組織立つた事を考へるのが重荷でもあつた爲に、漱石は書をかき畫をかい、健康の回復するのを待たなければならなかつたが、その際、畫が畫讀としての漢詩を刺激し、畫讀としての漢詩が畫を刺激するといふやうな、特別な關係が結ばれるに至つたからである。大正五

年八月十四日夜以後、ほとんど毎日のやうに作られてゐる七言律が、『明暗』執筆中の漱石にとつて、いかに必要な世界であつたかは、既に述べた通りである。是まで漱石は、小説を書かなければならないから、もう畫をやめるとか、遊んで廻るのをやめるとか言つてゐたが、然し『明暗』では、小説は小説、漢詩は漢詩と竝立させ、午前中には日課として小説を書き、午後には日課として漢詩を作つてゐるのである。是は、漢詩の世界が——もしくは漢詩によつて代表される書や畫や俳句の世界が、それだけ深く漱石の心の中に喰ひ込んで行つた事を、證明する。一方から言へば、漱石の心に最も早くその根を下ろした漢詩が、最も遅くその香りの高い華を咲かせ出したといふ事も、一奇といふべきである。

漱石の心に最も遅くその根を下ろしたものは、英詩である。然も是は、ばつと一時に咲き出たのみで、間もなく、永久にその姿を消してしまつた。漱石の談話によれば、漱石は少時「英語英文に通達して、外國語でえらい文學上の述作をやつて、西洋人を驚かせようといふ希望を抱いてゐた」(『處女作追懷談』)のさうである。然しそれは、十分實現される事なくして終つた。此所に一括されたものは、その希望の微かな反響のやうなものである。

“Life's Dialogue”は、明治三十四年八月一日の日附を持つてゐる。即ち漱石のロンドン留學

中に出来上がったものである。明治三十四年八月六日の日記には、「Craig ニ至ル 氏我詩ヲ評シテ Blake ニ似タリト云ヘリ然シ incoherent ナリト云ヘリ」と書いてある。「我詩」といふのは、恐らくこの詩の事をさすものに違ひない。それより後の英詩は、大抵、明治三十六年、即ち漱石が歸朝した年の一年間に書かれたもので、最後の一篇のみが、明治三十七年四月の日附を持つてゐる。

英詩も亦漱石が『猫』を初めその他の小説を書き出すとともに、その姿を消したものの一つであつた。蟋蟀の歌は多少の例外であるが、然し漱石は、漢詩でも俳句でも表現する事の出来ないものを、英詩によつて表現しようとしたやうに見える。然し小説は、殊に『幻影の盾』や『蕪露行』のやうな小説は、漱石から、自分自身の内面を英詩によつて表現する必要を取り去つた。その後漱石は、自分の感想を英文で書くといふやうな事はあつても、英詩の形を採り上げる事はなかつた。

英詩と同じやうな運命を持つものに、新體詩・俳體詩・連句などの長詩がある。漱石がかういふものに手を染めてみたのは、恐らく俳句とは違つた詩形によつて、俳句には盛り込めない感情を表現したい要求から來たものであつた。従つて小説といふ自由な表現形式が、漱石によつて發

見されるとともに、それに對する漱石の興味は次第に減退し、明治三十八年に入つて作られたものは、たつた三篇しかないやうな状態になり、然もそれは、その後竟にその姿を見せる事がなくなつてしまふのである。もつとも漱石は、例へば『幻影の盾』の中だの『薙露行』の中だの、或は『草枕』の中だの『野分』の中だのに、かういふ種類の長詩を挿入してゐる。その點では漱石は、かういふ世界からも、亦かういふ詩形からも、全然遠ざかつてしまつたとは言へなかつたが、然しそれは結局小説の中の一部として用ひられてゐるので、それがそれとして、單獨に表現の器として採り上げられてゐるのは、意味が違ふ。一口に言へば、漱石が小説を書き出す以前に試みた一切のものは、漱石の小説の中に棄揚されてしまつたのである。俳體詩のあるもの、特に『尼』のやうなものは、日本在來の俳諧の上に、ある程度の革命を加へたものであり、その意味で俳諧史的には注意すべき現象ではあるが、それさへ漱石にとつて、自分の表現の器としては、結局棄揚されべき性質のものであるに過ぎなかつた。

『倫敦消息』は、言ふまでもなく、漱石がロンドン留學中、病友子規の無聊を慰める爲に書き送つた、手紙である。明治三十四年四月九日の日記によると、漱石はその日の朝「田中氏ヨリ Shakespeare Bust Stratford-on-Avon Album ヲ貰」つてゐる。それから漱石は「ク

レイグ先生」の所へ出かけて行つてゐる。歸つて來ると、突然牧師のノットがやつて來て、明日午後四時のウォーカーの所の茶の會に出ると言つてゐる。それから「晚九時頃より Mrs. Edgill に承諾の旨通知す夫より正岡に長き手紙を認む」とある。漱石が何時ごろまでこの手紙を書いてゐたのかは、これだけでは分からない。然し『倫敦消息』の(一)は、たかだか三時間くらゐで書かれたものではなかつたかと想像される。その(二)は四月二十日の日附である。日記には「今日ノ晝飯 魚、肉米、芋、ブデング、pine-apple、クルミ密柑^原ノ七時茶 姉妹トモ外出新宅ノ窓掛其他ノ尺ヲトル爲ナリノ非常ナル快晴珍ラシ風立ツ」とだけあつて、子規へ手紙を書いたともなんとも書いてない。その(三)は四月二十六日に書かれたものである。その日の日記にも、「朝 Tooting Station 附近ヲ散歩ス ツマラヌ處ナリ」とだけあつて、手紙の事はなんとも書いてない。漱石が『倫敦消息』三十頁の爲に費した時間は、三回を通じて、恐らく十時間内外だつた筈である。その『倫敦消息』は、當時『ホトトギス』に連載され、當時の『ホトトギス』の讀者のみならず、手紙をもらつた當人の、子規を非常に喜ばした。嬉しさのあまり、子規は病床から無理に筆を執つて手紙を書き、せめてもう一度ああいふものを書いてよこしてくれないかと、漱石の所に頼んでやつた。然し漱石の方では、自分の仕事に急がしく、なかなかさういふ心のひまを作る事が出來ず、ついうつちやらかしてゐるうちに、子規は死んでしまつた。その時の巨細を漱石は、

『我輩は猫である』中篇の序で書いてゐる。その中で漱石は、子規がもし今日まで生きてゐたら、『倫敦消息』は結構だが『猫』は御免だといふかも知れぬと言つてゐるが、然し事實は『倫敦消息』は、『猫』の先觸のやうなものだつたのである。

勿論『倫敦消息』は、漱石自身の身邊をありのままに報告したもので、『猫』がすべてのものを諧謔化して見てゐるのは、その根本の態度が違つてゐるとも、言へる。然し一度書き出すと、あとからあとからと書きたい事が湧き出て来て、それが二回・三回と續いて行くといふ趣から見ても、漱石が、自分の書きたいと思ふ事を、いかにも伸び伸びと自然に自由に書いて行つてゐるといふ點から見ても、其所に書かれてゐる事が、十分寫生的で、甚だ清新であるといふ所から考へても、然もそれとともに、滔滔と流れ出る自分の主觀をその中に織り交ぜて、寫生から来る清新性と現實性とを少しも害つてゐないといふ點から考へても、『倫敦消息』と『猫』とが兄弟分である事は、明白である。『倫敦消息』は次いで『ホトトギス』に現はれたものは『自轉車日記』であり、明治三十六年六月、即ち漱石が歸朝した年の六月に發表されたが、是は妙に氣取つたボーゼの下に書かれ、ある意味で厭味があつて、それだけに評判は、あまり香ばしい方ではなかつた。然しこの『自轉車日記』も亦、『猫』の第二の先觸であるといふ意味では、漱石の藝術史上、逸する事の出来ない作品である。『自轉車日記』の、自分自身を諧謔化するとともに世界を

諧謔化する態度と、『倫敦消息』の伸び伸びした自然な楽な自由な文體とが一つのものになれば、それが自然『猫』のやうなものになつて現はれるといふ事は、ほとんど必然であると言つても可い事だつたからである。

『倫敦消息』は後に、漱石の文集『色鳥』の編輯者の乞ひによつて、大正四年九月に、再び世間に出された。その際漱石は、是を昔のままの形で公けにする事を欲せず、その(一)を全然削除し、(二)と(三)とは保存するにはしたが、ほとんど舊態を止めないやうに、全體に大斧削を加へた。

『倫敦消息』初稿で漱石が、あたるにまかせて薙ぎ倒すやうに、その才筆を縦横に振り廻してゐる事は、疑はるべくもない。恰もその點が、後の漱石には、輕薄にも厭味にも見えたのではなにかと思はれる。然し此所には、過去の漱石の持つてゐた良いものと悪いものとが、引き離す事の出来ない程度に、絡み合つて現はれてゐるのである。もしその、輕薄に見え厭味に見えるものを削り去るならば、それとともに良いものも亦削り去られ、全體はその生彩をぬきとられて、藻ぬけの殻のやうなものになつてしまふに違ひない。それに氣がつかない漱石ではない筈である。氣がついてゐてもなほ漱石が、敢てゐるんなものを削除して顧みなかつた所以のものは、苟もそれを公けにする以上は、現在の眼から見て、我慢が出来る程度のものでなければならぬ、我慢

が出来る程度のものにする爲に、例へばそれに附隨してゐた生彩を滅殺するとしても、それは已むを得ない事であるといふ、漱石の、はつきりした考へ方から來てゐるのだらうと思ふ。

元來漱石は、自分が筆を下すまでの間は、書かうとする事を練りに練るが、それを書いてしまふや否や、もうそれを見向くのも厭だといふやうな作家であつた。自分が過去に書いたものを、幾度も幾度も手を入れて倦まない作家もあるが、そんな事をして時間と精力とを費すほどなら、自分は新しいものに手を著けるといふのが、漱石の主義であつた。この事は漱石が、自分の作品を愛しなかつたのだといふ事を、意味しない。寧ろ漱石は自分の作品を愛するが故に、自分の作品の爲に恥ぢるのである。恥ぢるが爲に、もつと良い作品を書いて、その作品の爲に、良い兄弟を與へてやらうとするのである。その意味で漱石は、第二作で第一作を訂正し、第三作で第二作を訂正し、自分のレコードを自分で破つて、次ぎから次ぎへと進んで行かうとした。大正五年二月二十六日、漱石は津田青楓に宛てて「いつぞや書いた我師自然といふ額の字もどうか撤回したいと思つてゐます今度寸法を取つて置いて下さいませんか夫に合はせて書き直しますさうして張り替へます、方々へ耻の搔き棄をやつてゐるので尻拭に骨が折れるばかりです、其尻拭が一年経たないうちに又耻ざらしになるのだから甚だ情ない次第です」と書いてゐるが、然し是は書畫に限つた事ではなかつた。現に漱石は大正四年一月二十九日山田卓爾宛の手紙の中で、「私は色々な

ものを書きました、私が書き始めてから十餘年になります、今から回顧して見ると藝術的な意味で全然書き直したいものが澤山あります絶版にしたいと思ふものもあります、けれども其耻は藝術上の耻で徳義上の耻でないからまあ我慢してゐるのですあなたから色々云はれると甚だ勿體ない氣がします。」とさへも言つてゐるのである。かういふ心持がたまたま『倫敦消息』に觸發して、それまでの主義に反し、漱石をして斧削の擧に出でしめたものに相違ない。

この一巻を通讀して、誰でも氣がつくに違ひない事は、此所に網羅されてゐるもの殆んどすべてが、漱石の漱石らしい所を、何等かの點で、藏してゐないものはないといふ事である。此所に收められてゐるものに、適宜のモンタージュを加へる時は、ある時期からある時期までの漱石の精神生活を、さながらに表現し、後の漱石の顯著な要素を正確に捕捉する事が出来るであらう。その意味で漱石は、昔から、自分自身の内面生活と直接交渉を持たないものは、なんにも採り上げてゐないと言つて可いのである。

例へば漱石のホイットマン論である。ホイットマンが平等主義の代表者として此所に論ぜられてゐる事は、漱石の中にホイットマンのやうな、平等主義が動いて居り、それが「空間的に」も「時間的に」も平等主義を主張し、「獨立の精神」を主張し、個性の尊嚴と自由とを主張し、それ

今の書生は學校を旅屋の如く思ふ、金を出して暫らく逗留するに過ぎず、厭になればすぐに宿を移す、かゝる生徒に對する校長は、宿屋の主人の如く、教師は番頭丁稚なり、主人たる校長すら、時には御客の機嫌を取らねばならず、況んや番頭丁稚をや、薰陶所か解雇されざるを以て幸福と思ふ位なり、生徒の増長し教員の下落するは當然の事なり。——「教師は必ず生徒より老らきものにあらざ、偶誤りを教ふる事なきを保せず、故に生徒は、どこまでも教師の云ふ事に従ふべしとは云はず、服せざる事は抗辯すべし、但し己れの非を知らば翻然として恐れ入るべし、此間一點の辯疏を容れず、己れの非を謝するの勇氣は之を遂げんとするの勇氣に百倍す。」——「多勢を恃んで一人を馬鹿にする勿れ、己れの無氣力なるを天下に吹聴するに異ならず、斯の如き者は人間の糟なり、豆腐の糟は馬が喰ふ、人間の糟は蝦夷松前の果へ行ても賣れる事ではなし。」——「小智を用る勿れ、權謀を逞ふする勿れ、二點の間の最捷徑は直線と知れ。」——「損徳と善惡とを混ざる勿れ、輕薄と淡泊を混ざる勿れ、眞率と浮跳とを混ざる勿れ、濃厚と怯懦とを混ざる勿れ、磊落と粗暴とを混ざる勿れ、……」——是は『愚見數則』から適宜に抽出されたものであるが、然し是は、恐らく誰にでもすぐ氣がつくやうに、そのまま、『坊つちやん』の骨格を形づくる言葉であつた。さうしてそれはまた『猫』の或部分や『二百十日』や『野分』のイデオロギとも、脈絡する言葉である。漱石はまた『人生』の最後で、「二點を求め得て之を通過する直線の方向を

らのものを相互に結び合せるものとして、「男づくの友愛」を主張し、さうして組織された社會を冀求する事に、その基を發してゐるのである。漱石が英國の文學史上に於ける自然主義者を論じてゐるのも、漱石自身が持つて生れた天地山川に對する愛情を、クーパーやゴールドスミスやバインズやウォーヰズウォースなどの世界の中に投影し、それらの人人の體驗と自分の體驗とを比較・商量して、それその特質を明らかにし、それその特質に沿うて、自分自身の體驗を擴充しようとした結果であつたに外ならない。漱石がスターンの『トリストラム、シャンデー』を論じてゐるのも、ダントンの『エイルキン』を批評してゐるのも、前者がある點で『猫』を思はせるものを持つて居り、後者がある點で『幻影の盾』を思はせるものを持つてゐる所だけを考へてみても、漱石の世界と是らの作品の世界とが、縁のない世界ではなかつた事を、十分明らかにする事も出来るのである。

それのみではない。例へば『愚見數則』や『人生』のやうなものは、一は松山中學校の校友會雜誌の爲に書かれ、他は第五高等學校の校友會雜誌の爲に書かれたに過ぎないものではあるが、それでもともに、漱石の漱石らしさを躍然たらしめてゐるものであつた。——「昔しの書生は、笈を負ひて四方に遊歴し、此人ならばと思ふ先生の許に落付く、故に先生を敬ふ事、父兄に過ぎたり、先生も亦弟子に對する事、眞の子の如し、是でなくては眞の教育といふ事は出来ぬなり、

知るとは幾何學上の事、吾人の行爲は二點を知り三點を知り、重ねて百點に至るとも、人生の方向を定むるに足らず、人生は一個の理窟に纏め得るものにあらずして、小説は一個の理窟を暗示するに過ぎざる以上は、「サイン」「コサイン」を使用して三角形の高さを測ると一般なり、吾人の心中には底なき三角形あり、二邊並行せる三角形あるを奈何せん、若し人生が數學的に説明し得るならば、若し與へられたる材料よりXなる人生が発見せらるゝならば、若し人間が人間の主宰たるを得るならば、若し詩人小説家が記載せる人生の外に人生なくんば、人生は餘程便利にして、人間は餘程えらきものなり、不測の變外界に起り、思ひがけぬ心は心の底より出て來る容赦なく且亂暴に出て來る、海嘯と震災は、管に三陸と濃尾に起るのみにあらず、亦自家三寸の丹田中にあり、險呑なる哉」と言つてゐるが、漱石はそれだからなんにもしないでぼんやり手を拱いてゐるといふのではなく、反對に漱石はそれだから、いくら「不測の變」が外界に起り、いくら「思ひがけぬ心」が心の底に湧き出ようと、決してうろたへないでゐられるだけの、「人間の主宰」者としての自分自身の心の自由を獲得しようとして、勇猛に精進するのである。

明治三十四年の“Life's Dialogue”の中にも漱石は、“The world is wide; as wide / The mind thou callest thine own. / Learn over thyself to preside, / Thou art the master alone! / The world itself is in thee, / Not thou in the world dost live”と言

つてゐる。同じ年の七月一日の日記の中には、「近頃非常ニ不愉快ナリクダラス事ガ氣ニカ、ル神經カト怪マル、然一方デハ非常ニゾトゾ敷處ガアル、妙ダ酒々落々光風霽月トハ中々ユカシ駄目／＼と書いてゐる。「酒々落々光風霽月」の世界は、物に役せられずに物を役する世界である。「人間が人間の主宰」者である世界である。

然しその「酒々落々光風霽月」の世界が、漱石の人格の地となり、如何なる場合に際會しても、何の拘泥もなしに振舞ふ事が出来る爲には、漱石は、一生かかつて、自分の中のそれを妨げるものとの戦ひを、戦はなければならなかつた。——ただ漱石は子供の時分から自然を愛し、子供の時分から創造の喜びを知つてゐた。自然を愛し、創造の喜びに與かる時、漱石の前には、利害もなく得失もなく、是非もなく褒貶もなく、醇乎として醇なる三昧境が出現する。例へば漱石が、明治二十二年の『木屑録』の中で、「白眼甘期與世疎。狂愚亦懶買嘉譽。爲譏時輩背時勢。欲罵古人讀古書。才似老駘鷲且蹊。識如秋蛻薄兼虛。唯贏一片烟霞癖。品水評山臥草廬」と言つてゐるのも、明治二十四年の俳句の中で、蓮の花を眺めて、「見るうちは吾も佛の心かな」と詠んでゐるのも、所詮漱石が自然の美しさに對してゐる間は、その美しさに領せられて「佛の心」になり得るが爲に、假令自分は世の中に容れられる事がなく、自分にも世の中を容れる雅量はないとしても、「品水評山臥草廬」して、晏如としてゐる事が出来るといふ事を、自ら告白してゐるもの以外

ならないのである。然もさういふ美しいものが漱石を領し、それによつて漱石自身が美しくされた時、漱石は創造欲を刺激される。その刺激に驅られて創造する時、漱石は、一切を放下してその事に打ち込み、打ち込む事によつて詩人のみが賦與される、特殊な人生の饗宴に與かる事が出来た。同じ『木屑録』の中に、藝術的感興に襲はれて述作する邵青門の事を叙して、「邵青門方構思時、類有大苦者、既成則大喜、牽衣遶床狂呼、余之呻吟有類焉」と書かれ、それは七年を隔てて、明治二十九年の『人生』の中にも書かれるのみならず、更に十五年を隔てて、大正元年の『文展と藝術』の中でも、採り上げられた。其所で漱石は、「邵青門といふ人が、自分の室に閉ぢ籠つて、構想に耽るときの有様を叙して、「兩頬赤を發し、喉間洛々聲あるに至る」と云つてゐる。大いに苦しい様だとも云つてゐる。然し都合よく何物をか捕まへたときには、大喜びで、「衣を牽き床を遶つて狂呼す」とも云つてゐる。自分は小供の時分から此所の文章を読んで嘘とは思はなかつた。」とさへも言つてゐるのである。子供の時からさういふ歡びを知つてゐた漱石は、いつまでもその歡びを失ふ事がなかつた。然もさういふ「佛來れば佛を殺し、祖來れば祖を殺す」三昧「絶對の境に入つた」自分の眼をもつて、逆に平生の自分を眺める時、漱石は平生の自分が、利害に執し、是非に耽り、私に充ちてゐる事を、認識せざるを得ないのである。

大正三年三月二十九日津田青楓宛てて漱石が、「私は馬鹿に生れたせゐるか世の中の人間がみ

んないやに見えます夫から下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押して行きま
す、丸で梅雨の天氣が晴れないのと同じ事です自分でも厭な性分だと思ひます」と言ひ、更に、
「世の中にすぎな人は段々なくなります、さうして天と地と草と木が美しく見えてきます、こと
に此頃の春の光は甚だ好いのです、私は夫をたよりに生きてゐます」と言つてゐる事は、既に引
用したか、どうしても何事かに拘泥せずにはゐられない自分の「厭な性分」を、厭に思へば思ふ
ほど、漱石は「天と地と草と木」とを美しいと思はずにはゐられないのである。同時に漱石は、
「天と地と草と木」とを美しいと思へば思ふほど、自分の「厭な性分」を厭に思はずにはゐられ
ないのである。この二つのものの矛盾・杆格は、漱石の中の美しいものが、次第に殖えて來れば
來るほど、次第に深刻になつて行つた。さうしてそれは、アウグスティヌスが、幾度か天上の榮
光と地下の汚泥との間を、飛躍しては顛落し、顛落しては飛躍したやうではないまでも、漱石に
崇高なトラギクを用意した。漱石が後年自分のモットーとして掲げた「則天去私」は、從つて、
漱石のこのトラギクが生んだモットーである。「則天去私」は、漱石が其所に到達し得たから、
高齋と掲げたモットーであるよりも、其所に到達したから、其所に到達しなければならぬ
から、自分の目標として掲げ出したモットーである。然も、そのモットーを生み出すに必須な二
つの要素は、既にこの『詩歌俳句及初期の文章』の中に、極めて顯著にその芽を現はしてゐるの

である。殊に俳句と漢詩と——別して漢詩は、漱石が凡そ筆を執り出してから筆を擱くまで、十年の空隙はあつても、漱石の述作の最初と最後とを飾るものであるだけに、漱石の一つの要素を表現して、その極點の高さにまで達してゐるものであると言つて可いだらうと思ふ。例へば漱石の最後の詩——「眞蹤寂寞杳難尋。欲抱虛懷步古今。碧水碧山何有我。蓋天蓋地是無心。依稀暮色月離草。錯落秋聲風在林。眼耳雙忘身亦失。空中獨唱白雲吟」である。漱石の「則天去私」は、漱石の人格としては十分完成されなかつたとしても、その漢詩に於いては十分完成され、漱石がその一面に持つてゐた高さを、實に潑刺と表現してゐると言へるのである。(一一・八・二三)

「日記及斷片」

『吾輩は猫である』の猫は、主人の苦沙彌先生が日記をつける所を見て、「猫杯はそこへ行くと單純なものだ。食ひ度れば食ひ、寐たければ寐る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶體絶命に泣く。第一日記杯といふ無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人の様に裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する必要があるかも知れないが、我等猫屬に至ると行住坐臥、行屎送尿悉く眞正の日記であるから、別段そんな面倒な手數をして、己れの眞面目を保存するには及ばぬと思ふ。日記をつけるひまがあるなら椽側に寝て居る迄の事さ。」と罵倒した。必しも猫と意見を同じくしてゐる譯でもあるまいが、漱石は平生あまり日記をつけなかつた。つけてもそれは、「世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する」爲の日記ではなくて、寧ろ、自分の見聞を記録して、後日の用に備へる爲の日記であつた。漱石は、自分が何所かに旅行をするか、それでなければ、もうそろそろ小説を書く

が、大學と高等學校とをやめ、朝日新聞に入社した上で、ほつとした気分になつて、京都に遊びに行つた時の日記である。漱石はこの時、あなたがち小説の種を探す氣で、出かけて行つた譯でもなかつたのだらうと思ふ。然しその旅から歸つて来て、初めて新聞に書いた『虞美人草』の中で、漱石はこの旅の見聞を、例へば甲野さんと宗近さんとの、叡山登りや保津川下りなどの材料として使つてゐる。明治四十二年三月二日から八月二十八日までの日記は、是からそろそろ『それから』が書かれようとする時分の日記である。従つて『それから』には、この日記に書き留められた事が、可也多く、材料として用ひられる。高商事件・日糖事件・『煤煙』・『七刑人物語』・君子蘭・鈴蘭などが、それである。更に空想を逞しうすれば、漱石がこの日記の中に、「歌麿のかいた女はくすんだ色をして居る方が感じが好い」と書き込んでゐる、「鏗節屋の御上さん」は、或は『それから』の三千代の姿を纏め上げる、原動力になつてゐるのではないかとさへも思はれる。明治四十二年九月一日から十月十七日までの日記は、中村是公の勧誘によつて、漱石が滿韓を旅行した時の日記である。是は、その一部分が、『滿韓ところく』となつて現はれた。明治四十三年六月六日から七月三十一日までの日記は、漱石が『門』を書き了へてから、胃の工合が悪い爲に、長與胃腸病院に出かけて診察を受け、到頭入院と決定し、入院するから退院するまでの、日を記述した日記である。六月六日は、漱石が、胃腸病院へ診察してもらひに行つた最初の日で

準備をしなければならぬといふやうな場合かでない、日記をつけてゐないのである。漱石は、その目的の爲に印刷され製本された、常用日記のやうなものを、殆んど用ひてゐない。それは、明治三十四年の英國製のそれと明治四十二年の日本製のそれと、たつた二冊あるきりである。あとはすべて手帳に書かれる。手帳は、およそ四六判三冊、菊半裁判四冊、袖珍判二冊、合計九冊である。この事が既に、ある意味からいふと、漱石が日記を丹念につける事に、特別の興味を持つてゐなかつたといふ事を、物語つてゐる。

最初の、明治三十三年九月八日から十二月十八日までの日記は、言ふまでもなく、漱石が英國へ留學する途中と、船をナポリに棄ててジェノワからパリに入り、パリからロンドンへ著き、其所に暫く住んでゐた時分の日記である。ロンドン滞在中の日記は、再び、翌明治三十四年一月一日から十一月十三日に互つて書き綴られる。漱石は、更にもう一年ロンドンに滞在し、明治三十五年十二月五日、其所を出發して歸朝の途に就くのであるが、然し三十五年に入ると、漱石はもう日記をつけなかつた。歸朝の途中の日記もない。歸朝して東京に住み、大學と高等學校とに教鞭をとるやうになつてからの日記もない。明治三十五年以降の三四年間は、日記など到底つけてゐられないくらゐ、漱石は切迫した生活氣分に坐してゐたやうである。

明治四十年三月二十八日から四月十日までの日記は、明治三十八年から創作活動を始めた漱石

あり、七月三十一日は許されて退院した日であつた。漱石は、退院してから、醫者の勧めで、修善寺に轉地する。然もその轉地先で漱石は、再び胃痛に悩み、竟に大吐血して倒れ、二ヶ月近くの間病床に釘付けにされ、徐徐に回復すると、擔架で汽車に運ばれて新橋に著き、擔架で胃腸病院にかつぎ込まれて、其所で越年する。明治四十三年八月六日から明治四十四年二月二十一日までの日記は、その修善寺へ向けて出發する日から始まつて、胃腸病院を退院（二月二十六日）する數日前まで續いた日記である。漱石はその一部を——大吐血を中心として、その前と後との自分の心的状態の詳細を——『思ひ出す事など』で報告した。

明治四十四年五月九日から十二月十五日へかけての日記は、漱石の親戚の結婚披露の席の描寫から始まつてゐる。是も恐らく漱石が、病氣で長い間小説を書く事を怠つてゐたあと、もうそろそろ小説の支度にとりかからなくてはならないと思ひ、何かの材料に使ふ氣で、この日を機會に、日記を書き始めたものに違ひない。間もなく漱石は、自分の所で世話をしてゐた西村濤蔭の妹を、お嫁にやる事にする。その結婚と前の親戚の結婚とは、非常な對照をなす結婚である。その對照が漱石の心を牽いたのか、この婚禮も漱石は、可也詳細に日記の中に書きつける。六月に入ると、漱石は、雅樂演奏の拜觀に出かけた。是も相當事細かに書き留められる。さうして是は、後に『行人』で、三澤が自分の妻君の友達を、二郎に紹介する場面として、利用された。——こ

の日記に書かれてゐる事は、後の『行人』の材料としても随分多く利用されてはゐるが、然しなると言つても、最も多く利用されてゐるのは、明治四十五年一月一日から四月二十九日へかけて發表された、『彼岸過迄』の中である。『彼岸過迄』の中の『雨の降る日』の骨子をなすものは、殆んど全部この日記の中に書き留められてゐる。そのみではない。『風呂の後』の森本が、北海道で經驗する話も、全部この日記の中から出てゐる。『須永の話』の須永が、鎌倉で見る景色も、千代子の家族と船に乗る一仕始終も、或は『松本の話』の中の、須永の旅先からの便りも、大抵この日記の中から出てゐる。この日記の最後の日、十二月十五日の部に、「今日から小説を書かうと思つてまだ書かず。他から見れば怠けるなり。終日何もせざればなり。自分から云へば何もする事が出来ぬ位小説の趣向其他が氣にかゝる也」とあるのは、言ふまでもなく、『彼岸過迄』の事である。

明治四十五年五月から大正元年十月五日へかけての日記は、『彼岸過迄』の次の小説に備へるための日記であつた筈である。然しこの日記で『行人』の材料となつたものは、鎌倉に漱石がその夏借りた材木座の別荘の景色ぐらゐなもので、その大部分は、前の日記から採り上げられた。是は漱石が、前年、即ち明治四十四年の八月、大阪朝日新聞から頼まれて、和歌山・明石・堺・大阪と、關西を講演してあるいた時の見聞が、使はずに置くのは惜しいほど、澤山あつたせゐでは

なかつたかと思はれる。「行人」の一郎一行が和歌山に遊びに行く所、二郎とお直とが和歌の浦

で暴風雨の一夜を宿屋の一室で明かす場面、三澤が胃潰瘍か何かで病院に擔ぎ込まれ、其所で長い間寝てゐる大阪の病院生活、さういふものはすべて漱石が、この講演旅行で経験したものを、それぞれ適宜にモンタージュを試みたものに外ならない。この日記が役に立つたのは、ずつと飛んで、最後の『明暗』の場合である。『明暗』では、主人公の津田が、痔瘻を切開してもらふ爲に、専門の病院に入院する。さうして『明暗』では、その津田の入院中に、事件がいろいろに展開する。その切開と切開後の経過と入院中の周囲の光景とを、漱石はこの日記に書き留めてある、自分自身の経験からとつて來た。——もつとも漱石は、その前年、明治四十四年の秋にも、暫く同じ病院に通つてゐたのである。『明暗』の材料となつたものは、必ずしも大正元年の経験だけに限られた譯でもなかつたが、然し漱石が其所に入院したのは、大正元年だけである。日記にはその時の事が、相當精しく書いてある。

その後日記は、暫くとぎれる。漱石は、大正元年十一月三十日から『行人』を書き始めたが、大正二年三月末に胃潰瘍に倒れ、二ヶ月以上外出する事の出來ない状態に置かれて、一時『行人』を書き續ぐ事を断念しなければならなかつた。『行人』續稿としての『塵勞』が、新聞に掲載され始めたのは、同じ年の九月十六日であり、揚了になつたのは、十一月十五日である。大正三年

には、四月二十日から八月十一日に亘つて、『心』が掲載される。その合間合間を、漱石は多く書をかき、晝をかいて暮した。然も漱石によれば、漱石は小説や脚本は「刺戟が強烈」で、「實生活ノ反映としてウンザリ」する、さういふものを見たり讀んだりしてゐると、「心に餘裕ガナ」なくなり「従つて不安」になり、「俗ツボ」くなつてしまふから、それでさういふものから離れて、「自由、安穩、平和を求める」爲に晝をかくといふのだから、自然漱石は、日記をつけるといふやうな事に、あまり氣が向かなくなつたに違ひない。日記をつけるとなると、勢ひ人事にも多く頭を向ける傾向が出て來るからである。もつとも漱石は、大正四年には、三月十九日から二十九日へかけて、日記をつけてゐる。是は、漱石が『道草』を書き出す前、京都に遊びに行つた時の日記である。然し漱石のこの時の心持は、どつちかと言へば、そのうち厭でも小説の事に頭を使はなければならぬのだから、今のうち、さういふ事から離れて、暢氣に頭の洗濯をして來たいといふ點にあつたと思はれる。少くとも『道草』では、この時の見聞は、「鳥鳴く。何ぞと聞けばチンチラデンキ血持てこ汁のましょ。」といふ、暢氣な一句が、漱石が長野に行つた時に見た「元祖藤八拳指南所」といふ看板の話とともに、暢氣な比田の暢氣さ加減を表現する手段として、たつた一つしか使はれてゐないのである。大正四年十一月九日から十七日頃までの日記は、『道草』を

かいてしまつたあとで、漱石が中村是公と一緒に、湯河原に遊びに行つた時の日記である。大正

五年一月二十八日から二月十六日までの日記も、同様であつた。この時漱石は、前年の暮から腕が痛んで、原稿を書くのに困難を極めた爲に、大正五年の元日から新聞に載り出した『點頭録』を、書きさしたままで、中村是公の行つてゐる、湯河原に轉地した。『明暗』の津田が、自分の過去の戀人である清子を訪ねて、ある温泉場へ出かけて行く、その温泉場といふのは、この湯河原に舞臺がとられてゐるのである。

漱石の「日記」は、非常に詳細を極めた部分もないではないが、概して言へば、極めて簡單で、ほんの心覺えを箇條書きにしてゐるやうな箇所が、随分多い。然しその箇條書きのやうなものでも、漱石といふ人間を頭の中に置いて、凝と眺めてゐさへすれば、津津として盡きない味が、あとからあとから湧いて出て来る。殊にそれが、漱石の作品の中に材料として用ひられてゐる場合、それと作品の中のものとの比べて、漱石がそれを如何に描き出し、又それを如何なる場面に如何に利用してゐるかを知らうとするならば、人はそれによつて、漱石の物の把握し方を知り、把握したものを利用するし方を知り、また一般に小説を構成する場合の、漱石の頭の働き工合を知り、この「日記」を更に面白く讀む事が出来るに違ひないのである。例へば、明治四十四年八月十五日に、漱石が和歌の浦で経験した暴風雨の一夜が、『行人』の中でどう使はれてゐるかを、

比較して見るのでも可い。大正元年九月に漱石が、神田錦町の佐藤病院で経験した事が、『明暗』の中でどう使はれてゐるかを、研究して見るのでも可い。もしくは、滿韓旅行の日記と『滿韓とさろく』とを、修善寺の日記と『思ひ出す事など』とを對照して見るのでも可い。「日記」を絶えず漱石の作品との關聯に於いて讀むといふ事は、漱石その人を理解する上のみならず、漱石の作品を理解する上にも、亦必要な事たるを失はない。

もつとも漱石の「日記」の面白味は、單に漱石の作品との關聯の上のみあるのではなかつた。漱石の「日記」は、そんなものから全然離れても、それ自身獨特の美しさや深さを持つてゐる。多少の誇張を施して言へば、此所には漱石を動かしたものが、最も直接的な、最も端的な、最も自由な形で表現されてゐるだけに、漱石の漱石らしい美しさも深さも、最も直截に、最も潑刺に、動いてゐるといふ事も出来るのである。例へば漱石の自然愛である。漱石は、子供の時分から、切に自然を愛し、晩年に至つてその愛は更に悲壯なものによつて裏打されてゐると言つていいが、その自然の美しさに躍る漱石の心が、「日記」の到る所に現はれる。——「雛を賣る店。櫻の作り花。鯛と榮螺と蛤を籠に盛りて青き笹を敷きたるが魚屋の店にあり。赤く塗つた蒲鉾も澤山並んでゐる。花屋が赤い桃の花を竹の筒に挿してゐた。室咲と思ふ。梅しきりに咲く。」(四二・三・二)——「〇雨晴、透き通る様な空なり、湯殿の擦硝子に昨夜の湯氣が露になつて凝り付いてゐる。

る。下に蠅が一匹靜肅にとまつてゐる。硝子の欠けた隙間から檜の若葉が見える。其葉の茂つた間から青空が見える。二つのあざやかな色が判然區別される。意識の明確になる朝である。」(四・四・五・三一)——「麴町の花屋でみづ／＼しきあやめを桶にすい／＼と入れてあつた。」(四・三・六・六)——「○神坂坂に虫屋が荷を出してゐた。長さ一間位の荷の上を屋根の様にして前に暖簾をかけてゐる。黒い中に白で字が染め出してある。真中に山の下へ越の字其左右に虫の名が並べてある。松虫、鈴虫、響虫……中には箱が一杯ある。扇の形、舟の形、鳥籠の形、紫のひもで括つたものや、緋の紐で結ひたもの、夫から家の形に出来たもの、虫屋は其下に腰を掛けてゐる。殆んど足を動かす事さへ出来ない。」(四・四・七・九)——「○雲出づ。白い雲が薄く濁つた中か、微かに赤みを帯びてゐる。その奥には紫の匂も見える。藪は切れる様に續がる様に澤山であつた。其背景たる青空もつや消しである。暖かく藏れてゐる。冴えたぎら／＼したものではない。嶽雲である。」(四・三・七・二〇)——「○漸く秋の風を聞く。肌にも秋の風と感ぜらる。芭蕉猶青くさら／＼と鳴る。裂けながら鳴る。梧桐は殆んど片葉をとどめず。」(四・四・一一・二七)——普通の人には、なんでもない事として見過され勝ちな、庭前・街頭の光景が、愛する漱石の光を受けて、見遠へるやうに美しく、眼の覺めるほど鮮やかに、我我の眼の前に現はれる。さうして、漱石を楽しくした自然は、漱石が楽しんだ事によつて、我我を楽しくする。

かういふ漱石が、花鳥風月の趣に乏しいロンドンに住んで、いかに落寞たる生活を送らなければならなかつたかは、想像に餘りある事である。漱石はロンドンにゐて、「句あるべくも花なき國に客となり」といふ句を作つてゐるが、明治三十三年から明治三十四年へかけての漱石の留學日記は、その「花なき國に客とな」つてゐる事の侘しさに、充ち充ちてゐる日記であつた。「倫敦ノ町ニテ霧アル日大陽ヲ見ヨ黒赤クシテ血ノ如シ、鶯色ノ地ニ血ヲ以テ染メ抜キタル太陽ハ此地ニアラズバ見ル能ハザラン。」(三・四・一・三)などといふのが、それである。それが如何に漱石に不愉快な印象を與へたかは、それから十年後、明治四十四年十一月二十八日の日記に漱石が、「疊。どんよりして陰氣からすくめられる様な天氣である。冬の近づいた氣分である。疊る中大陽が薄く見えるのを眺めると倫敦の時候を思ひ出す。夫でも大陽が毒血の様な色をしてゐないのが、まだ荒涼の感を柔げる。空氣の臭も少し違ふ。」と書いてゐるのを見ても、知れる。然もロンドンで漱石を侘しくしたものは、單に霧と煤烟とのみではなかつた。日記の中には、「先達て Craig 氏に雪は好きかと尋ねたら大嫌ひだと答へた何故と云たら泥がきたないと云つた泥は誰も好くまいが雪は Poetノ愛するものだ」と答へてやつた Craig は頻りに Hattie を云々する男だ(三・四・一一・九)といふのもあれば、「家の者共は犬ノ共進會を見に行つた悪い天氣デ雪が降つて居る、當地のものは天氣を氣にかけない禽獸に近う」(三・四・一一・一三)といふのもあり、また「西

洋人ハ執濃イヲガスキダ華麗ナヲガスキダ芝居を觀テモ分ル食物ヲ觀テモ分ル建築及飾粧ヲ見ニ
モ分ル夫婦間ノ接吻や抱キ合フヲ見テモ分ル、是ガ皆文學ニ返照シテ居ル故ニ洒落超脱ノ趣ニ
乏シイ出頭天外シ觀ヨト云フ様ナ様ニ乏シイ又笑而不答心自閑ト云フ趣ニ乏シイ」(三四・三・一
二)といふのもある。ロンドンには庭前・街頭に漱石の眼を楽しませるものもなければ、つき合
つて心を楽しくする風雅な人間もゐなかつたのである。勿論漱石といへども、或はデンマーク・
ヒル附近を散歩して「聊か風雅の心を喚起するに足る」(三四・一・一〇)と感じたり、或はタ
リツヂに畫廊を見に行つて、「此邊ニ至レバサスガノ英國モ風流閑雅ノ趣ナキニアラズ」(三四・
二・一)と言つたりするやうな事もないではなかつた。然し葦の芽の青いのを見るにも、桃の花
の蕾んでゐるのを見るにも、テューリップが頭を擡げてゐるのを見るにも、わざわざ遠い道のり
をあるいて、その場所へ行くのでなければ、自分の庭先では、もしくは一寸往來をあるいただけ
では、到底さういふものを見る事の出来ないやうなロンドンである。さういふ所に住んで漱石が、
自分は自分のエレメントにゐると感じ得る筈がない。

漱石は、明治三十四年の七八月以降は、十年計畫で「文學論」を著述する事の一念を發起して、
下宿屋の一室に立て籠づた。日記も七八月以降は、極めて事務的なものとなり、それも十月十三
日を期として、全然消えてしまふ。然も漱石にとつて、集中してこの一念に仕へれば仕へるほど、

居ながらにして眼を放せば、すぐ其所に、自分を樂しませてくれる草や木が、もしくは晴れた空
や暖い光が存在してゐるといふ事が、どんなに必要な事であつたか。然しロンドンの場末の下宿
では、さういふ事は到底望まらるべくもない。かうして漱石は、一つには、劇烈な神經衰弱に罹る
のであるが、然し一方から言へば、漱石がロンドンに住んで、「花なき國に客とな」る事の味氣な
さを、沁沁體驗したればこそ、漱石は、自分の日本人としての立脚地を確立し、例へば『草枕』
のやうな、純日本的な——もしくは純東洋的な立場から、在來の一切の小説にアンティテーゼを
置くやうな、破天荒な小説を書く氣にもなつたのだと、言へなくもないのである。『草枕』のみ
ではない。漱石は、假令どんな種類の小説を書いても、最後までこの立脚地を——寧ろ晩年にな
ればなるほど、この立脚地を護つて、その方向に自分の世界を高めて行く事に精進した。然もそ
れは、漱石の自然に對する、心からなる愛著を閑却しては、到底理解する事の出来ない立脚地で
ある。漱石の自然に對する、心からなる愛著は、明治三十三年以來、漱石の「日記」を貫ぬいて
流れる、一つのライトモティーフであつた。

他の一つのライトモティーフは、言ふまでもなく、漱石の人間に對する深い關心であつた。さ
うして、是なしには、作家としての資格が到底成立し得ない事も、亦言ふまでもない事である。
——「彼等ハ人ニ席ヲ讓ル本邦人ノ如ク我儘ナラズ、彼等ハ己ノ權利ヲ主張ス本邦人ノ如ク面倒

クサガラズノ彼等ハ英國ヲ自慢ス本邦人ノ日本ヲ自慢スルガ如シノ何レガ自慢スル價值アリヤ試
ミニ思ヘ」(三四・一・三)——「西洋人ハ日本ノ進歩ニ驚ク驚クハ今迄輕蔑シテ居ツタ者ガ生意
氣ナヲヲシタリ云タリスルノデ驚クナリ大部分ノ者ハ驚キモセネバ知リモセヌナリ眞ニ西洋人ヲ
シテ敬服セシムルニハ何年後ノヲヤラ分ラヌナリ土臺日本又ハ日本人ニ一向 *Disrespect* ヲ以テ居
ラヌ者多キナリツマラス下宿ノ爺杯ガ日本ヲ *appreciate* セヌノミカ心中輕侮スルノ色アルヲ見
テ自ラ頻リニ法螺ヲ吹キ己レ及ビ己レノ國ヲエラソウニ言ヘバ云フ程向フハ此方ヲ馬鹿ニスルナ
リ是ハ此方ガ立派ナヲ云ツテモ先方ノ知識以上ノヲ言ヘバ一向通ゼヌノミカ皆之ヲ *conceit*
ト見倣セバナリ黙ツテセツトヤルベシ」(三四・一・二五)——「夜下宿ノ三階ニテツク
日本ノ前途ヲ考フ」日本ハ眞面目ナラザルベカラズ日本人ノ眼ハヨリ大ナラザルベカラズ」(三
四・一・二七)——「日本ハ三十年前ニ覺メタリト云フ然レドモ半鐘ノ聲デ急ニ飛ビ起キタルナ
リ其覺メタルハ本當ノ覺メタルニアラズ狼狽シツ、アルナリ只西洋カラ吸收スルニ急ニシテ消化
スルニ暇ナキナリ、文學モ政治モ商業モ皆然ラン日本ハ眞ニ目ガ醒ネバダメダ」(三四・三・一
六)——「英人ハ天下ノ強國ト思ヘリ佛人モ天下ノ強國ト思ヘリ獨乙人モシカ思ヘリ彼等ハ
過去ニ歴史アルヲ忘レツ、アルナリ羅馬ハ亡ビタリ希臘モ亡ビタリ今ノ英國佛國獨乙ハ亡ブル
ノ期ナキカ、日本ハ過去ニ於テ比較的ニ満足ナル歴史ヲ有シタリ、比較的ニ満足ナル現在ヲ有

シツ、アリ、未來ハ如何アルベキカ、自ラ得意ニナル勿レ、自ラ棄ル勿レ默々トシテ牛ノ如ク
セヨ汝々トシテ鶏ノ如クセヨ、内ヲ虚ニシテ大呼スル勿レ眞面目ニ考ヘヨ誠實ニ語レ摯實ニ行ヘ
汝ノ現今ニ播ク種ハヤガテ汝ノ收ムベキ未來トナツテ現ハルベシ」(三四・三・二一)——勿論西
洋に行つた者は、誰でも大抵は、西洋と日本との比較に於いて、日本人としての世界に於ける自
分の立場を自覺し、其所から日本の現在を考へ、また日本の未來を考へ、日本人はこの間に處し
て、果してどうすべきであるかを考へるものである。従つて漱石がロンドンに住んで、日記の中
にかういふ事を書き込んでゐる事は、別に漱石にとつて異とするに足りない事だつたのかも、知れ
ない。然し漱石がロンドンで獲得した自覺と覺悟とは、漱石がロンドン留學を卒へて日本に歸つ
て來ても、また日本で創作に従事し出してからも、些しも動搖する事がなく、其所から絶えず日
本を批評し、其所から日本人に働らき掛ける事を、決して懈る事がなかつた。その最も適切な一
例は、漱石が明治四十四年八月十五日和歌山で試みた講演『現代日本の開化』である。そののみ
ではない。『猫』でも『虞美人草』でも『三四郎』でも『それから』でも、凡そ漱石の修善寺大
患以前の作品は、その中にさういふ批評を含んでゐない作品はないと言つても、少しも過言では
ないのである。

然し漱石の人間に對する深切な關心は、西洋文化對日本文化、西洋人對日本人といふやうな、

大きな問題としてのみ現はれてゐるのではなかつた。例へば漱石はその「断片」の中に、「出齒鷄。田子浦入水親子三人脊髓病。本所小女二人同時入水。ノ中尉。副官ヲ斬ル（戀ノ恨）ノ建部博士離縁。ノ大久保腎肉斬取事件。ノ長一寸八分幅一寸三分厚五分位ノ電降ル（六月八日）ノ姪婦震死。（眞鍮ノカンザシ）ノ四十二ト三十九ノ夫婦情死。美貌ノ妻強姦セラル。其事評判トナル。夫ノ嫌疑。妻ノ慰撫。情死。」（四一・六）などといふ、恐らく當時の新聞の社會面で報告された記事を、一括して記録してゐるかと思へば、「〇一日の新聞（大正五年三月十八日）ノ電報。廣西獨立宣言（上海特電）ノ獨乙海相交迭（ロイテル）ノ×經濟會議參列者を阪谷芳郎男にきめたといふ事。阪谷男の意見。歐洲戰爭の經濟狀態に及ぼす影響につき。一年二年の間に千億の軍費を要するが如き經濟上の大事件を適當に始末するため救濟善後策の必要あり。それから敵國苛めの案件もあり。ノ×英艦が日本の商船を頻々臨檢する事につき解決如何、（我國法律上の）……ノ以上箱中にあり。ノ通讀すると一項から一項へ心が段々變つて行く。讀了の後 はあ心が色々の經驗をしたなと思ふさうして其經驗に切目がなくてさうして變化が多い。變化の多い事といつたら考へると大變なものである。此繼目のない多大の變化を経過した心は「是で何分かゝつたらう」と思ふ。」といふ風に、刺激に充ちた新聞記事に反應する、自分の心を反省し、或は「昨夜子供が活動寫眞を見に行つたら、蘆花の不如歸をやつたさうだ。さうしたら常子が泣いたさうだ。

常子は九つである。どうして泣けるか不思議でならない。」（四二・七・四）と、子供の心理の不可思議に注意するかと思へば、「えい子が二三日前八つ位の學校友達を連れて來た。其子が御辭義をするから、へい入らつしやいと云つた。あとから二人遊んでゐる所へ行つて、あなたの御父さんは何をして入らつしやるのと聞いたら御父さんは日露戰爭に出て死んだのとたゞ一口答へた。余はあとを云ふ氣にならなかつた。何だか非常に痛ましい氣がした。」（四四・五・二一）と言つて、子供から自分の輕佻な態度を、たしなめられたやうに感じた記事もある。その他男女間の戀愛に關する問題などは、その種種相を盡して、數限りもなく書き留められる。もつとも是は、割合から言へば、「日記」よりも「断片」の方が遙に多い。「日記」に書かれた「ある腰辨出張の前後ある待合に行き素人を注文す。主婦よろしいと云つて寫眞を見せる。其中に自分の妻君の寫眞あり。主婦曰く此人〇日から〇日迄でなければ御意に應ぜずと腰辨腹の中で計算して見ると丁度自分の出張する間の日取也」（四五・六）といふやうな話は、漱石を非常に動かしたものと見えて、その後の「断片」では、二ヶ所に互つて、この事が書き上げられる。その一つ、大正四年十二月ごろから大正五年七月二十七日までの「日記及断片」の中では、漱石は「〇細君賣淫の話」と題して、「私はそれをKから聴きました。それからといふものはどうしても女を信する事が出来なくなりました。」とさへも書いてゐるのである。

従つて是は、ある意味から言へば、「日記」よりもより多く、「世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する」傾向を持つてゐるものであつた。殊に明治三十七八年のところに、英文で書かれたものの中には、もし是が日本語で書かれてゐたら、恐らくかうは思ひ切つて書かれなかつたに違ひないと思はれるほど、激越の情を吐露したのものもある。

「断片」が「日記」と同じやうに、漱石の英國留學前後よりも、留學から歸つて東京に住んだ後、特に漱石が明治三十八年に小説を書き出してから、頗にその分量を増してゐる事は、言ふまでもない。然も當時漱石は「日記」をつけてゐなかつただけに、漱石がまだ朝日新聞に入社しない前、是から『猫』を書かうとし、もしくは一方では『猫』を書き續けつつ、一方では短篇小説をそれからそれへと發表してゐる時分の「断片」の分量は、他の時期に比べて、比較にならない位に多いのである。漱石は、半べらの白紙や手帳の碁盤罫を、片端からペンで書き埋める事によつて、自分の鬱勃たる胸中の磊塊を、纔に寛ろげてゐたものらしい。其所には、英文で書かれた、戰鬥的な感想がある。日本文で書かれた同性質の、然し多少柔げられた、感想がある。さうかと思ふと、『猫』を思ひ出すやうな、巫山戯きつた、ノンセンスな饒舌がある。もしくはその『猫』に用ひられた種の列擧がある。『猫』十一に用ひられた、文明論と神經衰弱論とがある。『野分』の中の白井道也の論文と演説との下書もある。さうかと思ふと、『坊つちやん』のうらなり送別會

「日記及断片」の「断片」といふ名前は、外に適當な言葉がなかつた爲に、断想・感想・覺え書・控・その他いろいろに名づけられ得るものに與へた、假の名前に過ぎない。其所には、漱石の感想がある。人から聽いた身上話の聞書がある。自分の書かうと思つた、論文もしくは小説の筋書がある。不圖思ひついた警句や、小説のある場面の控がある。他人の作品を読んで、考へた批評もあれば、印象の深かつた他人の作品の一節もしくは一句を、抜き書きしたものもある。さうして是は、それだけを書く爲の手帳の相判一冊、菊半截判一冊、袖珍判一冊に、左からと右からと書かれたものもあれば、「日記」用の手帳の、反對の側に書かれてゐるものもある。明治三十七八年ごろまでのものは、漱石が講義用のノートを書いてゐた、相判のフルスキャップ三十三枚、その他雑多の大きさの紙八枚に、ばらばらに書かれてさへもゐる。(本文校了後に發見された「断片」は、同じやうに相判のフルスキャップその他に書かれて、十八枚に及んでゐる。是は「補遺」として卷末に追加された)。「断片」は、言はば、漱石の、年月日を伴はない、内面生活の「日記」である。漱石の「日記」が、多く外に動いてゐるもの、見聞を記録してゐるに反して、是は多く漱石の内に動いてゐるものに姿を與へたものである。漱石は「日記」をつけてゐる期間でも、「断片」は「断片」として、別な所へひとかたまりに書く事にきめてゐたやうに見える。

の席上で藝者が唄ふ、歌の記録もある。——勿論是は、後にはその目的の爲に、それぞれその場所一括された爲でもあるに違ひないが、「日記」よりも遙に多く、漱石の作品と、密接な關係を持つてゐるのである。

事實漱石の「斷片」を、漱石の作品との關係に於いて讀むほど、興味の深い事はないと言つて可い。中でも興味が深いのは、明治三十七・八年のころと推定される、一群の「斷片」の中の、第五・第六・第七である。是は結局私一己の想像に過ぎないのかも知れないが、これら第五・第六・第七は、必ず漱石の『猫』以前のものであり、然も漱石の『猫』は、かういふ階段を幾度か上り降りした後、今日我々の目の前にあるやうな姿に纏まり上がったもの——従つて、これら第五・第六・第七は『猫』の胎生學的發展の跡を示すものに外ならないからである。

「斷片」第五には、「それに近頃帝國文學へマクベスの幽霊と云ふを聞いた所が大變評判がいゝです」といふ言葉があり、また「セルマの歌でも出れば善う御座んすがね」といふ言葉がある。漱石の『マクベスの幽霊に就て』は、明治三十七年一月號の『帝國文學』に掲載され、オシアンの翻譯『セルマの歌』は『カリツクスウラの詩』とともに、明治三十七年二月二十日發行の『英文學叢誌』第一輯で發表された。従つてこの斷片は、恐らく明治三十七年の一月末か二月のころ、もしくはそれを距る事あまり遠くない時分に、書かれたものと推定して可いに違ひない。然も千

駄木時代の漱石は、劇烈な神經衰弱に悩まされ、自分の家の向うの下宿屋から聞こえて來る聲を氣にして、屢其所の書生を怒鳴りつけてゐたと言はれる。是は恐らく漱石が、さういふ疳癩の起つてたまらないある日、その疳癩に風を入れるために、神經をびりびりさせながら書いて行つたものに相違ないのである。既に漱石はこの「斷片」の書き出しに、「我輩の向ふの家に〇〇〇といふ書生の合宿所がある此書生等は日常我輩の疳癩を起して大聲を發するのを謹聽するの榮を得る果報者である時として先生の假聲杯を使つて我輩を驚かしめる其所に女の召使か何かと居つて此書生と二人假聲を使ふ其標本を一寸諸君に御紹介する。」と書いてゐる。然も此所には「我輩」といふ言葉が用ひられてゐるのである。

「斷片」第六には「新體詩」といふ見出し様のものがあつて、いきなり「僕は新體詩を作つたから見てくれ給へ從軍行と云ふのだ帝國文學へ投書したから今に出るだらう」と書き出してある。漱石の『從軍行』が『帝國文學』に載つたのは、明治三十七年五月の事である。従つてこの「斷片」が書かれたのは、恐らく明治三十七年の四月か五月の初めごろだつたに違ひない。然も此所には既に、『猫』の迷亭を思ひ出させる、饒舌があるのである。殊に相手のおひやかしを眞に受けて、「なにそんなに名句の積りでもないのさその位な事は朝食前の藝さ」と返事をする所なぞ、第一讀本の名文『巨人引力』を翻譯したといふ苦沙彌先生と、それを、とんだ所でトチメンボー

の御返禮に預かつたと言つて恐縮する迷亭との對照が、——『猫』全體を貫ぬいて流れる、苦沙彌先生と迷亭との對照が——、此所で既にはつきりした形で現はれてゐると言つて可いであらう。のみならず此所の「先づ是等は進めや進めと敵は幾萬の間に寐轉んで居て此日や天氣晴朗と來ると必ず一瓢を腰にして瀧の川に遊ぶ類の句だね、……」といふ形容は、後に發展して『猫』第三の「奥さん、月並と云ふのはね、先づ年は二八か二九からぬと言はず語らず物思ひの間に寝轉んで居て、此日や天氣晴朗とくると必ず一瓢を携へて墨堤に遊ぶ連中を云ふんです」といふ、月並に關する、迷亭一流の定義となつてゐる。

「斷片」第七は、「K君は近頃頻りに水彩畫の稽古をして居る彼に對して丹青の天才なる稱號を呈するは其畫を一分でも見た以上何人も踞踏する次第であるが彼は其技に熱心なりと云ふ點に於ては何人も首肯せざるを得ない」といふ言葉をもつて始められる。さうして此所には、そのK君が友人B君の所へ行つて、「天に星辰あり地に露華あり飛ぶに禽あり走るに獸あり……」と言つたといふアンドレア・デル・サルトの言葉を聽いて來て、猫の寫生を始めたり、車屋の子の八つちやんに五錢やつて、モデルになつてもらつたりする所が書かれる。漱石が水彩畫をかき出したのは、明治三十六年の事である。然し『書簡集』で見ると、漱石は明治三十七年の夏から明治三十八年の二月ごろへかけて、最も盛に人人に、自筆水彩畫の畫葉書を送つてゐる。この「斷片」

がいつごろ書かれたものであるかは、想像して見る確とした手懸りが無いが、然し是が、明治三十七年の十一月か十二月の初めごろに書かれた筈の『猫』第一よりも、前に書かれたものである事だけは、疑ひを容れない。此所では猫が「吾輩は猫である」と名乗をあげて、主人の棚おろしをするといふやうな形式は、まだ發見されて居らず、漱石はただ、自分でないものの立場に立つて、自分が畫をかく事と、自分のかいた畫とを眺め、それをリディキュラスなものとして笑つてゐるのみだからである。然も主人の苦沙彌がいやに熱心に水彩畫をかいてゐる事も、その苦沙彌がアレドレア・デル・サルトの言葉と稱する「天に星辰あり地に露華あり……」を友人から聽いて、一所懸命に猫を寫生する事も、『猫』第一の中に、殆んどその中心事件のやうなものとして、描き出されてゐる。

「斷片」第七には、まだその外に、行を改めて、「トリストラム・シャンデーがギボンに忠告して佛國革命史を佛語でかくのをやめて英語で著した」といふ一句が、記録されてゐる。是は「トリストラム・シャンデー」が「ニコラス・ニッケルベ」に變へられただけで、『猫』第一の迷亭の出鱈目として用ひられる。「Aを相手にするのは三で以て二を割るが如きものだいつ迄いつても割り切れない」といふのは、「二」が「十」に變へられて、『猫』第二で、雜煮の餅を喰つた猫が、齒にくつついてどうしても離れない餅を形容する言葉として用ひられる。然もその言葉は、

迷亭が苦沙彌を批評した言葉だといふ事になつてゐる。「……出来上つた繪を柱へ立て懸けて三歩退いて眺める横から眺め堅から眺る時には逆さにして見る奇體な事にはK君の繪は逆かさにして真直にしても印象の點に於て格別の異りはない……」といふのは、別な場面に、苦沙彌先生の勘が悪い事を表現する一例として、『猫』第二に利用されてゐる。

漱石が疥癬が起つてたまらない時に、下らない事、馬鹿げた事、滑稽な事、世の中を茶にしたやうな事を空想して、その疥癬に風を入れようとする習慣を持つてゐた事は、明治三十四・五年頃——ロンドン時代の「断片」の中に、或は「疥癬玉がセリ上ると後ろから「ヤツツケロ」といふ暴れ者が兩手を出して押^原ゲテ居ル其下に「茲ガ思案ノシ處ぞ」といふ外山さんの詩體詩然たる奴がぶらさがつて待つた〜といつて居るひつくり返る逆蜻蛉をうつ其内に肋の三^原牧目邊で大きな太鼓をドン〜と叩く奴がある腹の中を弘道館の道場だと思つて居る」だの、或は「此地ノ small talks 程ツマラナイ者はない内の猫が何正子を生んだとか御隣りの犬がよく吠えるとか當然の事をさも面白さうに仰せられる犬は古往今來吠えるものに相場がきまつて居る犬にして吠えざるは玉の盃底なきが如しといふ位な者さ啞の犬なんか誰も飼ふものはありやしないそれをおやまあ、左様で御さんすかよくねー杯と仰山らしく受けるこんなことを云つて居る内にはや左様なら御機嫌よろしうの時刻が来る切角主人と學問の話を仕様と思つたつて此體裁だからだめな事

だ」だのと、書いてゐるのででも知れる。また漱石が、明治三十六年六月十四日の菅虎雄宛の手紙や、同じ年の七月三日同じ菅虎雄宛の手紙の中で示してゐるやうな、不愉快極まる生活氣分の只中にゐて、『自轉車日記』などといふやうな、妙な、自分を塵紙かなぞのやうに、くしやくしやに揉潰したものを書いてゐるのででも知れる。然も漱石は、明治三十七・八年の頃には、一方では、同じ「断片」の第二・第三などの英文で、或は“I hate you, ladies and gentlemen, I hate you one and all; I heartily hate you to the end of my life and to the last of your race”^原と云ひ、或は“You know me too well, ladies and gentlemen, you try every experiment upon me to satisfy your curiosity and seem to be anxious to know what will become of me. Well, wait and see. I will satisfy you or rather dissatisfy you for I will turn out anything other than that you expect. You presume too much, ladies and gentlemen, to make a man by artificial evolution. Nowadays people speak of atomic evolutions. Atoms may be generated by evolution. But you ought to know that I am not an atom. I am more elementary than atoms; I am not susceptible of the process of your artificial evolution. I have lost my wife in teaching her a lesson; I am losing my children in teaching a lesson to my wife and her family. I am resolved to lose everything ere I

teach them a severe lesson, except my will. It is my will that I assert and before it they shall bow. They shall bow before me as they find in me a heartless husband and a cruel father and an obdurate relative. They shall bow before me when they see their own cowardly behaviour reflected in their own minds. They will hold me as responsible for it. Silly things! Think of the cause and causality.”と言つて、手に觸れるものを片端から叩き斬つてしまひでもしうな、物凄く権幕を示すとともに、一方では、同じ「断片」の第五・第六・第七はもとより、第八・第九などに互つて、自分並びに自分の周囲をリディキュラスなものに眺め、それを滑稽として表現し、殺氣立つた自分の心持を柔らげ、竟にそれを「猫」にまで鍊り上げる事に成功するのである。

同じ「断片」の第十以下は、恐らく漱石が既に『猫』を書き、相當世間的に歡迎された後、『猫』のやうなものでなく、人情がかつた筋のある小説を書かうとして考へ得た筋なのだらうと思ふ。然もその第十も第十一も、その骨子をなすものは、技巧の攻撃であり、嘘の攻撃であり、虚榮や生意氣や已惚の攻撃であつた。その點では、「断片」第二・第三などと脈絡する。ただ此所では、彼所で殺氣立つて詰め寄つて行かれたものが、小説の形で、客観化され具體化されようとしてゐる所に、相違があるのみである。

「断片」第十二に箇條書きにされてゐるものは、最も多く、明治三十八年二月九日から十八日ごろまでに互つて書かれた、『幻影の盾』中に用ひられる。「○鏡。胡弓に寫る」といふのを初めとして、「○コンデンスド、エキスピリエンス」、それと關聯する「○十年の命を縮めて一年とし……一分の間に……」、「○川ノ向カラ舟が出テ近ゾイテ來る」、その他「○以太利亞の〜」、「○楯から抜け出す。純一無雜。夢のセオリー」、「○先祖が北ノ國ノ巨人ト戰ツテ楯ヲ得ル、巨人楯ヲ與フルキ楯の功ヲ説ク」などといふのは、すべて『幻影の盾』の中に描かれてゐる所のものである。「○反響。パロット、林檎、蜂、空、大地」といひ、「○ルイン」といひ、「○松。針。銀ノ針」といふのも、『幻影の盾』の主人公キリアムが、胡弓の音を聴きながら楯を見詰めてクララに會ふ場面の、一つの覺え書きであつたに違ひない。

この「断片」に限つた事ではないが、一般に「断片」の書き方は、「日記」の場合よりもつと簡單で、ほんの符牒のやうなものが多い。従つてこの符牒を合鍵として、漱石が自分の中の寶庫から、どんな燦爛たるものを取り出して來るかは、この符牒と漱石が作品の上に描き出したものとを比較して見るのでないと、はつきり想像する事は出來ない。例へば「幻影の盾の由來」である。漱石は「断片」では、單に「先祖が北ノ國ノ巨人ト戰ツテ楯ヲ得ル、巨人楯ヲ與フルキ楯の功ヲ説ク」とだけしか書いてゐない。然るに『幻影の盾』ではそれが、「汝が祖キリアムは此楯を

北の國の巨人に得たり。……黒雲の地を渡る日なり。北の國の巨人は雲の内より振り落されたる鬼の如くに寄せ来る。拳の如き瘤のつきたる鐵棒を片手に振り翳して骨も摧けよと打てば馬も倒れ人も倒れて、地を行く雲に血潮を含んで、鳴る風に火花をも見る。人を斬るの戦にあらず、腦を碎き胸を潰して、人といふ形を滅せざれば已まざる烈しき戦なり。……わが渡り合ひしは巨人の中の巨人なり。銅板に砂を塗れる如き顔の中に眼懸りて稻妻を射る。我を見て南方の犬尾を捲いて死ねと、かの鐵棒を腦天より下す。眼を遮らぬ空の二つに裂くる響して、鐵の瘤はわが右の肩先を滑べる。繋ぎ合せて肩を蔽へる鋼鐵の延板の、尤も外に向へるが二つに折れて肉に入る。吾がうちし太刀先は巨人の盾を斜に研つて曼と鳴るのみ。……われ巨人を切る事三度、三度目にわが太刀は鏑元より三つに折れて巨人の戴く甲の鉢金の、内側に歪むを見たり。巨人の椎を下すや四たび、四たび目に巨人の足は、血を含む泥を蹴て、木枯の天狗の杉を倒すが如く、薊の花のゆらぐ中に、落雷も恥ぢよと許り鞆と横たはる。横たはりて起きぬ間を、疾くも縫へるわが短刀の光を見よ。吾ながら又なき手柄なり。……巨人は云ふ、老牛の夕陽に吼ゆるが如き聲にて云ふ。幻影の盾を南方の豎子に付與す、珍重に護持せよと。われ盾を翳して其所以を問ふに黙して答へず。強ひて聞くと、彼兩手を揚げて北の空を指して曰く。ワルハラの國オチンの座に近く、火に溶けぬ黒鐵を、氷の如き白炎に鑄たるが幻影の盾なり。……此盾何の奇特かあると巨人に問へ

ば曰く。盾に願へ、願ふて聽かれざるなし只其身を亡ぼす事あり。人に語るな語るとき盾の靈去る。……汝盾を執つて戦に臨めば四圍の鬼神汝を呪ふことあり。呪はれて後蓋天蓋地の大歡喜に逢ふべし。只盾を傳へ受くるものに此秘密を許すと。南國の人此不祥の具を愛せずと盾を棄て、去らんとすれば、巨人手を振つて云ふ。われ今淨土ワルハラに歸る、幻影の盾を要せず。百年の後南方に赤衣の美人あるべし。其歌の此盾の面に觸るゝとき、汝の兒孫盾を抱いて抃舞するものあらんと。……巨人は薊の中に斃れて、薊の中に残れるは此盾なり」といふ、長い、奇しくも美しい、一篇の物語にまで、紡ぎ上げられる。是はアーサーの寶劍の由來にも、またバルツイファルの聖盤の由來にも見る事のない、北歐的なものと南歐的なものとを糺ひませた、新しい傳説の世界である。——同じ事は大正四年の「斷片」の中の、『硝子戸の中』の覺え書に就いても言へる。「(1)卯年」「(2)猫」「(3)犬」「(4)或女の告白」「(5)チャブドウ」……と列記してある所を見ただけでは、誰でもそれが『硝子戸の中』の第二を生み、第二十八を生み、第三・第四・第五を生み、第六・第七を生み、第九・第十を生むだらうとは、豫期する事が出來ないに違ひない。

普通の人には、自分の日記もしくはノートの中に、記憶すべき事項の要點を書き込んでしまふと、多くの場合、書いた事だけしか覚えてゐない。少し時日がたつと、それさへ綺麗に忘れてしまふ。

漱石も或は多くの事を綺麗に忘れてしまつたのかも知れないし、またある種の「断片」は、現在筆を執つて書かうとする間に、書く事を整理する爲に、箇條書にして行つたものも多かつたに違ひないが、それでも漱石は、一般的に言つて、箇箇の事象を實に驚くべき鮮やかさをもつて、はつきり覚えてゐる特徴を持つてゐたやうである。漱石は『行人』の一郎の事を、「事件の断面を驚く許り鮮やかに覚えてゐる代りに、場所の名や年月を全く忘れて仕舞ふ癖があつた。夫で彼は平氣でゐた。」と書いてゐるが、それは同時に漱石自身にあてはまる「癖」であつた。漱石は或は箇箇の事象を綺麗に忘れ去る事があつたとしても、それを思ひ出させる符牒の合鍵がありさへすれば、漱石の記憶の扉はいつでも開かれ、漱石の頭に焚きついてゐる映像は、焚きついた當時の鋭刺さをもつて、漱石の眼の前に躍り上がつて来る機巧を持つてゐたのである。それだから漱石は、「日記」を書くにも「断片」を書くにも、勿論自分の感じた事、考へた事、聞いた事、見た事を具に表現する事もないではなかつたが、多く箇條書のやうなものにして書き留めて、少しも不便を感じる事がなかつた。それだけに我我は、漱石の『日記及断片』の面白味を、十分に感じ得る爲には、簡単に書かれてゐるものの奥を覗き込んで、其所に動いてゐるさまざまなものを捕捉する、想像力を積極的に働かせる必要がある。事實、こつちの想像力を積極的に働かせさへすれば、漱石の『日記及断片』ほど面白い讀物はないと言つて可いのである。(一一・六・二二)

「書簡集」

漱石は如何なる場合でも、自分の心にもない事を書かなかつた。純粹で、正直で、正しい漱石は、常に自分が感じ自分が考へたままを書いた。漱石によつて書かれたものは、その時時の漱石を、多すぎもせず少なすぎもせず、丁度赤裸裸に表現する。従つて我我は、漱石の作品を通して、正しく漱石の内面生活を窺ひ知る事が出来るやうに、漱石の書簡を通して、漱石の内面生活を正しく窺ひ知る事が出来る。

ただ漱石の作品は、漱石の成熟した、ある時期から始まつてゐる。同時に漱石の作品は、言はば、とびとびに發表されてゐる。殊に作品は、恰もそれが一般に公表されるものであるといふ理由から、何等かの意味で作者を硬くし、餘所行きにし、窮屈にし、不自然にする。然るに書簡は、漱石の殆んど全時期に亙る、内面生活の表現である。假令ある時期の書簡は、ほんのとびとびにしか残つてゐないとは言つても、作品と作品との間のとびとびであるのに比べれば、是は正に、

漱石の全生涯に亙る、日記であると言つて可い。その上書簡は、ブライエートなものである。誰でも書簡では、遠慮氣兼ねなしに、自由に自然に、言ひたい事を言ふ。殊に日常生活に於いて、向き合つて坐つてゐて、そのまま腹の中がはつきり透いて見えるやうな、透明な相手愛してゐた漱石は、書簡で自分の腹の中の事を、些しも隠し立てする事がなかつた。假令相手に對する効はりから、何かを言はずに置いたり、もしくは相手の傾向にアンティテーゼを置く爲に、わざと反對な事を言つたりするやうな事はあつても、決して自分の利益の爲に、自分の言ふべき事を言はずに置くといふ事がなかつた。書簡ほど漱石を、漱石のままに表現してゐるものはない。

これらの書簡と書簡との間に、その時その時の漱石の作品を點綴し、當時の漱石の生活と當時の漱石の作品とを關聯させ、書簡を通して作品を解釋し、作品を通して書簡を解釋するのは、漱石の人間の理解を深める上に、必要缺くべからざる方法である。然し單獨に書簡だけを讀んで、其所から一貫した漱石を發見するのも、亦興味深い仕事たる事を失はない。ある意味から言へば、後者の方が反つて更に直接に漱石に觸れ得る方法であるとも、言ふ事が出来る。此所にこそ最も自然な、また最も自由な漱石がゐるからである。

二千通に近い漱石の書簡は、「書簡集」と「續書簡集」との、二部に分たれる。それを分つもの

は、明治四十三年八月の、修善寺に於ける漱石の大患である。無論是は便宜の爲のものに過ぎない。然し修善寺の大患は漱石に、漱石自身の言葉を借りれば、老年を意識させ、是からは老年の計に——老年の事業にとりかかるのだと、覺悟させたものである。さうしてその意識とその覺悟とは、その後の漱石の生活と漱石の藝術とに、まさしく一つの決定的な方向を與へてゐる。修善寺の大患を機として漱石の書簡を二分する事は、それほど機械的な事でもないと思ふ。

ただ不思議に見える事は、現在發見されてゐるもの數からいふと、修善寺の大患の前と後とで、漱石が殆んど同じ位の數の、書簡を書いてゐるといふ事である。「書簡集」には、明治二十二年五月から明治四十三年八月まで、二十二年間の書簡が、總計千十四通收められる。明治四十三年九月に始まり大正五年十一月に終る、「續書簡集」七年間の書簡の總計は、九百四十七通である。その差は百に充たない。

もつとも是は、考へて見れば、格別不思議な事でもなかつた。漱石の作家としての生活は、明治三十八年に始まつて大正五年に終り、明治四十三年は、漱石の、その作家としての十二年間の生活の、凡そ半ばに當る年だからである。さうしてその十二年間こそ、漱石に最も多く書簡を書かせ、また漱石の書いた書簡を最も多く丁寧に保存させた期間だつたからである。——明治二十二年から明治三十七年まで、十六年間の漱石の書簡は、通計しても二百通を大して超える事がな

い。然し漱石が『猫』を書き出した明治三十八年となると、その一年だけで漱石は、既に百十七通の書簡を書いてゐる。明治三十九年、明治四十年には、その數二百通を超えてゐる。その後、明治四十一年から大正五年に至るまで、漱石は毎年のやうに、少くとも百通内外、多ければ二百通内外の書簡を書いてゐるのである。明治三十七年までの漱石は、書簡のやりとりをすると言つても、非常に狭い交際圏をしか持つてゐなかつた。その圏内の人達でも、漱石に對して特別な愛情か特別な敬意を持つてゐる者でもなければ、漱石の書簡を丁寧^{ていねい}に保存して置かうなどと考へる事がなかつた。漱石は當時恐らくもつと多くの書簡を書いたに違ひない。然しそれらのものは、當時漱石が世間的に無名であつた爲に、多く無造作に取り扱はれて、竟に散佚してしまつた。

その點で後世が先づ感謝しなければならないのは、正岡子規である。子規は漱石の書簡を、丁寧に保存してゐた。丁寧に保存しないものでも、子規はそれを丹念に、自分の日記『筆まかせ』の中に書き上げてゐた。子規のかういふ心遣ひがなかつたら、明治二十二年五月十三日から明治二十六年二月二十日までの二十七通、もしくは明治二十七年三月十二日から明治三十年十二月十日までの二十六通の、當時の漱石の内面生活を知るのに最も重要な書簡は、全部我々の所有とはなり得なかつた筈である。殊に明治二十二年から明治二十六年までの二十七通は、外に漱石の書

簡が一通もないのだから、特に珍重に値ひする。凡そこの時期に、後の漱石が持つてゐたもの一切が、すつかり芽を吹いてゐるからである。

子規によれば、子規が漱石と口を利き出したのは、明治二十二年の正月の事だつたといふ。さうして子規が略血して、自ら子規と號するに至つたのは、同じ年の五月十日の夜の事である。『書簡集』の冒頭を飾る、明治二十二年五月十三日の漱石の書簡は、恐らく漱石が學校で子規略血の事を聞き、歸途本郷眞砂町の常盤會寄宿舎に、初めて子規の病氣を見舞つた時の書簡だらうと思ふ。漱石は其所から子規の爲に、子規のかかつた醫者の家に行き、その醫者の「不注意不親切」に憤慨したものらしく、あんな醫者はやめて、もつとちゃんとした醫者にかかるが可いと言ひ、略血必しもグイタルな事ではないのだから、「平生の客氣を一掃して」「小にしては御母堂の爲め大にしては國家の爲め」十分自愛してもらひたいと、懇切に子規を激勵し且つ忠告してゐる。是は或は漱石が子規に送つた、最初の書簡ではなかつたかと思はれる。少くとも子規は、是を最初として、漱石の書簡を、一一丁寧に保存してゐたのである。

漱石が、文章をもつて身を立てようと思つたのは、相當古い事だつたらしい。既に明治二十二年九月の『木屑録』に、自分は子供の時分唐宋諸家の詩文を愛讀して、文章を以つて身を立てよ

うと志したといふ事が書いてある。談話筆記『私の處女作』によれば、それは漱石の十五六歳の時分の事だつたといふ。然し漱石の長兄は「文學は職業にやならない、アツコンブリツシメントに過ぎないものだ」と言つて、切に文學に携はる事を止めたので、漱石は一旦それを思ひとまつた。然しそれにしても何か趣味のある職業に携はりたいといふので、漱石は一度は建築科に這入る決心をした。然し豫備門の一級（現在の制度で言へば、高等學校一年）になり、愈専門をきめるといふ段になつて、現在の日本ではいくら偉い建築家になつても、セント・ポールズのやうな大寺院を建てる譯には行かない、そんなものよりも文學の方がよつほど生命があるといふ友人米山保三郎の忠告に聽いて、漱石は再び文學を、さうして英文學をもつて身を立てる事に決定した。然しさういふ決心をつけて以來、漱石は英文で何か大著述を試みて西洋人を驚ろかしてやらうといふ計畫は立てはしたが、日本文で何かを書いて文壇に雄飛しようなどといふ氣はなくなつたらしく、少くともそれまでに苦勞して積み上げた漢詩文方面の修業は一切放擲してしまひ、その方面での野心は棄てて、只管英語と英文學との世界に深入りして行つたものやうである。それが子規と相知るに及んで、再び芽を吹き出した。然しそれは、漱石を英語と英文學との世界から追ひ出すほどの勢力はなく、假令漱石が漢文を書き、漢詩を作り、俳句を詠む事があるにしても、すべて自分の英文學者としての立場と修業とを崩さない範圍内で、常にそれが試みられた。勿論

英文で何か大著述を試みて西洋人を驚ろかしてやらうなどといふ漱石の夢は、年がたつにつれて薄らいで行つた事は、既に明治二十四年八月三日子規に宛てて、「我等が洋文學の隊長とならん事思ひも寄らぬ事と先頃中より已れと已れの貫目が分り候得ば以後は可成大兄の御勸めにまかせ邦文學研究可仕候さはれ成童の頃は天下の一人と自ら思ひ上り三身の己れを欺いて今迄知らず打ち過ぎけるよと思へば自ら面目なき迄に愧入候」と書いてゐるのでも想像する事が出来る。それでも漱石がなほ子規のやうに、文章ばかりを書いて暮らすといふやうな氣持にはならず、只管英語と英文學との世界から、自分の榮養を吸収する事に専念してゐる事は、明治二十二年十二月三十一日並に明治二十三年一月子規に宛てた書簡によつて、明白に知る事が出来ると思ふ。

勿論若い時から自分の中に、色々言ひたい事を持つてゐた漱石の事である。「洋文學の隊長」となる事は「思ひも寄らぬ事」と氣がついてから、寧ろ純粹に文學者としての生活を送りたいといふ希望が、恐らく屢漱石を襲つたに違ひない事は、十分想像され得る所である。明治三十九年二月十五日森田草平宛の書簡の中で、漱石は「僕が二十三四にかきかけた小説が十五六枚残つて居た。よんで見ると馬鹿氣てまづいものだ。あまり耻かしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた。」と書いてゐるが、かういふ、小説を書いてみるといふ事なども、あながち子規から刺

激されたといふのみでなく、もつと深い所に、漱石にさういふ希望があつた事を、我我に示唆するものではないかと思ふ。そのみではない。漱石は、ある時期にはその問題を、可也眞面目に考へ詰めたと見えて、明治三十年四月二十三日子規に宛て、かう書いてさへもゐる。——「小生身分色々御配慮ありがたく奉謝候實は教師は近頃厭になり居候へどもさらば翻譯官はといふと果してやつて除るといふ程の自信と勇氣無之第一法律上の言語も知らぬ我々が外務の翻譯官と突然變化した處で英文の電報一つ満足には書けまいと思ふなり尤も一二年見習の上は多少地のある事なれば何とか故魔化しもきくべけれど差當りては到底高等官處か屬官の價値もあるまじと存候實は去年十月頃教師をやめたいが好分別はなきやと中根に相談致し候處外務の翻譯官に依頼し置きたり（多分小村なるべし）と申し越したり尊叔が課長なれば非常の好都合なれど自信なき事に周旋を頼み後に至り君及び加藤氏に迷惑がかゝりては氣の毒故其職掌事務等詳細の事相分り是ならば隨分君の面目を損する事なく遣つて行けるといふ見込がつく迄は先づ差し控た方可然と愚考致候／＼……」——「借小生の目的御尋ね故御明答申上たけれど實は當人自らが所謂わが身でわが身がわからない位故到底山川流に説明する譯には參り兼候へども單に希望を臚列するならば教師をやめて單に文學的の生活を送りたきなり換言すれば文學三昧にて消光したきなり月々五六十の收入あれば今にも東京へ歸りて勝手な風流を仕る覺悟なれど遊んで居つて金が懷中に舞ひ込むとい

ふ譯にもゆかねば衣食丈は原小々堪忍辛防して何かの種を探し（但し教師を除く）其餘暇を以て自由な書を読み自由な事を言ひ自由な事を書か原ん事を希望致候然るに小生は不具の人間なれば行政官事務官扱は到底して呉れる人もなくあつても二三月で愛想を盡かすにきまつて居れば大抵な口では間に合はず因て先頃郵便にて今回若し帝國圖書館とか何とかいふものが出来る様子だから若し出来たらば其方へ（も）周旋して呉れまいかと中根へ申てやり候處圖書館の方は牧野に面會色々聞た處拾も松方内閣成立の始めでどうなるやら夢の様な話なりとの返答中根より到着致候まゝ其話しは今日迄失ナリに御座候」

漱石は『文學論』の序の中で、「春秋は十を連ねて吾前にあり。學ぶに餘暇なしとは云はず。學んで徹せざるを恨みとするのみ。卒業せる余の腦裏には何となく英文學に欺かれたるが如き不安の念あり。余は此の不安の念を抱いて西の方松山に赴き、一年にして、又西の方熊本にゆけり。熊本に住する事數年未だ此不安の念の消えぬうち倫敦に來れり。」と書いてゐる。この手紙で漱石が教師をやめて「文學三昧にて消光した」と希望してゐるのは、一面その「何となく英文學に欺かれたるが如き不安の念」が、與つて力あつたものかとも思はれる。然し、假令さういふ理由が一面にあつたとしても、既に漱石が「勝手な風流」をして、「自由な書を読み自由な事を言ひ自由な事を書」きたいのだと明言してゐる以上、漱石の中に表現を迫るものが磅礴して、漱石に

積極的に「文學三昧にて消光」する事を希望せしめたのである事は、疑ひを容れない。——然し當時の漱石の希望は、竟に容れられなかつた。さうして漱石は、そのまま第五高等學校の教授として止まつた。

然し、當時もし漱石の希望が容れられて、漱石が或は外務省の翻譯官となり、或は上野の帝國圖書館の館員となつて、「勝手な風流」をして暮したと假定して、果してその漱石が今日のやうな漱石であり得たかどうかは、頗る疑問であるといふ氣がする。勿論漱石のやうな人間は、何所に置いて置いても、いつかは必ずその光芒を放つたには違ひない。然しもし漱石が外務省に這入り圖書館に這入つてゐたとすれば、漱石は恐らくロンドンにも留學せず、大學にも勤めず、さうする事によつて獲られた特殊の經驗を、竟に經驗しないで済んだに違ひない。その上當時の漱石は、自分でも「わが身でわが身がわからない」と言つてゐるやうに、假令「自由な書を読み自由な事を言ひ自由な事を書き」きたいとは言つてゐても、その書く事が果して何であつたかは——批評の形で發表されるか、小説の形で發表されるか、隨筆の形で發表されるかは、或は漱石自身にも、それほどはつきりしてゐなかつたのではないかとも思はれるからである。

勿論漱石の人生に對する態度は、相當早くからはつきり確立してゐたやうである。是は、「道

草』の中に出て來るやうな養父母や、兄や嫂や姉や義兄などの周圍に取り巻かれつつ、持つて生れた自分の純粹と正直と正しさとを護り通す爲には、漱石にとつて必要缺くべからざる事であつたには違ひないが、漱石は既に明治二十四年十一月十日子規に宛てて、「僕前年も厭世主義今年もまだ厭世主義なり嘗て思ふ様世に立つには世を容るゝの量あるか世に容れられるの才なかるべからず御存の如く僕は世を容るゝの量なく世に容れらるゝの才にも乏しけれどどうかこうか食ふ位の才はあるなりどうかこうか食ふの才を頼んで此浮世にあるは説明すべからざる一道の愛氣隠々として或人と我とを結び付るが爲なり此或人の數に定限なく又此愛氣に定限なく雙方共に増加するの見込あり此増加につれて漸々慈憐主義に傾かんとす然し大體より差引勘定を立つれば矢張り厭世主義なり唯極端ならざるのみ」と書いてゐる。是は、凡その傾向から言へば、後年の漱石によつて實踐に移されて行つたものと、同様な考へ方であつた。同時に漱石は明治二十四年十一月七日、同じ子規に宛てて「氣節」と「見識」とを論じ、「御存じの如く人間の能力は智、情、意の三者に外ならず氣節は人間能力の一部なる以上は三者の中何にか屬せざるべからず第一氣節とは情に屬するやと云ふに決して然らず一時の怒りに激して人を痛罵す是氣節なりや余は氣節とは思はざるなり年來の怒りに激して日常人を痛罵す是氣節なりや是も亦氣節とは思はれずさらば一時の感情にもせよ年來の感情にもせよ感情を以て爲したる行爲は氣節と云ふ可からず氣節既に感情

に屬せずんば之を意志の作用とせんか打つ可きの道理なく打ち度の感情なく妄りに鐵拳を擧て人に加ふ是れ氣節なりや同じく打つ可きの道理なく又打ち度の念慮なきに日常鐵拳を擧げて人に加ふ亦氣節にあらず去らば一時の意志にせよ年來の意志にせよ意志より來るもの氣節なりと云ふべからず意志に屬せず感情に屬せずんば氣節の屬する處は智の範圍内にあらずんばあらず親には孝を盡すべき理ありと心得て孝を盡す是氣節なり君に忠を致すべき道存すとて忠を致す是氣節なり人を罵るべきの理あり故に罵る人を打つべきの理あり故に打つ是氣節なり然れども一時の理を行ふ是れ一時の氣節を表はすのみ一小見識を抱いて之を行ふ是れ一小見識の氣節のみ一時の氣節一小見識の氣節有もよし無くとも差支へなし吾人の欲する所は絶大見識を抱懷して人生の前後を貫き通ずるにあり書物にても一頁には一頁の主意あり文字あり一篇には一篇の主意あり文字あり一卷には一卷を貫くの主意あり文字なかる可らず一頁の主意一篇の文字は一時の氣節一小見識の氣節のみ人生五十年の浩軼人生天大の主意決して一章一篇の中に存せざるなり故に僕謂ふ氣節は情に屬せず意に屬せずして智に屬す而して大氣節は人生を掩ふ大見識に屬すと」と言つてゐる。是も亦、大體から言へば、後年の漱石によつて把持されてゐた意見と、同一である。のみならず漱石は、明治二十二年十二月三十一日、同じく子規に宛てて「文章」を論じ、「總て文章の妙は胸中の思想を飾り氣なく平たく造作なく直叙スルガ妙味と被存候……故に小生の考にては文壇に立

て赤幟を萬世に翻さんと欲せば首として思想を涵養せざるべからず思想中に熱し腹に滿ちたる上は直に筆を揮つて其思ふ所を敘し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず文字の美章句の法杯は次の次の其次に考ふべき事なり Idea itself の價值を増減スル程の事は無之様に被存候」と言ひ、更に簡を改めては、「……此 idea ヲ涵養スルニハ culture ガ肝要ニテ次ハ己レノ經驗ナリ去レ己レノ經驗ノ區域ノミニテハ Idea ヲ得ル區域狹キ故 culture ノ方ガ要用ナリト申スナリ／然ラバ Culture トハ如何ナル者ト云フニ knowing the ideas which have been said and known in the world ト小生ハ定義ヲ下ス積リナリ然ラバ culture ヲ得ル方ハト云フニ讀書ヲ捨テ、他ノ方ナキハ貴君モ御左祖ナルベシ故ニ讀書ヲシ玉ヘト勸ムルナリ」とも言つてゐる。是亦後年の漱石の考へてゐた所と、大綱に於いて變りがない。

この方針でこの方向に進むとすれば、さうして漱石自らが「自由な書を読み自由な事を言ひ自由な事を書」きたいと言つてゐる以上、明治三十年の漱石に、言ひたい事・書きたい事が腹の中に一杯に溜つてゐた事には、些しも疑ひがない。然し明治三十年の漱石が明治三十八年の漱石――『猫』を書き出した漱石になる爲には、どうしても一度ロンドンに留學し、ロンドンから歸つてから、大學に勤める必要があつたやうな氣がするのである。

西洋の作家の書簡集を讀んで、その中の最も光彩ある部分と感ぜられるものは、その作家が自分の戀人、もしくは自分の愛する夫人に與へた、ラヴ・レターである。然し漱石はラヴ・レターを一つも書いてゐない。もしさういふ言葉を用ひる事が許されるなら、漱石ほど澤山弟子たちからラヴ・レターをもらひ、また漱石ほど澤山弟子たちにラヴ・レターを書いた者は、類がないと言つて可いかも知れない。例へば漱石が、明治三十八年九月十一日中川芳太郎を通して、間接に鈴木三重吉に與へた書簡のやうなのは、その代表的なものと言つて可いであらう。然し不思議な事に漱石は、女に一つもラヴ・レターを書いてゐないのである。

是は假令漱石に戀人があつたとしても、その人にラヴ・レターを書いて自分の意志を通じようとするほど、漱石自身大膽になれなかつたせゐもあつたに違ひないし、特に當時の教育がさういふ舉に出でる事のみならず、一般に異性を問題にするといふ事を、男子の威嚴に關する事でもあるやうに考へさせる、特別な考へ方を養成してゐたせゐでもあつたには違ひないが、然し如何なる場合にもセンチメンタルになる事を嫌つた漱石は、假令内に甘い感情を持つてゐても、それを相手に、普通の甘い言葉で表現する事を、極端に嫌つたのだから、如何なる女に對しても、寧ろ相手が女なるが故に、漱石は特にラヴ・レターになるやうな氣味合ひの書簡を、一切書く事がなかつた爲ではないかと思はれる。——然しただ一つの例外は、漱石がロンドン留學中、その

夫人に與へた書簡である。

勿論此所でも漱石は、普通の若い男が普通の若い女にやるやうな、甘つたるいラヴ・レターは書いてゐない。然し漱石は此所で、ほんの何氣ない言葉のうちにも、亦普通に讀めば、何か悪口を言つたり、からかつたりしてゐるとしか見えない言葉のうちにも、漱石の夫人を思ふ情合の濃やかさが、脈脈として搖めき出てゐる、多くの書簡を書いてゐるのである。例へば「其許ハ齒ヲ抜キテ入齒ヲナサルベク候只今ノ儘ニテハ餘リ見苦ク候ノ頭ノハゲルノモ毎々申通一種ノ病氣ニ違ナク候必ズ醫者ニ見テ御貰可被成候人ノ言フコト善ヒ加減ニ聞テハイケマセン」(三三・九・二七)といふのでも、「髮は丸髻銀杏返杯に結ばざる方よろしく洗髮にして御置可被成候」(三三・一〇・八)といふのでも、「其許懷妊中善々身體ヲ大事ニ可被成候筆モ隨分氣ヲ付ケテ御養育可被成候妊娠中ハ感情ヲ刺激スル様ナ小説杯ハ御止メ可被成候可成ノンキに御暮シ可被成候ノ入齒ノ事御實行可被成候丸髻杯ニハ結ハヌガヨロシク候洗髮可然候」(三三・一〇・二二)といふのも、いかに漱石がまざまざと具體的に夫人を感じ、夫人の事を考へ續けてゐたかが、はつきり分かると思ふ。普通の亭主なら、齒を抜いて入齒をしるの、丸髻だの銀杏返には結ふなだの、洗髮にして置けだの、そんな、夫人を眼の前に据ゑてゐて言ふやうな事を、言ひはしない。然も是はすべて漱石の航海中の書簡である。

ロンドンに著いてからでも同様であつた。漱石は或は「其後は如何御暮し被成候や朝夕案じ暮し居候先以て皆々様御丈夫の事と存候其許も御壯健にて今頃は定めし御安産の事と存候此方も無事にて日々勉強に餘念なく候御懸念あるまじく候小兒出産前後は取分け御注意可然と存候」——「先年熊本にて筆と御寫し被成候寫眞一枚序の節御送り可被下候厚き板紙の間に挟み二枚紙にてくゞり郵便に御投じ可被下候當地は十圓位出さねば寫眞もとる事出来ず候故小生は當分送りがたく候」——「筆は定めし成人致し候事と存候時々は模様御知らせ可被下候少し歩行く様になると危^原儉なものに候けがなき様御注意可被下候」——「産後の経過よろしく丈夫になり候へば入齒をなさい金がなければ御父ツさんから借りてもなさい歸つてから返して上ます髪杯は結はぬ方が毛の爲め腦の爲よろしいオードキニンといふ水がある是はふけのたまらない藥だやつて御覽はげがとまるかも知れない」(三四・一・二二)と書き、或はベルリンにゐる藤代禎輔に宛てては、「所謂難關説は承はつた時は左程でもなかつたが昨今は大に名説だと思つて感服仕るね第一無精極まる僕が妻の處へ丈は一月に一返位便りをするから奇特だらうあんな御多角顔でも歸たら少々大事にしてやらうと思ふよ」(三四・二・五)と書き、更にまた夫人に宛てて、「一國を出てから半年許りになる少々厭氣になつて歸り度なつた御前の手紙は二本來た許りだ其後の消息は分らない多分無事だらうと思つて居る御前でも子供でも死んだら電報位は來るだらうと思つて居る夫だから便

りのないのは左程心配にはならない然し甚だ淋い……御前は子供を産んだらう子供も御前も丈夫かな少々そこが心配だから手紙のくるのを待つて居るが何とも云つてこない中根の御父ツさんも御母さんも忙がしいんだらう——「段々日が立つと國の事を色々思ふおれの様な不人情なものでも頻りに御前が戀しい是丈は奇特と云つて褒めて貰はなければならぬ夫から筆の事だの中根の御父ツさんや御母さんの事だの御梅さんや倫さんの事だの狩野だの正岡だの菅だの山川だの親類や友達のことなんかを無暗に考へる其癖あまり手紙はかゝない」(三四・二・二〇)と書き、或は「其後國から便があるかと思つても一向ない二月二日に横濱を出た「リオヂヤ子イロ」と云ふ船が桑港沖で沈没をしたから其中におれに當た書面もありはせぬかと思つて心掛りだ御前は産をしたのか子供は男か女か兩方共丈夫なのかどうもさつぱり分らん遠國に居ると中々心配なものだ自分で書けなければ中根の御父さんか誰かに書て貰ふが好い夫が出来なければ土屋でも湯淺でも頼むが好い」(三四・三・八)と書いてゐる。漱石の心は、日本に残した妻子の上に通つて、只管その安否を氣遣つてゐる。意地つ張りでもあつた漱石が、「甚だ淋い」と言ひ「頻りに御前が戀しい」と言ふのは、よくせきの事である。漱石は恐らく夫人からの便りを、たぐり寄せるやうに待ち暮してゐたに違ひない。

然し夫人からは、漱石のその心を慰めて餘りある程には、便りが來なかつた。夫人は或は二人

の子供を抱へて、日日用に追はれてゐたのかも知れない。それとも女の筆不精から、書かうと思つてゐても、つい一日一日と延ばして、結局はするべつたりになつて仕舞ふといふやうな事だつたのかも知れない。それとも例へば、明治三十四年五月八日の、「久々で寫眞を以て拜顔の榮を得たが不相變御兩人とも滑稽な顔をして居るには感服の至だ少々耻かしい様な心持がしたが先づ御ふた方の御肖像をストローヴの上へ飾つて置たと下宿の神さんと妹が掃除に来て大變御世辭を云つてほめた大變可愛らしい御嬢さんと奥さんと云つたから何日本ぢやこんなのは皆御多福の部類に入れて仕舞んで美しいのはもつと澤山あるのさと云つてつまらない處で愛國的氣箴を吐いてやつた筆の顔杯は中々ひょうきんなものだね此速力で滑稽的方面に變化されてはたまらない」といふやうな、漱石がはめを外して喜んでゐる書簡を、夫人の方では、自分を馬鹿にしてもゐるやうに誤解して、怒つて、便りをする氣にならなかつたものかも知れない。ともかく夫人は碌に便りをしなかつたのである。然も夫人はそれを、格別の事とも感じないで、それやこれやで音信を忘れてゐたといふ意味の事を、漱石の所へ書いてやつたものらしい。明治三十五年二月二日漱石は夫人に、「其許の手紙にはそれやこれやにて音信を忘れたり云々とあれど「それやこれや」とは何の言譯やら頓と合點不參候其許はとまり掛にでも川住へ看病にでも被參候や又川住殿死後手傳の爲毎日同家へ止宿被致居候や去らずば二週間に一返の端書位かけぬひまは有之間敷と

存候冬着の仕度とて朝から寐るまでかゝる譯には有之まじと存候元來留守中朝は何時頃起きて夜は何時頃寐らるゝや去年つかはし候二週間に一返位端書にて安否を通信せよと申つかはしたる書狀(端書)を読みたるにや讀まぬにや此方より右の端書を出したるは去年九月二十二日なれば十月末にはつきし筈なり而して其許の最近の手紙は十二月十三日附なれば此方の手紙到着の日より凡そ一月半ばかり捨置たるなり又其以前とても二月許り音信なければつまり前後を通じて四月許此方へ一片の音信もせざるなりそれで「それやこれや」位な言譯でよしと思ふや又多忙其他にて音信を繁くする事出来ずは何故始めより斷はり置かざるや左すれば此方にては心配なく一年でも二年でも安心して過すべきに、去りとしては餘り愚かなる事なりよく考へよく思ふて口をきくべし又事をなすべし以來ちと氣をつけるがよろしい」と書いた。恐らくそれに對する夫人の返事が、今度はずぐ来たものであらう。それとも是は二月二日のそれと入れ違ひになつたものかも知れないが、ともかく明治三十五年三月十八日漱石は再び夫人に、「此方よりも書面を出さないと云ふ苦狀だが己は今迄返事を出さなかつた事はない又急がしいから度々はかけぬと先最初から斷つてある斷つて無沙汰をするのと無斷で無沙汰をするのとは大變違ふ／心配になるから度々端書で音信をせよと云ふのと疑るのと一所にされてはたまらないよく落付て手紙を見るがよい女の脳髓は事理がわからない様に出来て居るなら仕様がな／おれの事を世間で色々と言ふつてどんな事を

言つて居るのか、おれも御前の信用してくれる程の君子でもないから何をして居るか實は分らぬのさ世間の奴が何かいふなら言はせて置くがよろしい——倫敦では日本人が大分居るが少しも交際をしない會杯へも出た事がない土井とも近頃は減多に遇はないたつた一人で氣樂でよろしい世間の人間共がおれの事を何とかいひ度ても己が何をして居るか知つて居る者はない 彼等はどこから材料を得てそんな事をいふか聞て御覽」と書いた。

漱石のラヴは——漱石が遠いロンドンにゐて、いかに自分達の事に心を遣つてゐるかは——夫人には十分理會が出来なかつた。漱石は、相手に自分の心持が通じないのみならず、反つて逆捻ぢを喰はされたやうな貌になつて、恐らく情ない氣がしたに違ひないと思はれる。勿論その後も漱石は、四月に二度、五月に一度、七月に一度、九月に一度と、その年の十二月五日ロンドンを出發するまでのうちに、都合五度の便りを書き、その中の一つで夫人の朝寐を戒めてはゐるが、然し別に夫人の返事に對して懐いた不快をいつまでも根に持つてゐるといふやうな事はなく、假令前年度のやうな濃やかさではないまでも、やはり濃やかな心遣ひを滲ませた便りを書いてゐる。然しその五度目の便りは、「近來何となく氣分鬱陶敷書見も碌々出來ず心外に候生を天地の間に享けて此一生をなす事もなく送り候様の腦になりはせぬかと自ら疑懼致居候然しわが事は案じるに及ばず御身及び二女を大切に御加養可被成候」といふ、悲しい便りであつた。——漱石はロンドン

ドンの下宿に立て籠つて、過度に勉強した結果、到頭神經衰弱になつたのである。勿論是には、自然と交渉の少ない、牢獄のやうな家の中に住んで、洋服を着て、洋食を喰つて、英語計りを使つて、切り詰めた暮しをして、絶えず緊張をつづけて、愛する者も愛せられる者もゐない、素直たる漱石のロンドンの生活そのものが、興つて力あつた事は、言ふまでもない。

同時に漱石がロンドンに來て経験したものは、西洋と日本との、もしくは西洋と東洋との對立・矛盾の問題であつた。是は既に前にも屢觸れた所である。

元來漱石は、十七八の頃からは、精神的雰圍氣としては、西洋の文化の中で育つた。明治二十四年八月三日子規宛の書簡の中で、漱石は「鷗外の作ほめ候とて圖らずも大兄の怒りを惹き申譯も無之是も小子嗜好の劣等なる故と只管慚愧致居候元來同人の作は僅かに二短篇を見たる迄にて全體を窺ふ事かたく候得共當世の文人中には先づ一角ある者と存居候ひし試みに彼が作を評し候はんに結構を泰西に得思想を其學問に得行文は漢文に胚胎して和俗を混淆したる者と存候右等の諸分子相聚つて小子の目には一種沈鬱奇雅の特色ある様に思はれ候尤も人の嗜好は行き掛りの教育にて（假令ひ文學中にも）種々なる者故己れは公平の批評と存候ても他人には極めて偏頗な議論に見ゆる者に候得ば小生自身は洋書に心醉致候心持ちはなくとも大兄より見れば左様に見

ゆるも御尤もの事に御座候全體あの時君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候位然し退いて考ふれば是前にも云へる如く元來の嗜好は同じきも從來學問の行き掛りにてかゝる場合に立ち到り候事と存じ夫よりは可成博覽をつとめ偏僻に陥ざらん様に心掛居候其上日本人が自國の文學の價值を知らぬと申すも日本好きの君に面目なきのみならず日本が夫程好き者のあるを打ち棄てゝわざ／＼洋書にうつゝをぬかし候事馬鹿々々敷限りに候のみならず我等が洋文學の隊長とならん事思ひも寄らぬ事と先頃中より己れと己れの貫目が分り候得ば以後は可成大兄の御勸めにまかせ邦文學研究可仕候」と言つてゐるが、さうして漱石は恐らくこの時以來、特に日本の文學を研究して見ようとする氣になつたには違ひないが、然し事實は漱石の榮養となり、漱石を大きく育て上げたものは、日本の文化ではなくて、西洋の文化であつた。それは同じ年の十一月七日同じ子規に與へて、漱石自身「小生不肖と雖亦人生に就て一個の定見なきにあらず此年頃日頃詩を誦し書を讀むも讀むに従ひ誦するに従つて此定見の自然と發達して長大になるが爲めのみ徒らに彫琢の末技に拘原して一字一句の是非を論ずるは愉快なきにあらず然れども遂に小生が心を満足せしむるに足らざるなり……君此書を読んで自ら思へらく日本男子の區域外に放逐せられて饑饉くなきの蠻夷と伍するに至らざるを喜ぶなりと然れども君の目して蠻夷となすもの饑饉くなきの輩となすもの實に余に誨ゆるに人生の大思想を以てせり僕をして若し一點の節操あらしめば其節操の一

半は駄舌の書中より脱化し來つて余が腦中にあり此腦中にあるの秤量を以て此書の貫目をはかるに其輕き事秋毫の如し」と言つてゐるのである。そのみではない。明治四十三年一月五日漱石が朝日の文藝欄で發表した『東洋美術圖譜』の批評に於いて、漱石は「余が現在の頭を支配し余が將來の仕事に影響するものは残念ながら、わが祖先のもたらした過去でなくつて、却て異人種の海に向ふから持つて來てくれた思想である。一日余は余の書齋に坐つて、四方に竝べてある書棚を見渡して、其中に詰まつてゐる金文字の名前が悉く西洋語であるのに氣が付いて驚いた事がある。今迄は此五彩の眩ゆうちに身を置いて、少しは得意であつたが、氣が付いて見ると、是等は皆異國産の思想を青く綴ちたり赤く綴ちたりしたものゝみである。單に所有と云ふ點から云へば聊か富といふ念も起るが、それは親の遺産を受け繼いだ富ではなくつて、他人の家へ養子に行つて、知らぬものから得た財産である。自分に利用するのは養子の權利かも知れないが、こんなものの御蔭を蒙るのは一人前の男としては氣が利かな過ぎると思ふと、有り餘る本を四方に積みながら非常に意氣地のない心持がした。」とさへも言つてゐるのである。

勿論この事は、漱石が西洋の文化に心酔し盲従してゐたといふ事を意味しない。反對に漱石は、常に西洋の思想に接觸し、それから刺激を受けながら、捨てべきは捨て取るべきは取り、一一自分の見識によつて自分のものに「脱化」させてゐるのである。然し假令漱石が漱石自身の見識に

よつてそれらを自分のものに「脱化」させてゐるとは言つても、ともかく漱石を刺激し漱石を裨益するものが、日本の古來の思想ではなくて西洋の思想であつた以上、漱石が西洋の思想に負ふ所大であつたといふ事は、言を俟たない。いくら漱石がその事を「残念」に思ひ「意氣地のない」事に思つたとしても、その事實は承認しない譯に行かないのである。

然も漱石がロンドンに留學して、先づ沁沁と感じた事は、東洋と西洋との對立もしくは矛盾といふ事であつた。自分が東洋人、もしくは日本人であるといふ事であつた。自分が西洋から榮養をとるのは可い。然し西洋から榮養をとつて十分であり得る爲には、一往は自分を西洋の中に入れてしまはなければならぬ。然し自分が東洋人、もしくは日本人である以上、自分を一往西洋の中に入れてしまふ事は、到底不可能である。日本人と西洋人との間には、過去の因縁によつて、どうしても一致する事の出来ない、空隙がある。その空隙を充たす爲には、自分が西洋人になり切つてしまふか、向うが日本人になり切つてしまふかしなければならぬ。それが到底不可能だといふのである。

結局この際我我の採るべき途は、我我は我我の過去の因縁の一切を擧げて、彼等は彼等の因縁の一切を擧げて、各忠實に且つ精到に我我自身の心理の中に深入りし、其所で發見したものを解剖して、忠實に且つ精到に報告するといふ事である。さうしてその報告の集積を、更に科學的に

検討し、科學的に分析し、科學的に分類し、且つ科學的に綜合するといふ事である。日本の文學やイギリスの文學が成立するとともに、その基礎の上にそれらのものを包括した文學、世界の文學が成立する事の可能は、この途を措いて外に途がない。

この思索の上に打ち立てられようとしたものが、漱石の「文學論」であつた。「文學論」の計畫とともに、漱石は、西洋を謂はれなく輕蔑する事なしに、正しく西洋を認識しつつ、西洋を乗り越える事が出来た。漱石は自由となつた。漱石は、自分が自分に忠實である限り、例へば英文學に關する本國の學者の説といへども、毫も恐るるに足りないといふ立場に立つ事が出来た。この立場に立つ以上、日本人は日本人としての立場を毫も曲げる事なく、世界的な立場に於いてする仕事に参加する、十分な權利を持ち得るのである。

然も漱石は、日常生活に於いては、さうして趣味生活に於いては、決然として日本人であつた。明治三十三年九月十九日、船に乗つてからまだ二週開立つか立たないかに、早くも「唐人と洋食と西洋の風呂と西洋の便所にて窮箱千萬一向面白からず、早く茶漬と蕎麥が食度候。」と、日本に言つてよこした漱石は、ロンドンに來ても到底ロンドンに馴染む事が出来ず、或は「只天氣のわるきには閉口晴天は着後數へる程しか無之しかも日本晴と云ふ様な透きとほる様な空は到底見事困難に候もし霧起るとあれば日中にも暗夜同然ガスをつけ用を足し候不愉快此上もなく候」

(三三三・一一二・二六)だの、「當地冬の季候極めてあしく霧ふかきときは濛々として月夜よりもくらく不愉快千萬に候はやく日本に歸りて光風霽月と青天白日を見たく候」(三四・一・一二)だの、「早く日本に歸りたい」(三四・三・八)だの、「僕の趣味は頗る東洋的發句的だから倫敦^取杯にはむかない支那へでも洋行してフカの鱒か何かをどうも乙だ杯と言ひながら賞翫して見度い」(三四・九・一二)だの、「矢張日本の方すみよき心地爲致候」(三五・四・一三)だの、「當地には櫻といふものなく春になつても物足らぬ心地に候且つ大抵は無風流なる事物と人間のみにて雅と申す趣も無之文明がかくの如きものならば野蠻の方が却つて面白く候鐵道の音流^取車の烟馬車の響腦病杯ある人は一日も倫敦^取には住みがたかるべきかと思はれ候日本に歸りての第一の樂みは蕎麥を食ひ日本米を食ひ日本服をきて日のあたる椽側に寐ころんで庭でも見る是が願に候夫から野原へ出て蝶々やげん／＼を見るのが樂に候」(三五・四・一七)だの、「行くから歸るまで、漱石は日本の風土を戀ひ、日本の生活を慕ひ續けた。漱石は思想的には西洋を乗り超えたが、少くとも日本人としての自己を立てて、「文學論」著述の十年計畫に著手したが、さうして丸一年以上その仕事に専心する事が出来たが、生活に於いては、また趣味に於いては、竟に西洋を乗り超える事が出来なかつたやうである。勿論是はある意味で當然の事であつた。日常生活に於いても、趣味生活に於いても、西洋と同化する事が出来なければこそ、漱石は思想的にも、自分は自分であつて、

外の何者でもないといふ事を、西洋に對して立てる事が出来たのででもあると言へる。要するに漱石は、ロンドンの風土では、どうしても榮える事の出来ないものを、生理的・本能的に持つてゐたのである。

漱石は神經衰弱のまま日本に歸つて來た。さうして漱石は神經衰弱のまま、東京の大學と東京の高等學校とに勤める事になつた。高等學校では英語を教へるのだから、言はば、熊本の繼續である。然し大學では、講義をする義務があつた。それで漱石は『文學論』を取り上げる。然し當時の學年は九月に始まつて七月に終る制度であつた爲に、漱石は『文學論』の講義を始める前に、四月から七月までの一學期間を、『英文學形式論』の講義(『別冊』参照)で充たした。然しそれは學生の間に、評判がよくなかつたらしい。明治三十六年五月二十一日、當時南京にゐた菅虎雄に宛てて、漱石は「大學の講義わからぬ由にて大分不評判……第一高は遙かにのんきに候熊本より責任なく愉快に候大學の方は此學期に試験をして見て其模様次第にて考案を立て考案次第にては小生は辭任を申出る覺悟に候もし左様なれば小生の目的通の研究をなす積に候」と書いてゐる。超えて六月十四日再び菅虎雄に宛てて、漱石は「大學ハヤメル積ダ一方案ヲ立テナケレバナラン何ノカンノツテ一學期立ツテ仕舞ツタ僕モ一度神社佛閣ノ様ナ家ニ住ンデ見度イ學問ナン

カスルナ馬鹿氣タモンサネ董商ノ方ガイ、ヨ僕ハ高等學校へ行ツテ駄辯ヲ弄^原レテ月給ヲモラツテ居ル夫デモ中々良教師ダト獨リテ思ツテ大學ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウダ、アンナ講義ヲツマケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク様ナ^ハハ教エルノガイヤダ、試験ヲシテ見ルニドウシテモ西洋人デナクテハ駄目ダヨノ近來晝寐病再發ダ^一ノ寐ルヨ博士ニモ教授ニモナリ度ナイ人間ハ食ツテ居レバソレデヨロシイノサ大著述モ時ト金ノ問題ダカラ出來ナケレバ出來ナイデモ構ハナイ天勾踐ヲ空フスルト云フ譯カネ近來南隣ノハツチヤン北隣ノ四郎チヤン背後ノ學校ノ生徒諸君日課ヲ定メテ色々ナ^ヲヤツテ居ルヨ是モ一學期結了ト云フ譯サネ」と書いてゐる。更に七月三日には、三度び菅虎雄に宛てて、「大學モ高等學校モ試験ハスンダ昨日ハ點數會議デ朝カラ晩迄引張^ラレル只黙ツテ名説ヲ謹聽スル許リダガ中々草臥ルモンダナ^一明日カラハ入學試験トクルカラ又厄介ダド^一モ人間ハ生キタイ爲ニ生キテ居ツテソ^一ンテ生キタイ爲メニ苦勞スルイクラ骨ガ折レチモ生キテ居ル方ガ善イノト見エル夫ガ高ジルトイクラ骨ガ折レテモ名譽ガトリタクナル學問ガ出來タガル金ガ欲シクナル實ニ變ナ奴サネ」……「僕大學ヲヤメル積デ學長ノ所へ行ツテ一應卑見ヲ開陳シタガ學長大氣繼ヲ以テ僕ヲ萎縮セシメタソコデ僕唯々諾々トシテ退クマコトニ器量ノワルイ話シチヤナイカ」と書いてゐる。

當時大學では小泉八雲が、その年の三月にやめて、漱石がその代りに這入つたのだといふ噂が

立つてゐた。八雲は日本人の爲に自分の職を奪はれたやうな氣持になつて、あまり好い感じがしてゐなかつたのだなどといふ話を聞いた事もある。當時英文の學生の中には、八雲の引留運動に、だいぶ奔走した者もあつたやうである。漱石の講義の評判が悪かつたのは、或は小泉八雲に對する敬慕が、漱石に對する反感みたいなものになつてゐたせゐるもあつたのではないかとも思はれる。その上小泉八雲は、當時有名な作家であつたのに反して、漱石は、俳句の作家としては相當有名でも、八雲に比べては、無名に等しい存在でしかなかつた。のみならず漱石の講義は、筆記によつて想像しても分かるやうに、次學年の『文學論』の講義の序説と言つても可いやうなもので、『文學論』と同じく、方法論的には甚だ科學的なものであつた。是が小泉八雲の隨筆風の文學論に比べて、ひどく乾燥無味に感じられ、もしくは抽象的に難解に見えたとしても、些しも不思議ではない。殊に英語の單語が澤山用ひられ、英文の引用文が非常に多かつたやうだから、ほんとに學生は手古摺つたのだらうと思はれる。一口に言へば、漱石は大學の學生の程度を、非常に高く買ひ過ぎてゐたのに違ひないのである。學生の程度を非常に高く買ひ過ぎた結果、自分が最も苦心して研究したものの結果を、そのまま、程度を下げる事なしに講義して、學生が分からないといふのを、非常に氣にしたのに違ひないのである。

『文學論』の講義に就いては、漱石の書簡は何事も語つてゐない。然し既に漱石自身が「講義の當時は余が豫期せる程の刺激を學生諸子に與へざりしに似たり。」と言つてゐる以上、さうしてその『文學論』の講義が『英文學形式論』と同じやうに、科學的方法に立脚してゐるものである以上、然も「大學ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウダ、アンナ講義ヲツマケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク様ナヲハ教エルノガイヤダ。」とあるやうに、漱石が自分の調子を下ろす事なく、自分が最も關心を持つてゐる問題を、自分の最も關心を持つてゐる方法で論じて行かうとする以上、『文學論』の講義が多くの學生から「ワカラナイ」と言はれたに違ひない事は、想像に餘りある。さうして漱石がその爲め、『英文學形式論』の講義の場合に、菅虎雄に與へた書簡に書いてあるやうな、何か遺瀨がないやうな、情ない氣持になつたに違ひない事も亦、想像に餘りある所である。勿論「學問ナンカスルナ馬鹿氣タモンサネ」といふ言葉は、あながち『英文學形式論』の講義の手ごたへがない所からのみ來たものではなかつたに違ひないし、また『文學論』の講義では必しも手ごたへがなかつたとも言ひ切れなかつたには違ひないが、然し、自分の講義が自分の豫期したほどの刺激を學生に與へ得なかつたといふ事の認識は、特にその講義が、ロンドン以來、自分の頭腦と自分の健康とを犠牲に供しても構はない意氣込みをもつて、極めにかかられた講義であつただけに、漱石にとつて、恐らく相當淋しい、悲しい認識だつた事だらう

と思はれる。「學問ナンカスルナ馬鹿氣タモンサネ」と言つても、事實は決して「學問」を捨ててしまひはしなかつた漱石の事である。自分の講義が、いくら「豫期せる程の刺激」を學生に與へなかつたとは言つても、それで怯むほど、自分の仕事に自信を持つ事の出來ない漱石ではなかつたが、それにしても自分の打ち込んでした仕事に對して、相手がそれほど響きを返さないといふ事は、十分淋しい事・悲しい事だつたには違ひないのである。

洋行から歸つてから二三年の、漱石が『猫』を書き出す前後の、漱石の身邊とその身邊に蝕まれる漱石の内面生活とは、具に『道草』の中に描寫されてゐる。ただ『道草』では、恐らく『道草』で取り扱はれようとした根本基調を強調する必要上、漱石の周圍に集つて來た弟子たちと、その弟子たちによつて漱石が得た慰藉とは、描き出されてゐない。勿論是は、漱石の歸朝當時の生活氣分から言へば、『道草』に描かれてゐる方がほとんどであり、假令當時は弟子たちから慰藉を得たとしても、それは漱石の心の底に結ばれてゐる暗い塊りを溶し去るだけの力は持つてゐなかつたには違ひないが、それにしても明治三十六年正月漱石が歸朝して以來、特に明治三十八年正月漱石が『猫』を書き出して以來、漱石の周圍には、漱石を純粹に敬愛する弟子たちが次第に集まり始め、それが訪問によつて、或は信書によつて、漱石の息ぐるしい世界に、いくらかの寛る

ぎをつけた事は、争はれなかつた。然もそれらの弟子たちは、大抵は、熊本の高等學校で漱石に教はつて、漱石の留學中に大學を卒業した者が大學に進んで來た者か、それでなければ現在大學で直接教へを受けてゐる者か、ともかく相當の教育を受けた、純眞な、若若しい、大學生か大學の卒業生であつた。漱石は『道草』第二十九の中で、さういふ青年の一人を連れて池の端を散歩する健三が、その青年の若若しさと對照して、自分が早くも老いてしまつた事を感じ、然も自分が牢獄の中で老いた事を感じ、それを青年に述懐しても、青年は少しもその述懐を理解しない寂しさを描いてゐる。勿論漱石の世界に於ける弟子たちの位置は、一面さういふ所もあつたには違ひないが、然し一面それとは別に、漱石の世界を楽しくするものとして、漱石に必要な存在でもあつたのである。

その醜い屬性の故には憎んでも、決して人間そのものを憎む事の出來ない、寧ろ人間を愛せずにはゐられない、人間の愛なしには生きてゐられない漱石は、その純眞な、若若しく一向きな愛によつて、弟子たちに引き寄せられる。いくら度度訪問を受けても、自分に差し迫つた用がない限り、もしくは差し迫つた用のある場合でさへも、漱石は喜んでその弟子たちの訪問を受けた。音信に酬るには、音信を以てした。さうして漱石は、その機會に、自分の現在の氣持や、過去の經驗や、思索の結果などを、必要に應じて表現した。特に明治三十八年正月、漱石が『猫』を

書き出して以來、雪崩を打つて溶け出した山の雪のやうに、漱石の表現欲は旺盛になり、次第に漱石の周圍に群がり來る弟子たちの數とともに、書簡の往復は頻繁となり、明治三十九年、四十年に至つては、書簡によつても、漱石は殆んど無限に、多彩な自己の内面を、弟子たちに披瀝し悉す觀を呈した。明治三十七年以來、もしくは明治三十八年以來の漱石の「書簡集」の、最も興味深い部分は、概してさういふ弟子たちに與へた書簡から成り立つてゐるのである。

勿論漱石は、漱石を敬愛する多勢の弟子たちから取り卷かれて、純眞な、若若しい敬愛を受け、その爲め決して得意になる事がなかつた。それには漱石の厭世主義は、あまりに深い所に根を下ろしてゐた。例へば明治三十九年十月十九日、『坊つちやん』を書き、『猫』を書き卒へ、『草枕』を書き、『二百十日』を書き、普通の人なら恐らく最も得意の絶頂にゐる筈の時期でも、漱石は野間眞綱に宛てて、「近來世の中に住んで居るのが小便壺のなかに浮いて居る様な氣がする。周圍が小便だから自分も嘔臭い事だらうと思ふ。／＼高等學校杯へ出ても尤も簡單で尤も純潔なるべき書生が大分アトフルである。眞正に書生らしいものは十分一位だらう。こんなものに教へるのだからどうも構はないと云ふ氣で居る。昔し小便壺のうちに居る事に氣がつかなくなつた時はもつと熱心であつた。天下の人が戯れて居るのに自分丈眞面目で居るのは醉漢の中に窮

屈にかしこまつてゐる様なものだ。未來の日本を作る青年が自己の責任もエライ事も何も知らず
にソレ／＼して居るのは天子様の爲めに御氣の毒である。」と言つてゐる。超えて十月二十日皆
川正禧に宛てては、「近頃は世の中に住んで居るのが夢の中に住んでゐる様な氣がする。どこを見
ても眞面目なものが一つもない。悉く幻影と一般タワイなものである。こんな世界に住んで眞
面目に苦しい思ひをして暮らすのは馬鹿氣てゐる。眞面目になり得る爲めには他人があまり滑稽
的である。／＼……／青年は眞面目がいゝ。僕の様になると眞面目になりたくてもともなれない。
眞面目になりかける瞬間に世の中がぶち壊はしてくる。難有くも、苦しくも、恐ろしくもない。
世の中は泣くにはあまり滑稽である。笑ふにはあまり醜惡である。」と書いてゐる。

然し漱石は一方では、或は「拜復小生の文章を二三行でも読んでくれる人があれば難有く思ひ
ます。面白いと云ふ人があれば嬉しいと思ひます。敬服する杯といふ人がもしあれば非常な愉快
を覚えます。此愉快はマニラの富にあつたより、大學者だと云はれるより、教授や博士になつ
たより遙かに愉快です。小生は君の手紙を得て此大愉快を得たのだから御禮は此方より申さなけ
ればならんと考へます」(三八・五・二五)と言つたり、或は「小生は人より物しりなりと云はる
ゝ事を好まず學者なりと云はるゝを好まず是等は皆中らざる事に候へば只赤面致すのみに候。然
し著述はよかれあしかれ著述に相違無之此はきとしたる書物に就ての批評は善惡共に悦こんで甘

受する覺悟に御座候。就中公平にして眼識ある人の賞賛は滿腔の感謝を以て拜受致候。既に確然
たる一冊の書物ありての上の事故之に對する批評は空漠たる贊辭や虛名とは異な(る)ものとの自
信有之候故に御座候。／小生は漠然として學者なり篤學なり杯云はるゝを欲せざると同時に拙稿
たりとも世に公に投げ出したるものに付ての褒辭は大に難有くアクセブとする主義に候。而も其
難有味は博士に推學されたり勳章を貰つたりするよりも遙かに優る難有味に候。／大兄は小生を
して此難有味を感ぜしめたる知己の一人なれば深く銘して繪葉書と共に此一事を永く抱懷致し可
申候」(三八・一〇・三〇)と言つたり、或は「草枕を読んで下された由難有い。其上あつと感心
してくれた所などは尤も難有い。あれはどうしても君に氣に入る場所があると思つた。今日迄草
枕に就て方々から批評が飛び込んで来る。来る度に僕は喜こんでよむ。然し言語に絶しちまつた
ものは君一人だから難有い。今日迄受取つた批評のうち尤も長く且つ眞面目なものは深田康算先
生のものである。尤も驚も感情的なものは君のである。多少けちをつけたものが二三人ある。い
づれもうれしい。僕はまとめて持つてゐる。……」(三九・九・五)と言つたり、いつまでも誠實
な讀者に誠實に感謝する事を忘れないほど、純眞な心を持つてゐたのである。その作品を敬愛す
るのみならず、その作品を超えて漱石その人を純眞に敬愛する弟子たちの誠實が、漱石を動かさ
ないで置く筈がない。事實動いたればこそ例へば鈴木三重吉の書簡に對して、漱石は中川芳太郎

に「僕のような人間が學生の一人の頭腦を是程迄にオキニバイして居るとは夢にも考へなかつた。あの手紙を読むと三重吉君は僕の事を毎日考へて神經衰弱を起した様に思はれる。僕が十七八の娘だつたら。すぐ様三重吉君の爲に重き枕の床につくと云ふ物騒な事になるのだが幸ひ吉原から買つて来た油壺なんかを乙がつて居る金やんなので、こつちにとつては藥代も入らずに濟みさうなのは先以て結構仕合せの至りである。然しいくら漱石^原だつて、金やんだつて、講師だつて、罷が生へてたつて、三重吉君からこれ程敬慕せられて難有^く思はんといふ次第のものではない。難有いなどは通過して恐ろしい位だ。三重吉君は僕の細君^原より餘程僕の事を思つて居るらしい。然もそれが學資を買いだと云ふのでもなし周旋をしたと云ふのでもなし。金を貸した事は無論ないのだから一層難有いと云はなければならぬ。僕は是で中々自惚の強い男だからある人には好かれて然るべき性質を有して居ると自信して居るがね——然しあれ程迄に敬慕され様とは氣がつかなかつた。あれは已惚以上だよ。豫期を超過する事五十五六倍だよ。……」といふやうな事を、滔滔と書き續けて、自分の興奮を正直に表現するのである。

漱石が二十五の年、子規に對して、自分は不相變厭世主義者ではあるが、「説明すべからざる一道の愛氣隠々として或人と我とを結び付るが爲」に、「此浮世に」生きてゐるのであると言ひ、

然も「此或人の數に定限なく又此愛氣に定限なく雙方共に増加するの見込」があり「此増加につれて漸々慈憐主義に傾かう」としてゐるけれども、「大體より差引勘定を立つれば矢張り厭世主義なり雖極端ならざるのみ」と言つてゐる事は、既に述べた。漱石が世を住み古すにつれて、一方漱石の厭世主義は次第に激しくなるとともに、一方漱石の「愛氣」と「或人」との數も次第に「増加」し、従つて漱石の厭世主義と慈憐主義とは、寧ろある意味では、漱石の中で、對立・抗爭する状態にあつたのではないかとさへも思はれる。然し漱石の厭世主義は、漱石がそれを表現する事によつて、多少の寛ろぎを與へられる。また漱石の厭世主義は、漱石のその表現に響きを合せた讀者（友人・弟子達の愛をも籠めて）の存在によつても、亦多少は寛ろぎを與へられる。従つて漱石の厭世主義は、漱石が作家となつてからは、次第に慈憐主義に近づいて行く傾向を示すもののやうであるが、然しその慈憐主義が眞正に漱石の世界になり切る爲には、漱石は一度自分が持つてゐたもの一切を、殆んどすつかり失つて仕舞はなければならなかつたやうに見える。それは修善寺の大患以後、——漱石が自分自身の健康に對する自信を失ひ、老を感じなければならなくなつてから、寧ろ徐ろに漱石を音訪れ始めるのである。（一一・一一・二五）

「續書簡集」

明治四十三年八月修善寺の大患以後、大正五年十二月その爲め永久に起つ事が出来なくなるまで、漱石は殆んど毎年のやうに病床の人となつた。多少の誇張を施して言へば、漱石は小説を書かない間は病氣で寝てゐたと言つて可いほど、絶えず病氣を、然も大抵は、それで命をとられる事は分かつてゐる、病氣をしてゐたのである。この事が漱石の考へ方の上に重大な影響を持つてゐた事は、言ふまでもない。

修善寺の大患が漱石にどんな事を體驗させたかは、漱石の『思ひ出す事など』が具に物語つてゐる。修善寺の大患は、漱石に死と面接させた。修善寺の大患は、漱石に老年を意識させ、老年の計を立てる事を覺悟させた。修善寺の大患は、漱石をして「人よりも空、語よりも黙」を愛せしめた。それは争ふべからざる事實である。然し一面から言へば、それによつてまだそれほどひ

どく痛振られては感じなかつた、漱石の旺盛な生活力は、假令思想的には漱石をして死を意識させ老を意識させたとしても、本能的には漱石をして、それからさほど深刻な影響を受けしめる事がなかつたやうにも見える。その上漱石は、病臥する事によつてあらゆる社會的義務から解放され、例へば小説を書いたり論文を書いたりしなければならぬといふやうな必要に迫られる事なしに、のびのびした氣持で幾日かを過して行く事が出来る境遇に置かれた爲に、反つてこの病氣を、自分に與へられた天資^{テニ}だとして、享樂する傾向も持つてゐたのである。この事に就いても亦漱石は、その『思ひ出す事など』の中で述べてゐる。明治四十三年十月三十一日、胃腸病院から夏目鏡に與へた手紙の中でも、漱石は「今のおれに一番樂になるのはからだの安靜、心の安靜である。必ずしも藥を飲んでゐる許や寐てゐる許が養生ぢやない。いやな事を聞かされたり、思ふ様に事が運ばなかつたり、不愉快な目に逢はせられたりするのは、藥の時間を間違へたり菓子一つぬすんで食ふよりも悪いかも知れない。／＼世の中は煩はしい事ばかりである。一寸首を出してもすぐ又首をちぢめなくなる。おれは金がないから病氣が癒りさへすれば厭でも應でも煩はしい中にこせついで神経を傷めたり胃を傷めたりしなければならぬ。しばらく休息の出来るのは病氣中である。其病氣中にいら／＼する程いやな事はない。おれに取つて難有い大切な病氣だ。どうか樂にさせてくれ」と言つてゐる。

「おれに取つて難有い大切な病氣だ。」と言はなければならなかつた漱石の心持を考へて見ると、いかに漱石のそれまでの生活が、ある意味で精神的の重荷から重荷へと、絶えず喘ぎ続けなければならぬ生活であつたかが、痛ましく思ひ返される。それにしても、漱石が現在是在はほど病裡の清閑を楽しむ心持になつてゐるといふ事は、それほど漱石に死が——あれほど目近に迫つて來てゐた死が——ぐつと遠のいて、あれどもなきが如きものとして感じられてゐるといふ事を意味する筈である。事實また漱石は『思ひ出す事など』の中で、「俄然として死し、俄然として吾に還るものは、否、吾に還つたのだと、人から云ひ聞かざるものは、たゞ寒くなる許である。」と言つてゐる。漱石にとつては、自分の死にかけた事が恐ろしいよりも、寧ろ自分が癒りつつある事が嬉しかつたに違ひないのである。その方が漱石にとつて、體にリアルな事だつたからである。十一月九日漱石は、ドイツにゐる寺田寅彦に宛てて、「僕は漸く輕快になつて此病院に歸臥してゐる。まづ當分は死にさうもない、喜んで呉れ玉へ。」と書いた。翌明治四十四年三月七日、鹿児島にゐる野間眞綱に宛てて、「病氣の折はわざ／＼修善寺迄遠路を呼び出した様にあたり甚だ濟まぬ事と思ひ居候定めて休暇中のプランが破壊された事と存候御氣の毒に存候、然しあれで死ぬとしたら一寸でも逢つて置く方が御互に好かつたかも知れず候」と書いてゐるのも、寧ろその、死を遠くに見やつた喜びを言外に表白してゐるものと解釋すべきであらうと思ふ。

然し是が、明治四十四年八月大阪での二度目の潰瘍となると、事情が少し違つて來る。幸ひ漱石は今度も平癒するにはしたが、然し去年と同性質の病氣に今年も亦罹つたといふ事實は、いくらそれが程なく平癒したからと言つて、漱石の心に特別に深刻に作用しないで措く筈がない。明治四十四年十月十三日漱石は、修善寺で自分の傍についてゐてくれた森成麟造に宛てて、「拜啓夫からは大無沙汰を致しました。先達は先週一週間の時日を御忘れなくわざ／＼電報を賜はり候處實は御耻しいかなあの時は大阪で又々やつつけて入院してゐたのです。／＼どうも矢張り自分の咎なのでせう、誰を恨む譯もないが、事情を御話しますとね、大阪の社から講演をたのまれて明石和歌山堺大阪の四ヶ所で喋舌つたのです、其堺あたりから少々腹が妙になつてこいつはといふ懸念も起りましたがもう一つだと思つて大阪を片付けて宿屋で寐てゐると何も食んのに嘔吐を催ふしてとう／＼胃をたゞらして夫から血が出ましたので驚ろいて湯川胃腸病院へ這入つて三週間程加養して夫から東京へ歸つて又々須賀さんにかゝりました。すると何の因果か歸京の翌日から肛門周炎とかいふ下卑た病氣になつてとう／＼切開しました。夫が悪性なので三週間後の今日もまだ細い穴が塞がらない所があつて膿が出るのです。」と書いてゐる。「どうも矢張り自分の咎なのでせう、誰を恨む譯もないが、」といひ、「何の因果か」といふ言葉の奥には、なんとも言

へない淋しい響きがある。

それだけならまだよかつたかも知れない。然しその年の十一月二十九日に、漱石は突如としてその第五女、一番末のひな子をなくしてしまふのである。漱石は日記の中に、その臨終から御通夜から納棺から御葬ひに至るまでの光景を、こまごまと書きつけ、それを後に『彼岸過迄』の中の『雨の降る日』に用ひてゐるが、その十二月三日の條には、「〇生きて居るときはひな子がほかの子よりも大切だとも思はなかつた。死んで見るとあれが一番可愛い様に思ふ。さうして残つた子は入らない様に見える。〇表をあるいて小さい子供を見ると此子が健全に遊んでゐるのに吾子は何故生きてゐられないのかといふ不審が起る。〇昨日不圖座敷にあつた炭取を見た。此炭取は自分が外國から歸つて世帯を持ちたてにせめて炭取丈でもと思つて奇麗なのを買つて置いた。それはひな子の生れる五六年も前の事である。其炭取はまだどこも何ともなく存在してゐるのに、いくらでも代りのある炭取は依然としてゐるのに、破壊してもすぐ償ふ事の出来る炭取はかうしであるのに、かけ代のないひな子は死んで仕舞つた。どうして此炭取と代る事が出来なかつたのだらう。〇昨日は葬式今日日は骨上げ、明後日は納骨明日はもしするとすれば待夜である。多忙である。然し凡ての努力をした後で考へると凡ての努力が無益の努力である。死を生に變化させる努力でなければ凡てが無益である。こんな遺恨な事はない。〇自分の胃にはひゞが入つた。

自分の精神にもひゞが入つた様な氣がする。如何となれば回復しがたき哀愁が思ひ出す度になるからである。」と書いてある。かうして死の問題が、また人生の果敢なさが、更に切實に、更に犇犇と、漱石を取り巻き始めるのである。それでも漱石は、その年の十二月の末から、翌明治四十五年の四月の末へかけて、『彼岸過迄』を書き上げた。

明治四十五年四月二十七日、即ち『彼岸過迄』を書き上げた翌翌日、漱石は野上豊一郎に宛てて、「御入院中は生憎小説に追はれしげ／＼御見舞も出来かね残念に候 此二三週間は又胃に酸が出て運動すると形勢不穩故成るべく静養の工夫致し候 夫に神経もよろしからず閉口致し候。けれども根が呑氣な生分故まあどうかなるだらうと存居候。然し大兄の方は漫性的のものでなき故成るべく一時に癒して置く事必用に候出来る丈轉地でも何でもしてゆつくり損失を取返す御工面可然と存候老生如きは損をすれば損のし損まことに心細く候」と書いた。同じ年の七月二十五日野間真綱に宛てた手紙の中にも、「小生も不相變消光たゞ病後は前と違ひ少々烈敷活動するとすぐ胃部に故障を生じやすく夫が爲め本年大阪社にて催ふしの講演も断はり申候」と書いてある。同じ年(大正元年)八月十二日の森成麟造に宛てた手紙の中にも、「何うも少し活動すると宜しくありません何だかも長くはないやうな氣がします」と書いてある。中村是公と一緒に鹽原・日光・輕井澤・上林とあるいて歸つて來た翌日、九月一日大谷纒石に宛てた手紙の中には、「からだ

が悪いと人並の活動も出来かねつれにも心配をかけ甚だ肝甲斐なき事のみ候」とあり、十一月九日皆川正禱宛の手紙の中には、「大病後どうしてもからだが丈夫にならないや」ともするとやりそこなふ是では長生は無論かうやつて生きてゐてもまあ癡人のやうなものである。」とある。

さうかうしてゐるうちに、三度目の潰瘍が来た。漱石は大正二年の四月の初めから五月の終りへかけて、二ヶ月近く床についた。漱石が初めて外出したのは、五月二十八日の事である。五月二十日に漱石は沼波武夫に宛てて、「病氣をする度に職業がへを勤むる人必ず出て参り候小生も病氣程不面目のものなき様相成候へども依然病氣にかゝり申候御憫笑被下べく候」と書き、同じ五月三十日には松山忠二郎に宛てて、「軸物の御注文にはちと避^原易致候實以ての悪筆折角頼まれば耻曝しを覺悟の上にて依頼者の芳志を空うせざる事をつとむる丈の事に候若し御入用とあれば何枚にても書き可申然し御承知の通りの病軀いつ死ぬか分らぬ故全くの處記念と覺召被下度候。だから若し生きて居れば今にうまくなつた時書き直さうといふ山氣あり従つて表装は御無用に候」と書いてゐる。五月三十一日笹川臨風宛の手紙には、「小生其後順當に快方に向ひ昨今は又人間の群に伍する次第とうぞ御喜び被下度候」とあり、六月二日森圓月宛の手紙には、「却説病氣の方は御蔭を以て又々人間世界に暫時立ち還る事と相成候先づ尋常人に近き行動をとる事を心掛居

候間乍憚御安心被下度候」とある。是を明治四十三年十一月九日、漱石が胃腸病院からドイツにゐる寺田寅彦に宛てて書いた、「まづ當分は死にさうもない、喜んで呉れ玉へ。」に比べて、此所の喜びの奥に、いかに淋しい暗い影が漂つてゐるか。殊に「いつ死ぬか分らないとか、「死にかゝつては生き還つて」ゐる自分とか、「どうかかうか露命をつな」いでゐるとか、いかに心細い言葉が、この年のこの病氣以後、當分の間、漱石の書簡の間を縫うて、絶えずちらつき出すといふ事實を考へ合せて見ても、この大正二年の三度目の潰瘍が、漱石の心にかに深刻な「ひび」を残したかは、何人にも想像するに難くないであらう。

『行人』の一郎は、「根本義は死んでも生きても同じ事にならなければ、何うしても安心は得られない。」と言つた。また人間は「是非共生死を超越しなければ駄目だと思ふ」とも言つてゐる。自分は、幾度も「死にかゝつては生き還つて」、「どうかかうか露命をつな」いでゐる人間である。自分は「いつ死ぬか分らない」といふ事が、一人の人間の眼の前に、どうにも身の躲しやうのない事實として、リアルに現前する時、その人は、必至にその問題と對決し、その問題を乗り超え、「是非共生死を超越」する仕事に、自分の全力を傾倒しようとするに違ひない。既に『行人』の解説に引用した、大正二年七月十八日中村翁宛の手紙の中で、漱石が自分は目下「何人にも没交

涉にてしかも小生には大いに必要な事……勿論社會とも家族とも誰とも直接には關係なき事柄故他人から見れば馬鹿もしくは氣狂に候へども小生の生活には是非共必要」な事に頭を使つてゐて、ひとの事どころではないと言つてゐるのは、恐らく漱石がこの問題と取つ組み合つてゐる事を、物語るものである。勿論『行人』の一郎が、「絶對」の境地に這入りたがつた事の——「是非共生死を超越」したがつた事の——根本動因を形づくるものは、自分の妻のお直の愛に對する不信であつた。漱石の根本動因は病氣である。一郎と漱石の間には、大きな相違がある。然し事實は漱石にとつてこの問題は、是が解決されさへすれば、外の一切の問題は、ひとりでに解決されて行くといふやうな、適用範圍の廣大な問題であり、且つ漱石は、それによつて解決をつけなければならぬ、外の問題を随分澤山持つてゐたのである。第一にお直が一郎の要求するが如く動かないやうに、夫人は漱石の要求するが如く動かなかつた。是は漱石の洋行中、特に明治三十五年三月十八日の、漱石の手紙によつても明白である。是がその後もずつと續いてゐた事は、漱石の爾後の作品の女性のみならず、漱石の書簡集からも、十分證據を拾ひ上げる事が出来る。第二に社會も亦、漱石を理解しなかつた。漱石は、自分を理解する事のない周圍に、寧ろ賑やかに取り圍まれて、唯一人の道を、毅然として唯一人あるいて行かなければならなかつた。この事は既に『行人』の解説に引用した『續書簡集』中の書簡第一三三三號・第一三六五號・第一三七二號・第

一四一六號によつて證明されてゐる。

『心』の先生は、先生に慕ひ寄り、とかく先生の懐に飛び込まうとする私に對して、「あなたは熱に浮かされてゐるので、熱がさめると厭になります。私は今のあなたから夫程に思はれるのを、苦しく感じてゐます。然し是から先の貴方に起るべき變化を豫想して見ると、猶苦しくなります」と言つてゐる。私が、自分はそれほど先生から信用されてゐないのかと反問すると、先生は、「信用しないつて、特にあなたを信用しないんぢやない。人間全體を信用しないんです」と答へ、「ぢや奥さんも信用なさらないんですか」と訊かれて、更に「私は私自身さへ信用してゐるのです。つまり自分で自分が信用出来ないから、人も信用できないやうになつてゐるのです。自分を呪ふより外に仕方がないので」と答へる。さうして先生は、「兎に角あまり私を信用しては不可ませんよ。今に後悔するから。さうして自分が欺むかれた返報に、殘酷な復讐をするやうになるものだから」と附け加へ、それを説明して、「かつては其人の膝の前に跪づいたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのです。私は未來の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思ふのです。私は今より一層淋しい未來の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と獨立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみ

んな此淋しみを味はわなくてはならないでせう」と言つてゐる。是は勿論「心」の先生の過去の
閱歴が人生をしか観ぜしめた結果、私に對してしか言はしめたものには相違ない。然しその奥に、
漱石がその實際生活に於いて、しか感じしか言はなければならぬものを経験させられて來た事
實が潜んでゐるといふ事を見遁がす譯に行かない。明治三十七八年の頃、あれほど純真な心持で
漱石の周圍に群がりつどつた弟子達のある者は、狎れや無節度や生意氣や無神經によつて、今で
は漱石の二頭の上に足を載せ、漱石を「侮辱」して憚らないやうにさへなつてゐたのである。

明治四十四年十月二十五日小宮豊隆に宛てて漱石は、「原稿を歸して呉れといふ端書は拜見し
たが、二十四日には社へ出る必要があるので夫迄でいゝと思つて返事を上げなかつた。／＼所で今
度ある意味から森田にやめて貰はなければならぬ事になつた。森田が居なくなれば文藝欄の編
輯者の問題が出る譯だが、僕は少し思ふ處があつて文藝欄を廢止する相談を〔編〕輯部の人として
仕舞つた。今迄は色々御世話になり又是迄骨を折つたものを放棄するのは惜しいものであるが、
社全體の紙面の改良や原稿の選擇に就いて僕が何か無遠慮の事を云はうとすると、どうしても僕
が先づ是丈の犠牲を拂つて置かなければならぬ。文藝欄を維持する積なら維持はいくらでも出
來る、又改良も出来る。然しさうすると他人の領分へは口を出し悪くなる。僕は今度池邊君が退
社したに就て或は自分も出やうかと考へたが殘る人々から事狀を聞いて見るとさう意地を通す必

要もないから居る事にした。のみならず自分の直轄してゐる文藝欄の棒を永久流して仕舞つた。
是は僕が猶將來に朝日をより好くし得る見込を抱いた爲であつて、決して自分の地位を安固にす
るため他人の云ふ通りになつたのではない。夫は君にどう思はれても構はないが、向後到底僕の
發見し得る「朝日」の點々に於て改善の身込が立たないとなつたら、多分僕はやめるだらうと思
ふ。／＼夫からもう一つは文藝欄は君等の氣焰の吐き場所になつてゐるが、君等もあんなものを斷
片的に書いて大いに得意になつて、朝日新聞は自分の御蔭で出來てゐる杯と思ひ上る様な事が出
來たら夫こそ若い人を毒する悪い欄である。君杯にそんな了見はあるまいが、近來君の行爲やら
述作に徴して見ると僕は何だか心細くなる様な點もある。あれで好いつもりで發展したらどうな
るだらうと云ふ氣が始終つけまはつてゐる。要するに朝日文藝欄杯があつて、其連中が寄り合つ
て互に警醒する事はせずに互に挑撥し會ふのも少しは毒になつてゐるだらうと考へる。それで文
藝欄なんて少しでも君等に文藝上の得意場らしい所をぶつつぶしてしまつた方が或は一時的君や
森田の樂になるかも知れない。／＼僕は向後文藝上の事に關して君等の援助を仰がなければなら
ない場合が澤山あるだらうと思ふ。現に援助を仰ぎつゝあるのに、こんな事を云ふのは甚だ失禮で
もあり諸君も氣を悪くするかも知れないが實際昨今の僕はさう感ずるより外に仕方がないのだか
ら、漱石は本當にしか感じてゐるのだと思つてくれ給へ。さうして「笑ふとも怒るともして呉れ

玉へ。／玉稿は同封で歸す。あの端書の書き方杯を兎角申すのは何だか小八釜しい様だが「闇から闇へ」杯いふ文學的形容詞は用ひない方が穩當であらう。殊に「夫は堪へられない」に至つては讀む方では一種厭な感じがする。自分の書いたものが自分の豫期した時間内に新聞に出ないのは不愉快には違ない。又其原稿がどうなつたか分らないのも不平には違あるまい。けれども夫に堪へられないといふのは自分の書いたものが左も／＼重大な論文で、夫を掲載しない新聞が左も／＼不徳義で、之を草した自分は左も／＼大家である様に讀まれる。以上の諸條項を備へないで猶且つ下らない事に堪へるとか堪へられないとかいふのは一種のセンチメ(ン)タリストか或は片寄つた文壇の流行語を故意に使用するコンゲンシヨナリストである。／僕の近來の君に注意した點は道徳的にも藝術的にも此手紙のうちに含まれてゐると思ふから、とくにそれを長く説明したのである。／原稿は五回分丈社に回つてゐた。僕は自分から請求して、悉くそれを持ち歸つた。理窟から云へば掲載の有無に拘はらず原稿料を拂はなければならぬ。が僕は君等が單に原稿料をとる爲にのみ書いてゐると思はれるのが厭だから、わざ／＼と請求しないのである。」と書いてゐる。また大正二年十一月二十五日同じ小宮豊隆に宛てては、「君の手紙は全然勘ちがひです。手紙の中に「です」とか「ません」とかいふ敬語を使ふのはあまりぞんざいに書きたくないからです。候文は習慣上さう思はないか知れないが實は大變鄭寧なものです。候文には抗議をしないで

「です」や「しません」に對して他人取扱と思ふのは誤つてゐます。日常の言語で手紙をかくのはどうもあまりひどい感じを他に起させやしないかといふ氣が起つてから私は何人に對してもあゝいふ語尾を多く使ふやうになりました。私は自分の小供には日常の言語ですら改つて斯うなさい、あゝなさいとさへ云ひます。談話より一段改つた手紙にあの語尾は禮として相應のものだらうと思ふ。／僕は偶像でないから君等が批評は何とも思はないそんな事を心配して一日も暮せるものぢやない。ヂスイリユ^原ジョンとか人と人の隔りとかいふ哲學は別問題であり又人間に普遍的な問題だから何も手紙に就てのみ云々する必要はあるまいと思つて其方は云ひません。さういふ事を手紙の書きぶりから出立して云々するのは馬鹿々々しいのです。僕にも色々わるい所があるが、君は時々今いつたやうな馬鹿々々しい所を露出する男のやうに思はれます。」と書いてゐる。——かうして第三に、弟子も亦漱石を理解しなかつた。「行人」の一郎は、「僕はもう大抵なものを失つてゐる。纔に自己の所有として残つてゐる此肉體さへ、(此手や足さへ)遠慮なく僕を裏切る位だから」と言つてゐるが、漱石も亦同じ淋しさを經驗しつつ、この淋しさから抜け出る工夫をしなければならなかつたのである。

然しさういふ底ぬけの淋しさの中にて、漱石はたじろがなかつた。漱石は、それら一切のも

のを失つたと感じてゐなほ、その失つたものの奥に新しい世界を作り上げ、その世界の中に任む事によつて、男らしく自分の淋しさを突き抜けようとする。それが一郎の所謂「絶対」の世界であり、また所謂「生死を超越」した世界である。一郎が自分の苦惱をすべてこの一點に絞り寄せたやうに、漱石も亦すべての苦惱をこの一點に絞り寄せる。さうして漱石は、『行人』のHさんが、「私は天下にありとあらゆる藝術品、高山大河、もしくは美人、何でも構はないから、兄さんの心を悉皆奪ひ盡して、少しの研究的態度も崩し得ない程なものを、兄さんに與へたいのです。さうして約一年ばかり、寸時の間断なく、其全勢力の支配を受けさせたいのです。兄さんの所謂物を所有するといふ言葉は、必竟物に所有されるといふ意味ではありませんか。だから絶対に物から所有される事、即ち絶対に物を所有する事になるのだらうと思ひます。神を信じない兄さんは、其處に至つて始めて世の中に落付けるのでせう。」と言つたやうに、一面では、積極的にこの問題を乗り越す爲の修行として、「道」に入らうと心ざすとともに、一面では、或は自然の美しさを難有く尊とく感じる事によつて、或は自分で書をかき畫をかく事によつて、或は他人の書や畫を鑑賞する事によつて、假令一時的ではあつても、「絶対に物から所有され」つつ「絶対に物を所有」して、心の「落付」きを取り復す工夫をする。自分が畫をかくのは愉快だからかくのではない、不愉快だからかくのだと漱石は言つてゐるが、その不愉快の内容には實にいろんなものがあつた

のである。

漱石が畫をかき始めたのは嚴密に言へば、明治三十六七年の頃であつた。然し是は水彩畫で、漱石の創作欲が旺盛に漲ぎり出すとともに、次第に影を潛めた。明治四十五年五月二十八日漱石は戸川秋骨に「生れて始めて畫をかいたと言つて、「最明寺殿が後向になつてあるいでゐる」畫を送つてゐるが、是は墨畫であつて、水彩畫ではなかつた。その後漱石は自發的に、ぼつりぼつりと畫をかき始めた。十一月十八日津田青楓宛の手紙に漱石は、「拜啓私は昨日三越へ行つて畫を見て來ました色々面白いのがあります。畫もあれほど小さくなると自身でもかいて見る氣になります。あなたのは一つ賣れてゐました。……今日縁側で水仙と小さな菊を丁寧にかきました。私は出來榮の如何より畫いた事が愉快です。書いてしまへば今度は出來榮によつて樂みが増減します。私は今度の畫は破らずに置きました。此つぎ見て下さい。」と書いてゐる。十一月二十五日沼波武夫宛の手紙の中でも漱石は、「私も作ばかりに熱心になりたい又は勉強したいのです。が少々頭の具合やからだの具合であんなつまらない畫などをかきます。あなた丈なら御目にかけて、答ではなかつたのですが野上君が畫をかくためつゝあなたの前まで耻を曝しました。／＼時々御遊びに御出被下さい。私はもう小説をかゝなくてはならないので辟易して居ります」と書いてゐる。

る。然し漱石が更に打ち込んで畫をかくやうになつたのは、漱石が『行人』を書きさしたまま胃潰瘍に倒れてから以後の事である。既に大正二年五月三十日林原耕三宛の手紙の中で、漱石は「……度々御手紙をいたゞきまだ一返も返事を出さず甚だ無申譯候實は少々畫に凝つて他事を閑却遂に失敬尤も碌な畫はかゝず只凝る丈也」と言つてゐる。六月二日野村傳四宛の手紙の中にも、「近頃は病後恣に閑を貪つて畫ばかりかいてゐる」と書いてある。六月十一日津田青楓宛の手紙の中には、「私はもう畫を切り上げやう／＼と思ひながらまだ」書いてゐます今度來たら又見て忠告をして下さい此間色々いつて貰つたので大變利益を得ました。といふと畫がかかるやうで可笑しいですが、近頃は中々かけますよ三日に一つ位傑作を拵えては一人で眺めてゐます、水彩畫展覽會の方も見ました。小杉未醒のスケッチが面白う御座いました。どの畫を見ても下手な自分と比較すると偉大ですどうして日本にこんな奇麗な畫をかく人が澤山あるかと驚きます」と書いてある。同じ月の十八日同じ津田青楓宛の手紙には、「小川千穂先生の畫を御送り被下難有候どうも旨いですねだれの畫を見ても感心の外なくカツ存外な思ひも寄らない所をかきます 斯うなるとあらゆるものに感服し敬服し歡喜する事が出來て甚だ愉快です 私はあれから二三枚妙なものを書きました其うち一二枚(は)必ず賞められなければ承知の出來ないものでいつか序の時又見て下さい」とある。

然し同じ年七月二日津田青楓宛の手紙に、一畫は二三日前からやめました。あまりすさむと外の事が出來ないと思つて紙の盡きたのを好機として切り上りました」と書いてある所をもつて見ると、漱石は六月の末には既に畫をかく事を一時斷念してゐるのである。是は或は「實は先達より何人にも没交渉にてしかも小生には大いに必要な事のために頭を使ひ居り夫がため人のためには一切何事をなすの勇氣も餘裕も無之」とある。七月十八日の漱石の手紙の内容と、何等かの點で關係があるのかも知れない。その七月二十日に漱石は同じ津田青楓に宛てて、「油繪の繪具を買ふ事が出來ます。いつか一所に行つて買つて下さいませんか。油繪をかいで見やうといふ心持はまだ起らないのですから決して急ぐ必要はないのですからあなたのいつでも氣の向いた時で結構であります。」と書いて居り、七月二十六日には再び津田青楓に宛てて、「拜啓先達中より繪の具などの事にて種々御配慮を煩はし恐縮の至に候……此間の撫子は大に手を加へ候夫から紫陽花を一枚描き候今日も何かと思ひ候へども何うも描く材料なく御やめに致候」と書いてゐる。漱石は二十日以後あまり時日のたたないうちに、既に油畫の具を買ひ込んで、油畫の稽古を始めたものらしい。ただ油畫は漱石には、性に合はなかつたと見えて、あまり長くは續かなかつた。それは恐らく大正二年一杯は續かなかつた。

漱石がその後、死ぬまでかき續けたものは南畫である。大正二年十二月八日、即ち『行人』の

續稿が新聞に掲載になつてから凡そ三週間の後、漱石が野上豊一郎に宛てて、「先達ては難有う私は別に岡田さんに禮状を出さないから君から宜しく願ひます……高芙蓉の畫を見てから僕も一枚がいたがどうもうまく行かない生涯に一枚でいゝから有がたい感じのする繪が描きたい山水動物花鳥何でも構はないありがたいので人が頭を下げるやうな崇高の氣分を持つたものをかいて死にたい。」と書いてゐるのでも、それが油畫でなくて南畫であつた事は、言ふまでもない事である。然もその際漱石は、大正二年十一月三十日門閨春雄宛の手紙の中で言つてゐるやうに、「私の畫といふよりも寧ろ子供のいたづら見たやうなものです。その小供の無慾さと天真が出れば甚だうれしいのですがたゞ小ぎたない所丈が小供で厭味は大人らしいから困ります。書でも畫でもかきなれないと一通りのものは出來ず。又書きなれると黒人くさくなつて厭なものです。従つてどうして好いか解らない氣持にもなるのである。

『行人』の一郎は、「斯うして髭を生やしたり、洋服を着たり、シガーを銜へたりする所を上部から見ると、如何にも一人前の紳士らしいが、實際僕の心は宿なしの乞食見たやうに朝から晩迄うろ／＼してゐる。二六時中不安に追ひ懸けられてゐる。情ない程落付けない。仕舞には世の中で自分程修養の出來てゐない氣の毒な人間はあるまいと思ふ。さういふ時に、電車の中やなにか

で、不圖眼を上げて向ふ側を見ると、如何にも苦のなさうな顔に出つ食はす事がある。自分の眼が、ひとたび其邪念の萌さないほかんとした顔に注ぐ瞬間に、僕はしみ／＼嬉しいといふ刺戟を總身に受ける。僕の心は早魃に枯れかゝつた稻の穂が膏雨を得たやうに蘇へる。同時に其顔――何も考へてゐない、全く落付拂つた其顔が、大變氣高く見える。眼が下つてゐても、鼻が低くつても、雜作は何うあらうとも、非常に氣高く見える。僕は殆んど宗教心に近い敬虔の念をもつて、其顔の前に跪づいて感謝の意を表したくなる。自然に對する僕の態度も全く同じ事だ。昔のやうに唯うつくしいから玩ぶといふ心持は、今の僕には起る餘裕がない」と言つてゐる。また一郎は別の所で、「僕は死んだ神より生きた人間の方が好きだ」と言ひ、「車夫でも、立ん坊でも、泥棒でも、僕が難有いと思ふ刹那の顔、即ち神ぢやないか。山でも川でも海でも、僕が崇高だと感ずる瞬間の自然、取りも直さず神ぢやないか。其外に何んな神がある」と言つてゐる。

漱石は『彼岸過迄』の中で、「一筆がきの朝貌」のやうな女中の作を點綴して、須永に「尊といふ感じを起」さしめた。『行人』では、「宅中^{うちぢゆう}で一番慾の寡ない善良な」お貞さんとお貞さんをそのまま男にしたやうな日さんとを點綴して、沸きたぎる一郎の頭の中に清爽の氣を吹き込んだ。漱石の畫も亦、同じやうに「尊といふ感じを起」させる所を持つてゐる。技巧から言へば、漱石の畫は、素人の域を脱しないには、違ひない。形も無論しつかり攫めてはゐない。然し漱石の畫は、

色が美しい。色と色との對照と調和とから來る、全體の感じが、柔らかく、暖かく、高い感じである。かういふ世界が自分の畫筆の先から次第にその姿を現はして來る以上、漱石がそれを樂しとし、また漱石がいつかはこの世界が自分の世界の全部を領有して、自分の世界を、拘泥のない、自由で、美しく、高い世界にしてくれる日があるに違ひない事を、期待しない筈がない。然もこの期待は當然漱石に、嶮難な「道」を征服するに必要な、勇氣を與へる。漱石が大正三年三月二十九日、津田青楓に宛てて、「まだ修禪寺に御逗留ですか 私はあなたが居なくなつて淋しい氣がします面白い畫を澤山かいて來て見せて下さい金があつてからだが自由ならば私も繪の具箱をかついで修善寺へ出掛たいと思ひます 私四月十日頃から又小説を書く筈です 私は馬鹿に生れたせむか世の中の人間がみんないやに見えます夫から下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押して行きます、丸で梅雨の天氣が晴れないのと同じ事です自分でも厭な性分だと思ひます／＼／世の中にすきな人は段々なくなり、さうして天と地と草と木が美しく見え、てきます、ことに此頃の春の光は甚だ好いのです、私は夫をたよりに生きてゐます／＼／皿と鉢を買ひました。もつと色々なものを買ひたい、藝術品も天地と同じ樂みがあります」と書いてゐる事は、既に引用したが、漱石は、その後凡そ三週間で書かれ出した『心』で、自分の中に巢喰つてゐた私の爲に終生の十字架を背負はなければならなかつた者の、崇高な嗜みの生活を描

き出した。「世の中にすきな人」が「段々なくな」つて行き、「天と地と草と木が美しく見え」、皿と鉢といふやうな「藝術品も天地と同じ樂み」を自分に與へてくれるものと感じ、「春の光」を「たよりに生きてゐ」る漱石は、事實さういふものに力づけられ、自分の中の、「下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押して行き」「丸で梅雨の天氣が晴れないのと同じ」「厭な性分」を掘り起し掘り返しつ、其所から出来るだけ早く脱却しようとするのである。漱石は一時は、もう仕事にとりかからなければならぬから畫をやめるとか、あまりすさむといけないから畫はかかない事にしたとか、畫をかく事を何か悪い事をしてゐるやうに感じてゐるらしい口吻を漏らしてゐたが、後にはさういふ事を全然言はなくなつた。是はさういふ世界が漱石の生活にとつて、必然の世界である事を、漱石がはつきり認識したからであるに違ひない。『明暗』を書いてゐる時には、畫の世界が漢詩の世界に代つた貌になつてゐるが、漱石は其所では、漢詩を作る事が當然の事のやうな顔をして、人にも手紙に書いてやつてゐるのである。

明治四十年十一月に書かれた『鶏頭』序の中で、禪を解釋して、漱石はかう言つてゐる。——「禪坊主の書いた法語とか語録とか云ふものを見ると魚が木に登つたり牛が水底をあるいたり怪しからん事許りであるうちに、一貫して斯ふ云ふ事がある。着衣喫飯の主人公たる我は何物ぞと

考へて煎じ詰めてくると、仕舞には、自分と世界との障壁がなくなつて天地が一枚で出来た様な虚靈皎潔な心持になる。それでも構はず元來吾輩は何だと考へて行くと、もう絶體絶命につきもさつちも行かなくなる、其所を無理にぐいぐい考へると突然と爆發して自分が判然と分る。分るとかうなる。自分は元來生れたのでもなかつた。又死ぬものでもなかつた。増しもせぬ、減りもせぬ何んだか譯の分らないものだ。／＼しばらく彼等の云ふ事を事實として見ると、所謂生死の現象は夢の様なものである。生きて居たとて夢である。死んだとて夢である。生死とも夢である以上は生死界中に起る問題は如何に重要な問題でも如何に痛切な問題でも夢の様な問題で、夢の様な問題以上には登らぬ譯である。従つて生死界中にあつて最も意味の深い、最も第一義なる問題は悉く其光輝を失つてくる。殺されても怖くなくなる。金を貰つても難有くなくなる。辱しめられても恥とは思はなくなる。と云ふものは凡て是等の現象界の奥に自己の本體はあつて、此流俗と浮沈するのは徹底に浮沈するのではない。しばらく冗談半分に浮沈して居るのである。いくら猛烈に怒つても、いくらひい／＼泣いても、怒りが行き留りではない、涙が突き當りではない。奥にちやんと立ち退き場がある。いざとなれば此立退場へいつでも歸られる。しかも此立退場は不増である、不減である。いくら天下様の御威光でも手のつけ様のない安全な立退場である。此立退場を有つて居る人の喜怒哀樂と、有たない人の喜怒哀樂とは人から見たら一様かも知れない。

集簡書續

いが之を起す人之を受ける人から云ふと莫大な相違がある。従つて流俗で云ふ第一義の問題も此見地に住する人から云ふと第二義以下に墮ちて仕舞ふ。従がつて我等から云つてセツバ詰つた問題も此人等から云ふと餘裕のある問題になる。——勿論是は漱石が、まだ死に直面しない時分に考へた禪の辯である。然し漱石が死に直面したしなかつたに拘はらず、是が凡その方向に於いて、漱石の晩年の考へ方と共通する所を持つてゐる事は争はれない。大正三年十一月十四日、漱石が林原耕三に宛てて、「拜復 私が生より死を擇ぶといふのを二度もつゞけて聞かせる積ではなかつたけれどもつい時の拍子であんな事を云つたのです然しそれは嘘でも笑談でもない死んだら皆に柩の前で萬歳を唱へてもらひたいと本當に思つてゐる、私は意識が生のものであると考へるが同じ意識が私の全部とは思はない死んでも自分〔は〕ある、しかも本來の自分には死んで始めて還れるのだと考へてゐる 私は今の所自殺を好まない恐らく生きる丈生きてゐるだらうさうして其生きてゐるうちは普通の人間の如く私の持つて生れた弱點を發揮するだらうと思ふ、私は夫が生だと考へるからである 私は生の苦痛を厭ふと同時に無理に生から死に移る甚しき苦痛を一番厭ふ、だから自殺はやり度ない 夫から私の死を擇ぶのは悲觀ではない厭世觀なのである 悲觀と厭世の區別は君にも御分りの事と思ふ。」と言つた事は、既に屢引用したが、「意識が生のもすべてであると考へるが同じ意識が私の全部とは思はない死んでも自分〔は〕ある」といふ漱石の

考へ方は、少くとも漱石がさう理解してゐた、禪の考へ方——「現象」と「本體」との考へ方から來てゐるのである。然し「本來の自分には死んで始めて還れる」といふ考へ方も亦、禪の考へ方であるかどうかは、私には分らない。ただかう考へる事によつてのみ漱石は、思想的には、生と死とを一貫し、「死を人間の歸着する最も幸福な状態」として受け取る事が出来るやうになつたのだから、それが禪の考へ方であるなしに拘はらず、是が漱石にとつて、漱石一流の——インディヂュアルな、またネセサリーなものであつた事だけは、疑へない。思ひなしかも知れないが、この後の漱石は人人に、あまり自分の健康の事を、とやかく愚癡めかして、報告してやつてゐないやうなのである。あつてもそれは、「あなたの病氣は如何ですか随分御注意をなさいませ私に死につゝさうして生きつゝあります」(三・一二・一〇・渡邊和太郎宛)とか、「今年は僕が相變つて死ぬかも知れない」(四・一・一・寺田寅彦宛)とか、「胃の方は宿痾だから癒らんけれども今はまあ無事に済んでゐます」(四・一・二〇・鬼村元成宛)とか、「私は若い人が死ぬのを甚だ悲しく考へては自分の生きてゐるのが濟まないと思ふ事もあるのです」(四・二・一三・門間春雄宛)とか、「私はあなたよりいくつ年上か知りませんがあなたが立派な師家になられた時あなたの提唱を聴く迄生きてゐたいと願つてゐます其時もし死んでゐたらどうぞ私の墓の前で御經でも上げて下さい又間に合つたら葬式の時來て引導を渡して下さい私に宗旨はありませんが私に

好意をもつてくれる偉い坊さんの讀經が一番ありがたいと考へます」(四・四・二二・富澤敬道宛)とか、「拜復いつも御無沙汰をしてゐます近頃講演は殆んど遣らぬ事に自然なつて仕舞ました是は小生の無精と時間のないのと夫を知つて頼む人が來なくなつたからです先年も謝絶今度も御斷りでは甚だ濟みませんが右の譯で中々遠方へ出掛ける勇氣も餘裕も時間も根もありませんからどうぞ御勘辨を願ひます小生は旅行するといつても病氣をします今春も京都へ行つて寝ましたまあ癩人の部に屬すべき人間です」(四・九・三〇・菊池謙二郎宛)とか、言葉は今までとは、あまり違はない言葉を使つてはゐても、その言葉を奥から照らし出すものは、寧ろ明るい感じである。例へば同じ「癩人」といふ言葉でも、此所の「癩人」の奥には、大正元年十一月九日皆川正禱宛の手紙の中の「癩人」のやうな、苦いデスベレートなものが含められてゐない。少くとも此所の「癩人」といふ言葉を使ふ漱石の心持は、透き通つて、客觀的になつてゐる。

大正四年六月十五日、漱石が『道草』を新聞紙上に連載し出してから十三日目、武者小路實篤に宛てて、漱石は「私もあなたと同じ性格があるので、こんな事によく氣を惱ませたり氣を腐らせたりしました。然しこんな事はいつ迄經つても續々出て來て際限がないので、近頃は出来る丈これらに超越する工夫をして居ります。私は随分人から悪口やら誹謗を受けました。然し私は黙

然としてゐました。猫を書いた時多くの人は翻案か、又は方々から盗んだものを並べたのだと解釋しました。そんな主意を發表したものとさへあります。／武者小路さん。氣に入らない事、癡に障る事、憤慨すべき事は塵芥の如く澤山あります。それを清める事は人間の力で出来ません。それと戦ふよりもそれをゆるす事が人間として立派なものならば、出来る丈そちらの方の修養をお互にしたいと思ひますがどうでせう。／私は年に合せて氣の若い方ですが、近來漸くそつちの方角に足を向け出しました。時勢は私よりも先に立つてゐます。あなたがそちらへ眼をつけるやうになるのは今の私よりもずつと若い時分の事だらうと信じます。」と書いた。是も既に引用した所である。「行人」の一郎が最後に到達した地點は、「心」の先生を通過して、現在『道草』を取り扱つてゐる、漱石のこの地點まで發展する。死が「人間の歸着する最も幸福な状態」であると観じる事によつて、自分の生と死とを連結し、目睫に迫る死の影から脅かされるどころか、自分の生が死によつて初めて完成される事を信じようとするやうになつた漱石は、自分をはつきりした道理の世界に立てながら、なほ且つ道理に外づれて動く世界を、「それと戦ふよりもそれをゆるす事が人間として立派な」事であると考へるのである。漱石は、人を憎むよりも前に、人を憫まうとする。明治二十四年、二十五の年、漱石が子規に宛てて、「僕前年も厭世主義今年もまだ厭世主義なり嘗て思ふ様世に立つには世を容るゝの量あるか世に容れられるの才なかるべからず御

存の如く僕は世を容るゝの量なく世に容れらるゝの才にも乏しけれどどうかか食ふ位の才はあるなりどうかか食ふの才を頼んで此浮世にあるは説明すべからざる一道の愛氣隠々として或人と我とを結び付るが爲なり此或人の數に定限なく又此愛氣に定限なく雙方共に増加するの見込あり此増加につれて漸々慈憐主義に傾かんとす然し大體より差引勘定を立つれば矢張り厭世主義なり唯極端ならざるのみ」と書いてゐる事は、既に前にも指摘したが、漱石の厭世主義とその厭世主義を背景に持つ慈憐主義とは、凡そ二十五年を隔てて、かういふ内容のものになつて來るのである。――漱石は只管に人間を愛した。さうして漱石は、人間を愛したが故に、惱んだ。惱むとともに、人間を憎まざるを得なかつた。然し憎んでも尙憎み徹す事が出来ないほど、人間を愛せずにもなれなかつた漱石は、その人間を「ゆるす事」によつて、その人間を愛し続けようとする。さうして、もし自分が人間を「ゆるす事」が出来ないならば、「ゆるす事」によつて人間を引き上げる事が出来ないならば、それは寧ろ自分の愛が――自分の修行が足りないせゐであると考へて、一層「道」に深入りしようとするのである。

大正四年四月十九日漱石が鬼村元成に宛てた手紙の中には、「私は禪學者ではありませんが法語類(ことに假名法語類)は少し讀みました然し道に入る事は出来ませんでしたの凡夫で恐縮してゐます」といふ、一節がある。大正五年十一月十日、既に『明暗』が紙上に連載されて第百六十回

うに見える。然も漱石は四度目の潰瘍で倒れ、竟に再び起つ事が出来なくなつてしまふのである。

(一二・一・二三)

に近づかうとしてゐるとき、漱石は同じ鬼村元成に宛てて、「私は私相應に自分の分にある丈の方針と心掛で道を修める積です。気がついて見るとすべて至らぬ事ばかりです。行住坐臥ともに虚偽で充ち／＼てゐます。耻づかしい事です。此次御目にかゝる時にはもう少し偉い人間になつてゐたいと思ひます。あなたは二十二私は五十歳は二十七程違ひます。然し定力とか道力とかいふものは坐つてゐる丈にあなたの方が澤山あります。」と書いてゐる。越えて五日、十一月十五日に漱石は富澤敬道に宛てて、「變な事をいひますが私は五十になつて始めて道に志さす事に氣のついた愚物です。其道がいつ手に入るだらうと考へると大變な距離があるやうに思はれて吃驚してゐます。あなた方は私には能く解らない禪の専門家ですが矢張り道の修業に於て骨を折つてゐるのだから五十迄愚圖々々してゐた私よりどんなに幸福か知れません、又何んなに特勝な心掛か分りません。私は貴方方の奇特な心得を深く禮拜してゐます。あなた方は私の宅へくる若い連中よりも遙かに尊とい人達です。是も境遇から來るには相違ありませんが、私をもつと偉ければ宅へくる若い人ももつと偉くなる筈だと考へると實に自分の至らない所が情なくなります。」と書いてゐる。漱石が自分で「自分の至らない所が情な」と思へば思ふほど、漱石の愛は無限に深まり、漱石の世界は無限に高まつて行つた。漱石が自分のモットーとして、夢寐の間にさへ忘れる事のなかつた「則天去私」の世界を、完全に獲得出来る日は、漸くにして漱石に近づいたや

「別冊」

決定版『漱石全集』別冊には、漱石の書き入れ本の書き入れと、漱石の講義及講演の筆記で漱石の校閲を経てゐないものと、漱石の談話筆記と、漱石の蔵書目録とが收められる。その後の発見にかかる漱石の書簡・俳句・文章も亦此所に、「補遺」として採録されてゐる。この「別冊」本来の内容が、すべての部門に互つて、前とは見違へるほど豊富になつてゐるのは、特に岩波書店の長田幹雄の努力である。談話筆記の如きに至つては、無慮五十の新資料を加へた。

『カーライル博物館所蔵カーライル蔵書目録』は、漱石の『カーライル博物館』が發表された翌月、即ち明治三十八年二月、同じ『學燈』に掲載されたものである。是はカーライルの蔵書目録に過ぎないといふ理由で、是までの全集には採録されなかつた。然し『カーライル博物館』の中で、漱石は「……後ろの部屋にカーライルの意匠に成つたといふ書棚がある。夫に書物が澤山

詰つて居る。六づかしい本がある。下らぬ本がある。古びた本がある。……夫から二階へ上る。こゝに又大きな本棚が有つて本が例の如く一杯詰つて居る。矢張り讀めさうもない本、聞いた事のなささうな本、入りさうもない本が多い。勘定をしたら百三十五部あつた。」と書いてゐる。それほど漱石が心を入れて見た本ではあるし、多少漱石の言葉も添うてゐるのだから、今度敢て此所に採録する事に決定された。

「補遺」の中の『文壇の趨勢』は、明治四十二年一月の『趣味』に掲載され、これまでの全集では、談話筆記の中に這入つてゐたものである。然るに東北帝國大學教授村岡典嗣の注意で、愛知縣西尾町岩瀬文庫所蔵の漱石自筆の原稿といふのを調べて見ると、この『文壇の趨勢』は、まさしく漱石自身によつて書かれた原稿であつた。それで是は、「談話筆記」の群の中から引き抜かれ、とりあへず「補遺」の中に編入された。是は恐らく漱石が、談話筆記に眼を通して見ると、それがあまりに自分の意を悉してゐなかつたので、全部書き直してしまつたものに違ひない。

同じやうな疑ひのあるものに、同じ雑誌の明治四十一年一月號に載つた、『愛讀せる外國の小説戯曲』がある。少くとも此所のメーテルリンクの戯曲論の翻譯は、漱石の筆になつたものに違ひないのである。是ほどの名文が一雑誌記者に書ける筈がない。のみならず私自身、漱石がこの

談話筆記に手を入れてゐる所に行き合はせたやうな、かすかな記憶さへ持つてゐるのである。ただ是には、『文壇の趨勢』の場合のやうな、確とした證據がなかつた。その上メーテルリンクの戯曲論以外の部分が、漱石の筆でなかつたとすれば、全部を漱石のものとして取り扱ふ譯にも行かない。旁是は元通り、談話筆記の中に入れて置くより致し方がないのである。

同じやうな事が、明治四十四年二月二十四日と三月七日とに『東京朝日』に掲載された、『博士問題』と『博士問題の成行』とに就いても言へる。もつとも『博士問題』の方は、當時の筆記が、『東京朝日』の社の人によつて保存されてゐる。漱石はその筆記に眼をとほし、凡そ六七分の程度、自分でそれに、字を入れたり書き直したり書き加へたりしてゐる。『博士問題の成行』の方には、さういふ、證據が残つてゐないから、なんとも確かな事は言へないが、然し是は或はもつと漱石の筆が加つてゐるか、さうでなければ、全然漱石の筆になつたものではないかとさへも思はれる。然し是もたださう想像されるだけで、文體以外、別にはつきりした證據はないのである。従つて是を、思ひ切つて全部漱石のものであると斷定する譯にも行かない。その上、もし是が全部漱石のものであつたとしても、漱石は是を記者の立場に立つて書き、夏目漱石の立場に立つて書いたものでないとも、言へなくはない。矢張り談話筆記の場所に置いておく方が、安全なのかも知れないと思ふ。

外に明治四十二年八月十日と九月三日とに『國民新聞』に載つた『文士の八月』と『執筆 時間、時季、用具、場所、希望、經驗、感想等』とに對する漱石の應答も、多分に漱石によつて書かれたものらしい、匂ひを持つてゐる。然し當時『國民新聞』では、同じやうに往復はがきを用ひて答へを募つた問題でも、記者を派して漱石の答へを筆記させてゐる例も、外に幾つかあるのだから、確證のない限りは、是も亦談話筆記の中から抜き出してしまふ譯に行かない。

漱石が『猫』を書いて有名になつた時分は、今日の座談會の筆記のやうに、多くの雑誌が、争つて名士の談話筆記を掲載した時期であつた。その爲め當時の雑誌記者の仕事は、名士を訪問してその談話を取つて來るといふ事が、重なる仕事であるやうな觀を呈した。(それだから『野分』の道也先生は、雑誌記者として、中野春臺のやうな若造の所へも、談話を筆記しに行くのである)。従つて漱石が、世間的に有名になればなる程、漱石の許には、さういふ意味で、多くの雑誌記者が集つた。正直で親切で、頼まれれば厭とは言ひかねる漱石は、別に厭な顔もしないで、一一その要求に應じた。

勿論中には、談話をしてくれともなんとも言はずに、ただ遊びに來たやうな顔をして、話を聴いて行つては、それを雑誌に掲載するやうな記者もゐるにはゐたのである。例へば明治三十八年

八月十九日、漱石が高田梨雨に宛てて、「先日新潮社の高須賀淳平といふ人が來ましてね、一夕雑談をやつたら、先生すぐ是を文章にして「みづまくら」夏目漱石など、號して此度の新潮へ載せたんですがね。其内に神泉に出た君の春の夜といふ新體詩の批評がまぐれ込んで居るが夫で見ると何だか君を故意に罵詈した様で甚だ恐縮の至ですがね。是は淳平君の口氣が少々悪るので僕の主意ではないのですよ。あんなつまらない話をこんな口調で載せ様とは思はなかつた。かうなつては僕から君にあやまるより仕方がない。どうか御勘辨下さい。尤も春の夜の悪口は少々申しましたよ。／＼新潮を一部御覽に入れます。他日御面會の節は改めて閉口します。」と書いてゐるやうなのが、それである。それでも漱石は、明治三十八年八月の『新小説』に載つた自分の談話筆記『戦後文界の趨勢』の終に、「春陽堂の本多直次郎君が來て戦後の文壇に對する所感をきいた」と云ふから話したら、本多君が筆記して新小説にのせた。本多君の文章は余の文章より旨い様だ。こんなものをつて置くのは後日よんで見て面白いものだ。」と書きつけてゐるやうに、自分の意見が、格別自分の時間と精力とを消耗することなしに、纏め上げられ、世間に發表され、さうしてそれが後日に残る事に、多少の興味を持つてゐたものであらう。暫くの間は、乞はれるままに、談話の筆記をさせ續けた。

一方から言へば漱石は、『猫』を書き出して以來、創作の面だけで世間と接觸し續けてゐたので

ある。漱石の談話は、或は漱石の批評欲の現はれである、見る事も出来るのではないかと思はれる。然し筆記は、いくらそれが上手な筆記であつても、自分の言はうとする所を、決して手落ちなく表現し得るものではない。多くの場合それは、寧ろ自分の主意を歪め、自分に言はない事を言はせ、自分の言ひたかつた事を落し、何所かに面影は残つてゐても、結局自分のカリカチュールを世の中に示すにしか過ぎないやうな事に、なり勝たぬものである。明治四十年二月の『新潮』に載つた『漱石一夕話』の中には、「僕の書齋の紹介がこんな大袈裟なことになつて、其末が印材は商人なら二十圓といふのだが八圓五十錢にして置くから「仰せつけられい」といふやうな始末さ。いろんな事もやれぬものだ。それにをかしいのは、或雑誌記者が僕に何か話せといふので、子供時代の話をしたら、其雑誌に出たのを後から見たら、飛んでもない、いなせなお兄いさんになつてゐたのなぞもある。」とある。是は恐らく『趣味』に出た『僕の昔』の筆記に對する、漱石の不満を洩したものに違ひない。その不満が漱石をして、談話筆記に一往眼を通す事が必要を感ぜしめ、ひいては漱石をして、その翌年、即ち明治四十一年一月に、同じ『趣味』に載つた『愛読せる外國の小説戯曲』に加筆する事を餘儀なくしたものでないかと、想像せしめるのである。が、それはともかく、そのうち漱石の談話筆記が、つぎつぎにいろんな問題を惹き起し、竟に漱石をして、談話筆記といふもの一般に就いて、眞面目に、根本的に考へて見る必要を感ぜしめる

に至るのである。

明治四十一年十月の『早稲田文學』に載つた漱石の『文學雜誌』は、田山花袋の冷評の的となつた。漱石はその爲め自ら筆をとつて『田山花袋君に答ふ』を書かなければならなかつた。明治四十一年十月七日の『國民新聞』に載つた『専門的傾向』は、同日漱石をして『國民新聞』社内文學部に宛てて、手紙（書簡第八二七號）を書かしめるべく餘儀なくした。明治四十二年一月十二日、同じ『國民新聞』に載つた『小説に用ふる天然』は、それに對する日高只一の駁論となつて、漱石に『コンラツドの描きたる自然に就て』を書かしめた。かういふ經驗がこれだけ重なれば、漱石でなくても、誰でも、談話筆記の意味に就いて考へて見ずにゐられなくなるに違ひない。それも明治四十二年一月の『趣味』に載つた『文壇の趨勢』のやうに、自分の氣に入らない筆記は、すべて自分で書き直しさへすれば、全責任を自分一人で背負ふ事も出来る。然し外にちやんとした自分の本職を持つてゐる者が、一一さういふ事をするといふ事は、その爲め莫大の時間と努力とを費して、本職を犠牲にする覺悟を立てなければならぬといふ事である。——かうして漱石は、爾後、從來からの行掛りで已むを得ない雑誌の外は、一切談話はしない事に決心する。

明治四十二年二月二十一日漱石は安成二郎に宛てて、「近來雜誌に諸家の談話を掲載する事流行なれどあけて見るとつまらぬもの多く購買者は色々な名が行列して居るのでだまされて買ふと

一般に候。甚だよろしからぬ弊風と存候。それからもう一つは青年子弟があんな馬鹿氣な談話を
見て所謂文學者の談話意見とはこんなものかと思ひ込みたまはゞ骨の折れた研究に價する論文杯
が出ても始めから面倒がつて眼さへ觸れぬ事に候。是は雜誌にも責任あれどはなす方にも責任有
之小生は深く此無責任の談話をはづるの結果從來の行掛上不得已特別の關係ある雜誌にあらねば
はなしを御免蒙る方針を立て候。それからもう一つは自分がいそがしくて一々雑誌記者に談話を
して居る事が出来ぬのも原因の一つに候。時々談話に誤謬があつて人に迷惑を及ぼすのも原因に
候。」と書いた。超えて二日、二月二十三日にも同じ安成二郎に宛てて、漱石は「小生の特別の緣
故ある雜誌と申すはホト、ギス其他二三從來の關係上已を得ざるものを指す意味に候。其他の雜
誌はさきに申上たる理由にて今度より段々御斷わりを致さうと決心せる矢先故甚だ御氣の毒なれ
ど談話は掲載の義は御容赦にあつかり度と存候。小生身心閑適にて充分自己の意見をまとめて一
々訪問記者の御満足に參る様出來候へば始めよりかかる氣の毒な事は誰にも口外せずして濟む次
第に御座候」と書いてゐる。さうして事實この時以來漱石は、自分に「特別の緣故ある雜誌」の外、
自分の談話を掲載する事を、斷り徹すのである。明治四十二年三月以降『國民新聞』・『新小説』・
『朝日新聞』・『能樂』・『反響』・『俳味』・『日本及日本人』以外に、漱石の談話を掲載したものは、
殆んどないと言つて可い。明治四十二年三月を境として、それ以前の凡そ五年間の談話筆記の數

とそれ以後の凡そ八年間の談話筆記の數とを比較しても、前者は二倍以上の多きに達してゐる。その後の漱石の談話が『朝日新聞』に掲載されてゐるのは、漱石がその社員であるのだから、「特別の縁故」である事は、説明を要しない。『國民新聞』では、當時高濱虚子が文學欄を擔任し、野上白川・島田青峯がその下働らきをしてゐた。是も「特別の縁故」である。『新小説』は本多嘯月の編輯である。『能樂』は坂元雪鳥が關係してゐた雑誌である。『反響』は森田草平と生田長江との雑誌である。『俳味』は沼波瓊音の雑誌である。『日本及日本人』は、恐らく寒川鼠骨の關係だらうと思ふ。『名士禪』はどういふ關係からか分らないが、『枯木』の著者本間久は、前にも漱石に『名著新譯』の序文を書いてもらつた、本間久四郎と同一人ではないかと思ふ。『學生』の談話は、目的が目的であつたし、筆記者が西村醉夢であつた爲かとも思はれる。

談話は筆記者の良否によつて、面白くもなれば面白くもなる。然も漱石の談話の筆記者はまちまちで、頭の良いのもあれば頭の悪いのもあり、横著なのもあれば謹嚴なのもあり、私の多いのもあれば私のないのもあつて、例へばエッケルマンが筆記したゲーテの談話のやうなものを、此所に期待する事は難いけれども、然しともかくも是は、漱石に向き合つた人間が直下に漱石の聲を聞きつつ、筆を走らせて作り上げた筆記である。此所には何等かの點で漱石のゐないものは

なく、何等かの點で漱石を感じさせないものはない。その上此所には、漱石も相當考へを纏めて談話し、筆記者も相當一所懸命になつて漱石の言葉を捉へ、或は漱石の校閲を経、従つて其所には、漱石の作品や漱石の生活を明らかにする上に、非常に参考になるものに纏まり上がつてゐるものも、随分澤山あるのである。

例へば漱石は、書簡第四〇〇號で「人工的インスピレーション」といふ事を説き、書簡第五八三號では「僕少々小説をよんで是から小説を作らんとする所也愈人工的インスピレーション製造に取りかゝる。／＼花食まば篤の糞も赤からん」と書いてゐるが、その「人工的インスピレーション」の如何なるものであるかを詳しく説明するものは、明治三十九年十月の『新潮』に載つた『人工的感興』である。是によつて我我は、漱石の頭の働き方にどういふ特徴があつたかを知る事が出来るとともに、漱石が讀書を或場合どういふ風に利用してゐたかを、知る事が出来る。また例へば明治三十九年六月の『中學文藝』に載つた『落第』や、明治四十年二月の『趣味』に載つた『僕の昔』や、明治四十二年一月の『中學世界』に載つた『私の經過した學生時代』などによつて我我は、『滿韓ところ／＼』や『永日小品』や『硝子戸の中』や『道草』の中などに描き出された漱石の少年時代とともに、寧ろそれらのものを補充するものとしての、漱石の少年時代を、具に知ることが出来るのである。中學時代に漱石が落第して、それから發憤したといふ話、もしくは